飽くなき赤色

秋折紀織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
飽くなき赤色

【Ｎコード】
Ｎ５１３８Ｃ

【作者名】
秋折紀織

【あらすじ】
ありがちで申し訳ないのだが、連続殺人事件。そこに親友が被害者として名を連ねた。その事に泣けない自分が、制御不能の行動を取る。これから……何処に行こう？【一応の完結を迎えました。同一作者作品から『飽くなき赤色－ＲｅｄＦｒａｃｔｉｏｎ－』にて過去話、後日談等の続きを書いております】

#01：Ａｃｔｉｏｎ（アクション）（前書き）

気にかけて頂けたら幸いです。
楽しんで頂けたら嬉しいです。
続きが気になって頂ければ重畳です。

#01：Ａ－ｃｔｉｏｎ（アクション）

色褪せていた。
いや。色はある。ただ……赤いだけ。
つまり、青が黄が緑が紫が黒が白が、色褪せている。
……赤はもう、飽きた。

飽くなき赤色。

事件が起きた。
――――この度……俺、神原秋介（カンバラ シュウスケ）にとっての唯一無二の親友である、仲谷若菜（ナカタニ ワカナ）が死んだ。
死因は刺傷。状況から見て、明らかに殺人だった。
若菜だけじゃない。仲谷の家の人が全員等しく殺された。
……これで、若菜たちを含めて。二十一人目だった。
ここ数日、世間を騒がせている連続殺人。その被害が、若菜を襲ったのだった。

「はい。皆、顔を上げて下さい」
シンと静まり返った教室に担任の声が響いた。その声を受け、ほぼ全ての生徒が黙祷を止め、顔を上げる。
泣いているのか俯いたまま呻きを漏らす者も居た。
俺のすぐ後ろの席。若菜が昨日まで座っていた席。
昨日までそこに感じていた若菜の気配はもう一切存在しない。
「朝の全校朝会で校長先生や他の先生方が言っていたように、夜は絶対に出歩かず、家の人とも充分に話し合って気をつけるようにしてください」

担任の声も心なし震えているように聞こえた。
ここに居るクラスメイトと同じように、あの人もまた、若菜の死を悲しんでいるのだろうか。
その日の学校は、通常より二時間ほど早く終わり放課後の部活も一切禁止され、全校生徒が下校をした。
学校としてはこれ以上、生徒の中から被害者を出したくないのだろう。
俺はいつもの道を一人で歩いていた。昨日まで若菜と共に通っていた道だ。
これからは一人で歩く事になるのだろう。
ふと道端の石ころに目がいった。何となく、昨日の帰り道で若菜が蹴っていた石に見えた。
「馬鹿か……」

家に帰ると、妹の未佳（ミカ）がリビングでテレビを見ていた。
「あ、お帰り。お兄。やっぱお兄の学校も早く終わったの？」
俺は頷きで返した。
「……そっか。お兄、仲谷さんと仲良かったもんね。……ごめん」
「気にすんな」
俺はテレビを一瞥してから、自分の部屋に向かった。テレビには、若菜の家が映っていた。
部屋に入って鞄を置き制服から適当な部屋着に着替える。
溜め息を一つ吐いてから椅子に座り机に向かう。パソコンの電源を入れた。
起動するまでの間、頭の中で自己分析を始める。
俺の名は神原秋介。十七歳。男。身長約１７７ｃｍ。体重約６０ｋｇちょっと。
握力両手とも平均。視力両目とも２．０。５０ｍ走７秒弱。総合体力目算で人並みより少し上。

……まぁ、いけるだろう。俺が焦ったりしなければ何とかなるはずだ。
ログインするためのパスワード画面。四桁のパスワードを打ち込む。
デスクトップが表示される。セキュリティソフトが起動しているため、まだ操作するには重い。少しの間待つ。
今の時刻は……四時十六分。未佳はもう帰ってきている。親は七時過ぎには帰ってくるだろう。
マウスを操作し、インターネットを開く。検索するのは若菜が殺された事件について。
警察の発表によれば、死亡推定時刻は夜中の三時頃。家の窓ガラスを割って侵入し、刃物のような凶器で眠っていた家人を刺殺。
眠っている所を襲った……か。最初の一人は一撃だろうな。
少し戻って、連続殺人全体の情報を調べた。
最初の事件は今から二週間ほど前。隣の県でやはり夜中に家に侵入し、一家四人を刺殺。
その三日後、今度はここから少し離れた町で同じように家に侵入し今度は一家三人を刺殺。
その後は日の間隔はバラバラだったが共通するのは、夜中に家に侵入し、例外無くその家族全員を殺している、か。
都合二十一人。この二週間で二十一人。
もういい……夕飯まで眠ろう。動くのは、そうだな零時を過ぎたぐらいだ。
パソコンの電源を落とし、俺はベッドに横になった。
何故だろう。若菜の顔が思い出せない。
首だけを動かして机に置いてある写真立ての中の若菜を見た。
俺と若菜が写る写真。
俺の隣に立つ若菜は……よかった。あいつは笑っていた。
その晩、帰ってきた親に俺と未佳は戸締りの確認や夜に出歩くな、

などの注意をされた。
まぁ、当然の事だろう。若菜と仲の良かった俺の事を両親も気遣ってくれたが、皆が思っているほど、俺は悲しんじゃいないのかもしれない。

だって、俺はまだ一回も泣いちゃいない。

深夜零時。上着を羽織ってポケットに抜き身でナイフを入れて、俺は外に出た。
何の策も無い。何の意味も無い。何の考えも無い。
ただ殺人犯に出くわす事を右手で握るナイフに願って夜道を歩く。
歩くのはネオンの光る大通りではなく、暗く静かな住宅街。
明りが一つか二つ点いている家もあれば、寝静まったであろう家もある。
途中、パトロールしているパトカーや警官を見かけ、補導されるのも面倒なのでその度に隠れてやりすごした。
……しかし結局、何にも遭遇しないまま家路についた。
俺程度が見つからないんだ。犯人だって、気をつければ簡単に警官をやり過ごすことが出来るだろう。
なんて意味の無い事をしているんだ。そう思う。
家まであと数メートル。
何となく足を止めて……点滅する古ぼけた街灯を見つめながら考える。
仮に殺人犯に出くわしたとしよう。どうやって殺人犯と断定するかは置いといて、だ。
返り討ちにあうのだろうか。それとも俺は勢い余って殺してしまうのだろうか。
それとも……それとも……。
自分が生き残る結末。犯人が生き残る結末。その他の様々な状況を思い浮かべるが、そのどれもが夢想に弾けて消えた。

怖くはない。殺意もない。ただ、なるようになればいい。それでいい。

そして……そのタイミングの、なんて危うさ。

向こうから走ってくる男が居た。暗くて気付くのに時間がかかった。

それは相手も同じようだった。いや、走っていた……つまり焦っていた分相手の方が遅かった。

衝突。

壊れかけの街灯。点滅の中の滅の時間が少しばかり長かった街灯。数瞬の後に、火が灯る街灯。

暗闇に浮かび上がった相手は男だった。初めて見る顔だ。別に変態の類でもなさそうな顔。

……異質なのは、その顔にいくつかの赤い斑点。服にも同じような模様。

それらを観察している内に相手は体勢を直していたらしく、舌打ちと共にその右手に、ナイフを握った。

それを確認した俺は自然にナイフを握った右手をポケットから出した。

相手は一瞬だけ驚いて、すぐに殺気を纏う。

先に動いたのは、『敵』。

踏み込みと同時にナイフを突き出してくる。俺はそれを横に飛んで避けた。

間髪いれずの二撃目は右から左への薙ぎ払い。それも避けようと動いたが一瞬遅く、上着の裾が裂けた。

それで怯んだと思われたのか、相手は大きく振りかぶっての一撃を繰り出そうとしていた。

その隙だらけの足元を蹴り飛ばす。相手は少しよろめいて後ろに

下がった。
さらに舌打ちが聞こえる。自分の思い通りに事が進まなくてイラついているのかもしれない。
一度ナイフを握りなおした敵は、再び俺を殺しにかかろうとする。
――――が、横合いから大きな光が路地に差し込んできた。その光源を確認すると丁度この道に曲がってきたパトカーだった。
おそらく三度目の舌打ちをしたであろう男は反対方向へ走っていく。
俺は夜に消えていく男の背を見ているだけだった。
ブレーキ音で気付いたが、パトカーが俺のすぐ近くで停車していて中から警官が出てきた。
最初にパトカーを見たとき無意識にナイフをポケットに隠していたみたいだ。硬い感触を服の上から軽く感じた。
「君、こんな時間に出歩いていると……。連続殺人事件のニュースは知っているだろ？」
……れんぞく、さつじん、じけん。
そういえば、今まで何も考えていなかった。
あの男は何処から走ってきたのか？　俺は何処に向かっていた？
何故俺はあいつとぶつかった？
……俺は警官を無視して走り出した。向かうは俺の家。
「君、止まりなさい！」
家の門をくぐって、家のドアに手をかける。鍵は……開いていた。
中に入る。……いつもと変わりない玄関。
しかし、解ってしまった。家中に満ちている咽るほどの生臭さがそれを物語っていた。
背後に追いかけてきた警官の足音がした。
「君、あまり妙な真似をしていると……」
「……死んじゃいました」
「なに？」
「……皆。死んじゃいました。これで、二十四人ですね」

玄関に崩折れた。父さん、母さん、未佳。連続殺人の被害者にその名を連ねた。

それでも、俺は泣いていなかった。

#01：A－ｃｔｉｏｎ（アクション）（後書き）

多分、始めまして。
秋折　紀織【アキオリ－キオリ】と申します。
飽くなき赤色、楽しんで頂ければと思います。

#02：B―lood（ブラッド）（前書き）

早めに続きを。

#02：B－lood（ブラッド）

あれから、数日が経ち、数ヶ月が経ち、数年が経った。
正鵠を記すなら、俺の家族が殺されてから四年が経った。
高校生だった俺は親戚筋に引き取られ、高校を転校しそのまま大学へ進学した。
それも全て、俺を引き取ってくれた叔母さんの進めだった。
家族皆殺しの負い目を持った俺を憐れんでくれたのか、良くしてもらっていた。
あの犯人は未だに捕まっていない。だが、連続殺人はとりあえずの終わりを見せていた。
理由は不明。犯人はどんな意図を持って犯行を重ねていたのか、犯行を終わらせたのか。
……俺はあの頃から時間が止まったかのようだった。
感情が凍りついたかのように、自分を取り囲む何もかもに無感動で無関心で。
自分からやる事が見つからなかったので、とりあえず勉強だけはやってきた。身体も鍛えてきた。
そう。凍りついたんだ。犯人に対して俺自身、不明瞭な感情を閉じ込めたまま。

――――だから、これは。偶然なのか、奇跡なのか、必然なのか、不運なのか。

「へぇ、マジで四年前と同じ顔だな。作り話でありそうな、恐怖やらで身体が成長しなくなる……ってヤツか」
そいつは、くっくっと笑みを浮かべつつ面白そうに話していた。
「四年……か。それで老けてるのか、アンタ」
「おいおい、これでも若作りしてるんだぜ」

苦笑混じりの声。この部分だけ切り取ればまるでマトモな人間みたいだ。
時刻は深夜二時。場所は元神原の家の前。相手は……殺人鬼。
「とりあえず中に入るか。今は空き家なんだろ？　幽霊屋敷みたいな噂でもあんのかねー」
そいつは当然のようにガラスを割って鍵を開け、窓から家の中に入った。俺もそれに続く。
家の中は暗く、住人が居なければ電気も通っていないだろう。
住んでいた人間が皆、殺されたんだ。そんな曰くがあればその後に住もうとするヤツなんか居無いだろう。
「家具が残ってんじゃねぇか。……あぁ、流石に血の付いたヤツは無いみたいだな」
入った部屋は両親の寝室で、埃の被ったベッドが捨て置かれていた。
埃を軽く手で払ってそいつは座る。そいつはまるで世間話でもしようかといわんばかりだ。
「……じゃ、まぁ。奇遇だったな。どうだ？　親の仇を目の前にした感想は」
「別に」
「ホントかよ」
そいつは苦笑混じりの声を出す。本当に俺は何も感じちゃいなかった。
俺はベッドには座らず立ったまま暗闇の中のそいつを静かに睨む。
そいつはポケットから煙草を取り出し火を点けた。吐く息に煙が混ざり、暗闇の中、煙草の火種だけが赤く浮かぶ。
「お前も吸うか？」
煙草の箱を差し出してきたので、一本を抜き取る。
次いで差し出されたライターを手にとって、火を点ける。
煙草を吸うのは初めてだったが、苦も無くすんなりと喉を通った。
今更この程度で苦しむ事など俺にとってアリエナイのだろう。

「……聞きたい事がある」
「おう。いいぜ、何だ？」
「あまり聞く意味は無いんだろうけど、動機は何だった」
長らく聞きたかった事。しかし、意味の無い事。
「動機……か。そんなモン無ぇよ。俺がそうするのが一番自然だと思った。だからやった。それだけの事だ」
「……」
「そんな無言で睨むなよ」
ふぅ、と煙が昇る。
「もう一つ。動機が無いって言うなら何で、若菜の家だったんだ」
「じゃあ俺は何であの日、お前の家を選んだんだと思う？」
「……知るか」
「それはな。若菜ってヤツの家にお前の家に繋がるモノがあったからさ。
あの時は……、お前の写真だったな。ご丁寧に裏に《神原秋介》って書いてあってなぁ。
名前さえ解ってれば後は簡単に住所が解る。そんで終いだ」
精神が病んでいるんじゃないかと思った。俺も、こいつも。
「質問タイムはこれで終わりか？」
「あぁ……これで、何もかも終わりだ」
右ポケット。抜き身のナイフが一本。取り出す。振るう。斬る。
「チッ、あー痛ぇ。なんて事しやがるんだ」
そう言う声は微塵も痛がってはいなかった。しかしそいつの腕からはちゃんと血が流れている。
「そういえば、アンタの名前。聞いてなかった」
「あん？　俺の名前か……。俺は、灰津統滋郎（カイヅトウジロウ）っつーんだ……よッ！」
そいつ……灰津は同じように持っていたナイフを振るい、俺の左腕を抉った。
「グッ……」

歯を食いしばって煙草を噛み切りそうになる。埃塗れの床に違う人間の血が流れ滴る。
確かに違う人間だ……。でも、中身はそう違わないのかもしれない。
「やっぱり、復讐ってヤツか？　そうだよなぁ、生まれてから一緒に生きてきた家族を殺されたんだからなぁ」
違う。違うんだ。そんな……。
「――――そんな立派なモンじゃない」
「随分と薄情なんだな？　じゃあ、何だって言うんだ、あぁッ！」
言葉尻を上げて、ナイフを振るう灰津。
今度は左の肩口に深く突き刺さった。そのナイフを手放して、新しくポケットからまたナイフを取り出す灰津。
痛みに思わず口に銜えていた煙草を落とした。
「抜くと血を失うぜ？　刺しといた方がいいって！
ハハハッ！　イかしたアクセサリーだなぁ、おい！」
「……ハハ、ハハハ……――――――ハハハハハッ！！！」
笑いが伝染った。
止まらない。止まらない。止めどなく笑いが込み上げてくる。止まらない。止まらない。止まらない。止まらない。止まらない。止まらない。止まらない……！
「アハハッ！！」
右手に握っているナイフを灰津の左肩に突き立てた。それをそのまま裁断するように、振り下ろす。
だが、思いの外肉が硬くて、数センチ斬ったトコロで動かなくなって手から離れた。
パチパチ、と足元で火が燃えあがろうとしていた。
投げ捨てた煙草は床に溜まった埃から床の木材を燃やしていた。
それはやがて大きくなって、ベッドのシーツへと燃え移り、周囲のカーテンやら壁やらを巻き込みながら炎を撹拌させていく。
炎が総毛立つ中、俺と灰津の絶叫とも笑いとも取れない声が木霊

する。
もう何が何だか解らない。周りの赤いのは何だ。理解しようとしない。
手が掴もうとするのは何だ。出来
ない。目の
前の男は誰だ。出来ない。俺は誰だ。解らない。何をしようと。解らない。
左肩に突き刺さっていた灰津のナイフを抜いた。その自分の血で濡れている刃先をそのまま灰津に向ける。
灰津の方もさっき俺が刺したナイフを引き抜いて構えていた。
交錯は一瞬。閃きも一瞬。結果も一瞬。

神原秋介が握った灰津統滋郎のナイフは持ち主の首に。
灰津統滋郎が握った神原秋介のナイフは持ち主の胸に。

即死性で言えば、首の方が効果的だったようで、刺さった瞬間絶命したのは灰津だけだった。
胸に刺さったナイフから手を離した灰津はその時点で意識を亡くしていた。
俺は首筋に突き立てたナイフをそのまま引く。
赤黒い泡を噴出させながら灰津の首は皮一枚で繋がっているかのようにぱっくりと開き、血の暗闇に倒れ沈んだ。
「死んだ、　　。ハハッ。殺人鬼でも死ぬんだ」
俺はそのまま徐に胸のナイフを抜く。血が飛ぶ。もう何も気にしない。
ナイフはそのまま適当に放り投げた。血が流れる。流れる。流れる。流れ……。
「赤い赤い　　赤い　　赤い　赤い……」

赤い炎に照らされて血の赤色が鮮明に見えた。がくり、と膝が折れた。
そのまま床に倒れこむ。力が入らない。血が流れすぎた。未だ血は止まらない。
止まる時は死ぬ時。止まったら死ぬ。死んだら止まる。その前に燃え尽きて死ぬかもしれない。
あぁ、思考がまとまらない。
「けっきょく、おれはなにがしたかったんだろう。
復讐なのか、敵討ちなのか。殺したかったのか、殺されたかったのか……」
自らの血溜まりの向こうに灰津の血溜まりが見えた。
「そうするのが自然だった……か。おれも、おれ、も、俺も同じ……だ」
不明瞭な感情。理解できるワケがなかった。それは感情じゃなかった。

衝動。

本能に一番近い行動原理。理由を探す方が間違っている。そこに理由なんて無い。
見つかりっこない。在るワケが無い。
《そうであるのが自然》なら、《そうある》しかない。
「そうだ。———狂ってるとか、イかれてるとか、異常だとか。そんな飾りはいらない。
ただ、こうしたかっただけ」

何もかもが色褪せていた。
いや。色はある。ただ……赤いだけ。
つまり、蒼が黄が碧が紫が黒が白が、色褪せている。
……血はもう、飽きた。

#02：B―lood（ブラッド）（後書き）

どうも、秋折紀織です。

とりあえず、ここらへんまでが前置きな感じもします。

#03：C－rude（クルード）（前書き）

何も考えていないようで、常に何かを考えている。
考えるフリをして、何も考えていない。

#03：C－rude（クルード）

目蓋の裏側からでも解る。
この元神原の家。その敷地が赤一色に染められていく。
赤く。赤く。赤く。赤く。赤く。

神原秋介の人生。生まれてからの十七年と四年。合わせて二十一年。
最初の十七年は平穏だった。
俺は無駄にはしゃぐ事の無い、気障な感じの少し周りから浮く存在で。
そんな俺と友達になってくれた若菜。
俺の人生は、若菜無くしては存続不可能だったと今でも思う。
若菜と出会うまでの十二年あまりは、きっと若菜に会うための準備で。
若菜と出会ってからの五年あまりは、きっと若菜と居るための本番で。
若菜が居無くなってからの四年は、きっと若菜を覚えているための時間で。

死の間際。殺人鬼によって自覚させられた俺の中の衝動。
それを言葉という形にするなら、多分『若菜』の二文字だけだろう。
傍目には、俺の行為は復讐だった。
でも俺の中では、復讐ではなく『若菜』のための行動だった。
『若菜』が殺されたと知らされた時、俺は俺の支えを失った。
人生をよく道に例えるが、それに倣うなら、俺の人生は『若菜』という標なくして進む事は出来ない。

『若菜』は俺の人生という道において、標であり、灯りであり、信号であり、全てだった。

今、思い起こしても別段。若菜との出会いが特別だったワケではない。

普通に出会って、普通に友達になって、気付けば俺の全てだった。

それは多分、若菜も同じだったのだと思う。

そういう話をしたワケではないが、何となく。

俺が若菜に向ける雰囲気と、若菜が俺に向ける雰囲気は似通っていた気がする。

もしかしたら俺の独りよがりの勘違いかもしれない。

それでも、『若菜』が死んでしまった以上、俺はそう思うしかない。

まぁ、俺も死ぬ以上、文字通り『墓場まで持っていく』ってヤツだが。

飽くなき赤色。

――――死の淵から、目を覚ました。
目蓋を開ければ、そこは真っ白な部屋。
あれだけ赤かった世界が今はこんなにも白い。
自分を確認する。
俺の名前は何だったか――――神原秋介。
俺の性別は何だったか――――男だ。
俺の年齢は何だったか――――二十一歳。だが成長は十七から止まっている。
俺の家族は何だったか――――死んだ。
俺の友達は何だったか――――死『若菜だ』んだ。
「ッ……！」
頭痛がした。思わず頭を抑え……ようとして腕が動かないのに気付いた。
何事かと思い、視線を飛ばすと真っ白な布団が目に入る。
なるほど。どうやら俺はベッドに寝かされているらしい。
とりあえず必死に腕の感覚を手に入れようとして、何かが巻き付けられている感触を得る。
それも満遍なく。布団の中にあるであろう俺の腕は多分、包帯か何かでグルグル巻きなのだ。
「……」
不意に視界が真っ赤に染まる幻覚。
一際の頭痛。意識が落ちそうになる。
息を大きく吸って、吐いて。意識の一命を取り留める。
今さっき見た幻覚で思い出す。
そういえば俺は殺人鬼をその手にかけて、その後俺も死んだはずだ。
胸にはナイフを穿たれた上に、家は燃え上がっていた。
そんな状況でどうやって助かったというのか？
それとも、ここは既に天国か地獄か果てはその一歩前で、死人も

治療するのがあの世の決まりなのだろうか？
「それにしては……現実味が強い、か」
ここいらで誰か部屋に入ってきてくれれば話ぐらいは聞けそうなんだが……。
そう都合よくはいかないか。
ドラマなんかだと、山田さん意識が戻ったんですね、とか看護師が言ってくれるもんだが。
「残念ながらそういう展開にはなりません。はい」
「なっ！？」
突然の声。驚愕のあまり素っ頓狂な声を上げてしまいそうになるのをギリギリで抑える。
「既にアナタの病室には私が居るので、誰かが入ってきて～という展開にはなりません」
「……そりゃ、そうだ」
とりあえず体が動かないので、首だけ動かして声のした方を向いてみる。
そこには部屋に溶け込めるぐらい真っ白な服を着た女性が立っていた。
「まぁ、お望みとあらばやってあげてもいいですよ。
『アァッ、神原さん！　意識が戻ったんですね！　待ってて下さい、今先生を呼んできますからッ』
はい。これでいいですか？」
「……そんな、もの凄くやる気の無い棒読みで言われても……」
まるで国語の授業で聴衆の前で教科書を朗読させられる生徒のような棒読み加減。
しかもこの看護師は、普通の自前の会話さえやる気ない棒読み具合だ。
「それは失礼しました。
それじゃあ取り合えず、上の人を呼んできますので、大人しくして下さい。はい」

何だ。結局、人を呼びに行くのか。
そうして、看護師は真っ白な部屋を出て行った。

きっかり二分。
それだけ待たせて、部屋に誰かが入ってきた。
未だに体は動かず、唯一動く首だけを動かして視線を向ける。
そこには、真っ黒な上着を棚引かせる女性とさっきの看護師が居た。
俺がまな板の上の鯉みたいなのを感じ取ったのか、その黒衣の女性は……。
「ちょっと、まだ薬打ってないの？」
「あーはい。打とうとしたら起きちゃったので、タイミングを逃してしまいまして。はい」
「仕方ないね。代わりにやっておくから、注射器頂戴」
「はい。解りました。はい」
俺を見下ろしながら会話をし、看護師から注射器を受け取る。
そして注射器を構えたかと思うと。
ドスッ。そんな擬音が似合うかと思うくらい何の躊躇いも戸惑いも狙いも無く、俺の額に注射器が突き刺さった。
そして驚きと痛みに呻く前に、薬液は流し込まれ針が抜ける。
「もう動けるわよ。見下げられるのが嫌なら上体だけでも起こしなさい」
その言葉に、軽く腕を動かすとさっきまでが嘘のように動いてしまった。
節々にまだ痛みを感じながら、言われた通り、とりあえず背中をベッドの頭にもたれさせる。
「さて、神原君。始めまして、私は冴城恭子（サエギ キョウコ）よ」
「……どうも」
「中々ダウナーな返事ね。ちなみに人は私の事をブラッドジャックと呼ぶわ」

「それは随分とあんまりな二つ名ですね」
「そ。ありがと」
ワケが解らない。とりあえずこの女は何だ？
「それじゃあ、神原君。君に聞かなければならない事が一つある」
今までの態度とは打って変わって、真剣な面持ちになる冴城というこの女。

「君、このまま死にたい？　それとも……生きたい？」

そんな事を、この白衣を纏った黒衣の女医は俺に聞いた。

#03：C－rude（クルード）（後書き）

どうも、秋折紀織です。

よく解らない展開になってきました。

包帯グルグル巻きなのは、火傷のせいです。

#04：Ｄｉｓｔｏｒｔｉｏｎ（ディストーション）（前書き）

難しく考えすぎると、矛盾が生まれる。
柔かく考えすぎると、破綻が生まれる。
重要なのはその線引き。
上手くいかない、ラインマン。

#04：Ｄ－ｉｓｔｏｒｔｉｏｎ（ディストーション）

「君、このまま死にたい？　それとも……生きたい？」

その質問の意味を考える。

なんて事はしなかった。

飽くなき赤色。

「死にたい」

俺はそう答えた。

生きたいか、死にたいか。

そのどちらかと聞かれたなら俺は『死にたい』と答えるしかない。

今なら解る。俺の心に生まれた『若菜』という衝動。

その原風景である若菜本人が居無いこの世界で、俺はどうやって生きていけるというのか。

そう。神原秋介の人生は若菜なくして存続は不可能なんだ。

「若菜が……親友が居無くなった俺の人生に意味はない。

遺り残した事はもう全部終わった。だから、もういい。もう死んで

いい」
俺の言葉に黒い白衣の女医は……。
「あっ、そう。じゃあ君、生存決定ね」
などとのたまった。
「……あ？　俺今、死にたいって言ったんだけど、聞こえてたよな？」
「えぇ聞こえてたわ。だからこそ生かすんじゃない」
だから、ワケが解らない。
「もし君が『生きたい』って言ってたら殺してたわよ。
でも、残念な事に『死にたい』って君は言っちゃったから。だから生存決定。おーけー？」
そろそろ、理解しようとする事を諦めそうになる。
「というわけで、ようこそ。私達が歯車を回す矮小世界『鞘朽（サク）』へ。歓迎するよ、神原秋介君」
悪魔とも天使ともつかない笑顔で、彼女……冴城恭子はそう言った。

そんなやり取りから、一週間。俺は今、中庭のベンチに座っていた。
季節は秋。空は快晴。風は涼しく。
俺はそんな中でボーッと空を眺めている。
あの後、俺はあの冴城という女から、様々な事情を聞かされた。
まず、俺の事。
何故、あの業火の中から俺を助け出したのか？
どうも、鞘朽というのは有り体に言えば、存在を公表できない存在だとか。
そして鞘朽という組織を動かすためには、同じように存在を公表できない存在の人間が運営するしかない。

なので、事故などで人知れず死に逝く人間を拾い集め、その構成員とする。
俺もその事例に漏れず、拾われたのだ。
ちなみに、生きたいか死にたいかの質問は全くの無意味。
冴城のただの遊びだそうだ。本当にワケの解らない女だ。
落ち着いて、話を振り返ってみれば……。
「何ともまぁ。現実味の無い話だ」
胸と肩を刺され、血を沢山流し、火傷も全身に負って……。
そんな状態の俺を後遺症一つ無く治しただけでも、既に信じがたいのに。
瀕死の人間を寄せ集めて、人知れず運営される組織と来たもんだ。
こんなの、今にも火に飲まれて死ぬ俺が今際の際に見ている夢にさえ思える。
「でも、現実だ」
たったの一週間で俺の体は完治した。
あれだけ巻かれていた包帯は全て解かれている。
肩と胸には、大きな傷跡が残っただけ。
生き続けるためには、何の支障も無い。
ただ、それだけに。
「……やっぱ、死んだ方がいいのかな」
生き続ける自信がない。
『若菜』の居無い人生など、存続不可能。
それを俺は知っている。
このまま生き続けたって、どこかでいつか破綻する。
若菜が死んでから、もう四年生きた。
その四年は、若菜を殺した殺人鬼を殺すための時間で。
その目的が果たされた今、これ以上どうやって生きていけばいいのか。俺にはわからない。
標が無いから。
灯りが無いから。

人生の道に、針路が取れない。

針路が取れないから、自ら死を選ぶ事が出来ない。
誰かに殺してもらわないと、死ぬ事さえ出来ない。
針路が取れないから、自ら生を選ぶ事も出来ない。
誰かに支えてもらわないと、生る事さえ出来ない。

そして、幸か不幸か。
鞘朽は、俺を生かす事だけは、出来たのだ。

#04：Ｄｉｓｔｏｒｔｉｏｎ（ディストーション）（後書き）

どうも、秋折紀織です。

存続不可能と死は似て非なるモノです。
死は全てが終わりますが、
存続不可能というのは、『人』が終わるだけです。
言って見れば、生ける屍ってヤツでしょうか。

そろそろ、暗い雰囲気を何とかしたいものです。

#05：E－xtension（エクステンション）（前書き）

君が何をやりたいのか知らないが、エロスはほどほどにしなさい。

#05：E－xtension（エクステンション）

生きるための支えを失った俺は、死ぬしかなかった。
だというのに、他人の勝手な都合で俺は死ねなかった。
さて。これから、どうしよう。

飽くなき赤色。

傷の癒えた俺は、とりたてて何をすればいいのか解らなかったので、散歩をする事にした。
まず、真っ白な自分の病室を出る。長く続く廊下は真っ白だ。
既に俺は中庭までは行動範囲を伸ばしているので、大体の位置は把握している。
廊下を進み、ナースステーションと階段のあるフロアまで行く。
ここのナースステーションはいつ見ても無人で、忙しくて動き回っているのだろうと勝手に思っている。
そして、階段。
以前中庭に降りた時に数えたら、俺の病室は三階という事が解った。
ので、今日は上に昇ってみる。目指すは屋上。
三階からのスタートなので、四階、五階、六階、七階……と登って屋上に辿り着いた。
建物と空に近い場所を隔たる鉄扉のノブを回す。
ガチャと鈍い音を鳴らしながら、押し開けた。
そこには、一面に広がる秋晴れの空。

雲が疎らに散り、青色が流し込まれた画板。
視線を落とす。
そこには、海。海があった。
その後ろには、山。山があった。
そして俺の居る建物に隣接するように、他にも幾つかの建物があった。
きっとそれらは全て、鞘朽のモノなのだろう。
他に目に入るモノはない。そもそも、ここは日本か？
今まで見てきた看護師も医者もその他の人も全員が日本人だった。
だからといってここが日本という保障はない。
「心配しなくても、ココは日本だよ。シュウスケ君」
声のした方に振り向く。
トビラの前に一人の女の子が立っていた。
初めて見る顔だ。
「何で俺の名前知ってるんだ？」
「シュウスケ君は私達の間じゃ有名人なの。有名人とはお近づきになりたいって思うのは普通でしょ？」
見た目、俺と変わらないぐらいの年の女の子。
とはいっても、俺の実年齢は二十一でだから、実質年下か……？
「どうでもいいけど、その呼び方は何とかならないのか。そんな愛嬌ある呼び方をされるほど若いつもりは無いんだが」
「そうかな？　高校生ぐらいなんだからまだ大丈夫だって。例え見た目以上の年だったとしても、見た目が若いんだから気にしないの！」
見た目が全て、か。
まぁ俺も体が成長していない以上、中身も成長していなくて、結局は十七歳と言った方がしっくり来るのかもしれない。
「で、何か俺に用？」
「いえいえ、特に用事があるわけではないのですよ。ただシュウスケ君とお友達になりたいなぁと思いまして」

『友達』という言葉に一瞬、体が震える。
拒否反応なのか。それは。
「別に構わないけど……」
「良かった～。断られたらどうしようかと思いましたよ」
一々オーバーなリアクションを取る。俺が少し苦手なタイプかもしれない。
断ればよかったかな。
「あ、まだ名乗ってませんでしたね。私は涼代姫香（スズシロ ヒメカ）と申しますです」
「涼代……ね。あぁ覚えた」
「いえいえ！　私の事はどうぞ『姫香』と呼んでください！」
「……姫香。これでいいのか」
「はい！　それじゃあこれからよろしくお願いね。シュウスケ君！」
えへへーと満面の笑顔を見せ付けてくる涼代……姫香。
キャラが掴めない。だけど、あんまり騒がしいのは苦手だな……。

「……って、何やってんだ！？」
横に立っていた姫香がいきなり上着を脱ぎ始めていた。
「え？　だって、親睦を深めるにはコレが一番かと思って」
「コレって何だ！　コレって！」
「フフフ。まだ誰も手を付けてない新品上物ピチピチですよー」
「黙れッ！」
……冴城と言い、姫香と言い、ろくな人間が居無いな。鞘朽には。

#05：E－xtension（エクステンション）（後書き）

どうも、秋折紀織です。

慣れない事はするもんじゃないですね。
たったの数行で顔真っ赤。どんだけー。

現状把握はそろそろ飽きたので、次あたり何かやりたいと思います。
いや、ヤりたいってそういう意味じゃなくてね。

#06：Ｆｒａｃｔａｌ（フラクタル）（前書き）

うーん。
固有名詞を出すのは勇気が要りますね。

#06：Ｆ－ｒａｃｔａｌ（フラクタル）

惰性で生きるコトがこんなにも難しかったなんて知らなかった。
目的の無い人生、目標の無い人生、心に誰も居無い人生。
なんかもう、面倒なぐらいに、生きるコトが難しい。

飽くなき赤色。

「さて、神原秋介君よ。働かざるモノ喰うべからず。傷はもう癒えたのだから、働いてもらおうかしら」
相変わらずの黒い白衣を纏った冴城恭子は、俺の部屋に来るなりそう告げてきた。
「ここに来て君も、もう一月。あれだけ酷かった傷は『私が』懇切丁寧に治してあげた。
自分の置かれた状況も大体、把握できたでしょう？」
「まぁそれなりには。……で、働くって具体的に何をすればいいんだ？
まさか、会社勤めってワケでもないんだろ？」
「そういう仕事も無くは無いけど、君みたいな若い子には別にやってもらいたい仕事があるのよ」
全身を舐め回すような視線を感じて、少し怖気を感じる。
「……言っておくけど、燕なんか出来ないからな。俺の性格からして」
「そぉ？　君みたいなちょっと意地っ張りでウブな子は嬲り甲斐があるんだけどなぁ。

こう……最初は羞恥と嫌悪で抵抗するんだけど次第に快楽の虜になって、最後には自分からお願いしますって求めてくるような感じ？」
想像しかけて、止めた。寒気がする。
そんな別人みたいな自分が居たら、殴り飛ばしそうだ。
「あらあら、顔が真っ赤。それに性格がどうとかじゃなくて、単に経験が無いからなんじゃない？」
クスクスと笑いを零す冴城。
「……否定はしないけどな。
特に興味無かったし、多分人より性欲が薄いんだろうな。それに、そんな事考えてる暇も無かったし。
で、仕事って何なんだ？」
「ま、とりあえず道すがら説明するから、着いてきて」
真っ白な部屋を出る。そして真っ白な廊下を歩く。
どうやらこの病棟から外に出るようだ。
「そういえば、君。死にたいって言ってたけど、今は生きるつもりなの？」
「……正直言えば、今でも死にたい気分だ。
けど、自殺なんて出来ないし。どうせいつかは破綻する人生だ。
破綻して、壊れた時にアンタらの誰かが殺してくれればそれでいい。
だから……壊れるまでは、とりあえず流されて生きていくつもりだ」
「本当に……そうかしら」
冴城の呟きが聞こえた気がしたが、頭には残らなかった。
脳が、理解を求めなかった。
「ま、君がそう思ってるならそれでいいわ。
……私達が運営する『鞘朽』という組織は、実に様々な活動を行っているわ。
そしてその存在は決して悪ではない。
まぁ、正義を振りかざすつもりも無いのだけど、結果だけ見れば善行と呼べる類のモノのハズよ。
で、その中でも一際労力を裂いているのが……『ある特異な人間の

保護』よ」
　相変わらず人気の無い真っ白な廊下を突き進む。
「……特異な人間？」
「そう。ちなみに、保護は『発見』や『確保』、『駆除』にも言い換えられるわ」
「駆除って……殺すってコトですか……」
「驚いているの？　でも、君は既にその『特異な人間』を一人、『駆除』しているわ」
　思わず、足が止まった。
　一歩遅れて、カツンと足音が響き隣を歩いていた冴城恭子の足も止まる。
　真っ白な廊下に、赤色が滲み染み込んでくる幻覚を見る。
　無意識に手を強く握る。爪が手の平に食い込むのも厭わず。
　冷たい汗が頬を伝う。まるで呼吸を忘れたかのように体内が動かない。
「『特異な人間』、それは『衝動』を自覚した人間のコト。
君がどういう風にどういう『衝動』に目覚めたのかは知らないけど、君も衝動を解理した一人ってコトは既に解っているわ。
ちなみに『解理』ってのは、衝動を自覚するコトよ。
そして、君が殺した灰津統滋郎も『衝動』を解理した一人。
彼が解理した衝動は、『殺人』。最も目覚めやすいとされる衝動の一つよ。
彼が主立って行動していた約四年前の時点で鞘朽は存在していたわ。
でも、鞘朽の力を持ってしても灰津を捕捉するのは無理だった。
そして彼が私達の存在に気付き、行方を晦ませた。それが四年前。
私達は方々に手を尽くしたけど、結局彼を見つけ出すコトは出来なかった。
……と、同時に彼と接触して生き残った君にも監視をつけた」
「……！」
　その事実に、停止していた体内器官が活動を再開する。

閉じていた口が開き、喉を破き、肺に空気が満たされる。
血液は酸素の配給をするために全身を駆け巡り、脳が息を吹き返す。
「俺に、監視？　四年も？」
「えぇ、殺し損ねた君を灰津はいつか再び殺しに来る。
そう踏んだから、君に監視をつけた。間違っているとは思えないわ」
「……気付かなかったなァ。四年、か。
何年経っても成長しないんじゃあ、監視する方も見ててツマンなかっただろうな」
「そう腐らないの。ある意味君の体は貴重だし、面白いんだから。
で、今から一月と少し前、ついに君と灰津は接触した。
何の偶然か、君が昔住んでいた空き家で。
正直、対応が遅れていたわ。本来なら、君達が何かをする前に私達が割って入り、灰津を確保して、君の記憶を消す。これがベストな処置だった。
でも結局は、君と灰津は殺し合い、結果灰津は死に、君も巻き込まれて大怪我。
せめても、と君を回収して治療したけど、割とギリギリだったかな。
死んでてもおかしくなっかったから」
視界の隅に赤色が見え隠れする。
何とか自意識を保つ。足はまだ動かない。拳は緩められる。
「まぁそんな所よね」
「……その、俺の衝動ってヤツが、あの男と同じ『殺人』だったら、やっぱり俺を殺すのか」
「もしそうだとしたら、ね。でも君の衝動は『殺人』じゃない。それだけは解る」
「何でさ」
「衝動が『殺人』の人間は一番初めに、自分という人を殺すからよ。
理性や感情や倫理や社会ありとあらゆるモノを自分から排すために自分を殺す。

そうじゃないと、突き抜けるコトが出来ないから。
そういうのは人間じゃない。そんなのは見ただけで解る。
でも君はまだ人だから。だから君の衝動は少なくとも『殺人』じゃない」
突き抜けるコトが出来ないから。
極めるコトが出来ないから。
人を殺すコトを……。
「……なら、いい」
俺はゆっくりと片足を浮かし、前に進む。
網膜に張り付いた赤色は、もう気にならなくなった。
同じように冴城も歩みを再開する。
「で、君の『衝動』は何なのかな？　おねぇさんに教えてみる気はない？」
「オバサンにだったら教えてもいいけどな」
「このッ……！　ぐ……ッ、み……み……そじの、あたくしに教えて、くださる？」
へぇ。三十路なのか。もっと若いかと思ってたのに。
「……『若菜』」
「何って？」
「だから、『若菜』。四年も俺のコト監視してたなら、過去の調べもついてんだろ。
……俺の、友達の名前だ。俺の中では、あいつが全てだった。
だから、若菜を殺した、あの男を俺は、殺した」
「そんなの……いえ。解ったわ。それでいい」
冴城はよく解らない反応をした。
真っ白な廊下が終わり、ガラス戸をくぐって外へ出る。
冴城の足は、病棟の右隣の建物へ向かう。
俺もそれについていく。
「……君は多分、制限は多いだろうけど、無敵になれるわ」
「なんだ、その星でもとったような状態は」

「きっとそんな感じよ」
病棟右隣の茶色の建物。入り口は重い鉄扉だった。防音か？
冴城が電子キーロックを手早く解除し、その中へ入るのに俺も続く。
「さて。それじゃあ仕事を説明するわ。
君はここで――――」
「あー！　シュウスケ君だ！！　やっほぉぉぉー！！」
冴城の言葉の上に別の声が被さる。
振り向けば、そこには姫香が居た。
脱兎の如く、走りよってくる姫香。
「お前か。こんなトコで何やってるんだ？」
「シュウスケ君こそ、何でこんなトコに居るの？」
「丁度いいわ。涼代姫香。紹介するわ。君のパートナーよ」
「え、ホント！？　やったー！！　よろしくね、シュウスケ君！」
キャーと飛びついてくる姫香。を、後ろに跳んでかわす。
目標を失ったミサイルは地に墜落した。
「イタタ……鼻打った……」
「で、パートナーって何なんだ？　それに姫香の格好……なんか厳ついな」
何だろう。何か、サバイバルにでも出かけそうな服。それにちょっと煙の臭い。
「さっきも言ったろう？　鞘朽の一番の目的。
衝動解理者の発見、確保、保護、駆除。君らはその最前線に立つ、戦闘要員だよ」

#06：Ｆ－ｒａｃｔａｌ（フラクタル）（後書き）

どうも、秋折紀織です。

いくつか説明補足……してちゃいけないんだろうけど。

衝動：理性や感情よりも上位の感覚。
　その人間が最もやりたいコトの塊。

解理：自分の衝動を自覚し言葉というカタチにするコト。
　解理してしまうとソレに関してのみ行過ぎてしまい、
社会不適合になりがち。
　行動の善悪は別として、一つに突出したモノはそれだけで不穏分子なのである。

これからは目くるめく血飛沫舞う戦場が舞台に……。
なるかは、ちょっと解らない。

#07：Ｇ－ａｂｙ（ゲィビィ）（前書き）

展開が遅いなぁ……
自分でやっといて言うのもなんですが。

#07：Ｇ－ａｂｙ（ゲィビィ）

衝動解理者。
自分が一番やりたいコト、それを自覚した人間。
それは、社会において、邪魔な存在らしい。

飽くなき赤色。

「日々が普通であればあるほど、世界はキレイになっていく。
普通に朝起きて、普通に学校や会社に行って、人ごみの中でお昼を食べる。
午後も精一杯頑張って、夜になれば家に帰り、眠る。
休みの日には、好きなだけ惰眠を貪り、ぐうたらするのも良い。
ストレスが溜まって、犯罪に手を染め警察に捕まる。
それさえも、日々の普通に含まれる。
問題なのは、そこに突き抜けた人間が現れるコト。
人は誰だって、一日に幾つものシークェンスをこなさなければならない。
でも、衝動解理者は違う。
普通の人間が行うシークェンスをこなせない。その衝動に則した行動しか出来なくなる……」
　冴城恭子は、つらつらと言葉を並べる。
　一種の憐れみを持って言葉を語る。
「普通の刺激的な生活を送れる場所が在れば、世はコトも無し……。
それが本来、世界の在るべき姿。

全ての人間が普遍的で、突出したモノなど一人も居無い。
平均値から抜き出る人間は天才ではなく、空気の読めない人外。
そういう人間を、可能な限り保護しようと言うのよ。鞘朽は」
解った？　と俺に理解を促す。
解らなくも無い。
俺が出会った衝動解理者はあの男一人だけだが、確かにこの世の色には合わない人間だった。
それは……きっと俺も同じ。
「だから、俺に人を殺せ。と？」
「犠牲者を増やしても良いと言うならそれで構わないわ。仕事をサボタージュでもなんでもすればいい。
でも、君にそんなコトが出来る？
君が言う友達は紛れも無く、その衝動解理者によって被害を受けた一人のハズよ」
「関係無いね。俺は『若菜』が居ればそれでよかったし、既に居無いんじゃ他の事はどうでもいいんだよ」
情に訴えかける気か。そうやって俺を鞘朽の手駒にしようというのか。
……今更、手にかける人間が何人に増えようがそれは構わない。
それでも。俺は『若菜』のためじゃないと誰も殺せない。
だから、もう俺は誰も……殺せない。
「あのあの、シュウスケ君……。私とのパートナーは嫌、だった？」
唐突に今まで黙っていた姫香が、泣きそうな声を出した。
「そういう話じゃない。俺は俺の意志で人を殺すのが嫌なだけだ」
「だったら！　……だったら、『私の意志』じゃ……ダメかな？」
ベタリ、と。
完成された名画の上に、原色の絵の具を塗りたくる。
そんなセピア色の幻想。
「なんだったら、私がメインで頑張るから！　シュウスケ君は支援とか裏方でいいから！」

「……涼代姫香。それはアナタの能力では少し厳しいわね」
「それでも構いません！　仕事は必ずやり遂げてみせます。シュウスケ君に負担はかけられませんからッ」
ドロドロ、と。
絵の具が、早く拭わないと。あぁ拭えば拭う程、カンバス全体に色が染みていく。
そんなモノクロ色の幻想。
「私は、年こそシュウスケ君と同じぐらいかもしれないけど、鞘朽に居る年月はずっと長いんです！
実戦だって、まだしたコトは無いけど訓練は積んできました。
何とかしてみせます！」
「成功率の低いチームに任務を任せるのは、責任者としては心苦しいわね。
実績が無い状態じゃ、尚更。
折角、貴女をここまで育てたのに初戦で敗退、死亡なんてコトになったらコストパフォーマンスが合わないわ」
「う……ッ」
おかしい。何で姫香はこんなにも冴城に突っかかる。
俺が少し頑張れば済むコトじゃないか。
何故彼女に負担をかける。俺が。
俺は、彼女に負担をかけてはいけない。いけない。いけないから。
俺が。
やるしか。
ないじゃないか。
「姫香。一人で頑張って、それで最初が何とかなっても後が続く保障はない。
……だったら俺も頑張るしかないだろ。パートナー、なんだから」
「シュウスケ君！　嬉しいッ！」
「ッ、だから抱きつくな！」
「話は決まったみたいね。それじゃ精々頑張りなさいな。

そういえば言ってなかったわね。ここの棟は、戦闘訓練のための施設よ。
詳しいコトはこっちの担当に任せてあるから、後で話を聞きなさい」
「はい」
「じゃ、私は先に訓練に戻ってるね」
姫香は出てきた通路と同じ方へ戻っていった。
俺は冴城に示された担当者が居ると思しき部屋へ向かう。
数歩進んで、背後に立つ冴城が、カツンと床を鳴らした。
「……それじゃ、頑張ってね。神原秋介君。君の心を支える誰かのために」
「姫香に苦労をかけさせるワケにはいきませんからね。何とかやっていきますよ」

塗りたくられた絵の具は、乾き、色をカンバスに落とした。
その下に描かれていた絵は何だったのか。
今はもう見えない。

#07：Ｇ－ａｂｙ（ゲィビィ）（後書き）

どうも、秋折紀織です。

まとめ、というかおさらい。
自分でも解らなくなってくるので。

鞘朽：さく。
　人知れず死にいく人間を助け労力とする。
　その主目的は衝動解理者の保護や駆除。他にも色々。
　社会的死人で構成されているので、『生前』の近しい場所には近づけない。

登場人物。
未だに、神原秋介・涼代姫香・冴城恭子の三人のみ。
や、灰津とか看護師とかも居たけど。

#08：Hallucination（ハリュシネィション）（前書き）

Hallucinationの読み方に自信がありません。

#08：Ｈ－ａｌｌｕｃｉｎａｔｉｏｎ（ハリュシネィション）

修練棟で、戦闘訓練を受けてから一月が経った。
自分でも驚くぐらい、戦えるようになったと思う。
自分でも呆れるぐらい、現実味が無くなってきてると思う。

飽くなき赤色。

日課の訓練を終えて自室に戻る。
始めの内は、この真っ白な部屋を病室だと思っていたけど、実際は鞘朽で日々を送るための部屋らしい。
隣室の住人はとんと見たことが無いが、この棟だけで何人が住んでいるのやら……。
修練棟や建物の外に出ると、割と人は見かけるが話すようなコトはない。
ちなみに、姫香もこの棟に住んでいる。
俺は三階だが、姫香は二つ上の五階に部屋がある。まぁ大抵は修練棟で会うので部屋に行ったコトは無い。
それに、下手に部屋にあがると何されるか解ったモノじゃないしな。
どうにも一般常識にかけるのか、はたまた彼女の個性なのか……。
ガードが甘いというか、ノーガードだからなぁ。姫香は。
どんな弾みで押し倒されるか解ったもんじゃない。
一息ついて、着替える。
殆どの日用品は鞘朽から支給されている。　というか、買いに行

くようなコトは出来ない。
ここが海と山に挟まれた何処とも知れない場所にあるというのと、現金が無いというのと、ここに居る人間は全てが、『人知れず死ぬハズだった人間』だからだ。
下手に街に繰り出して生前の知人に会いでもしたら厄介極まりない。
鞘朽の存在は公表出来ないからな。
というよりも、衝動解理のコトを公表出来ないというのが本音らしい。
衝動の存在を知ればそれだけ、解理に近づくコトになるとかどうとか。
で、だ。
鞘朽から支給される日用品は大体が画一的なモノだが、服だけは割りと幅が広かったりする。
男物と女物の違いがある上に、サイズだって人それぞれだ。
それだけに大量生産一種類だけというのが出来ないので、ついでという感じでいくつもデザインがある。
それに服装は個人を確立・認識するのに最も解りやすいモノだというのも理由の一つ。
定期的にカタログのようなモノから好みのモノを選ぶのだが、今日はちょうど前回の注文の品が届いた日だ。
各部屋へ配送されたダンボール箱のうち、自分のモノを開ける。
伝票控えと数を見ていき、揃っているコトを確認。
早速、注文していた部屋着に着替えてみる。
「おーい、シュウスケ君やーい」
部屋の外、廊下から姫香の声が響いた。
「あー……入っていいぞ」
「お邪魔しまー」
とりあえず、ダンボールを邪魔にならない位置に置いておく。
ついでに姫香の分の椅子を引っ張ってくる。

「で、いきなりどうした？」
「おぉぅ！　シュウスケ君カァッコイイ！」
「……そうか？」
「ってゆーか、渋いね！　何かこうダンディズム溢れるっていうか。……なんていうかもう、襲っていいですか！」
「だから！　一々発情すんな！」
飛びつこうとしてくる姫香を軽くいなす。
「いやーでもー、シュウスケ君ってばそーゆーのが趣味なの？」
「別に。カタログ見てたら偶々目に入って、部屋で着るだけなら楽でいいかなって」
「そういうの何て言うんだっけ？　着物って言うのは何か違うよね」
「今着てるのは、甚平。もう一個浴衣も頼んだけど」
「ほほぅ。つまり、はだける胸元、さらけだす首筋！　いただきますッ！」
「うっせぇ！」
ベシ、と姫香の頭にチョップを下す。
「で、だから用件は何なんだよ」
椅子は姫香に使わせるので、俺はベッドに腰掛ける。
「あーそうだった。あのね、冴城先生が二人でちょっと来いって」
「お前、そういうコトはもっと早く言え……」
「もう遅いわ」
声に振り返れば部屋の入り口には悠然と立つ冴城恭子その人が。
いつも通りの黒い白衣を棚引かせている。
「いつからそこに……？」
「二人がお互いの下腹部に手を這わそうとしている所から、よ」
「シュウスケ君ったらだ・い・た・ん」
「そんな場面微塵もねぇよ！」
というわけで、椅子は冴城に譲り、俺と姫香は大人しくベッドに腰掛けて上司の話を聞く。
「さて。神原秋介は修練棟での訓練を一月分終えたそうね」

「はい」
「成果は聞いているわ。流石に衝動解理者ってトコかしらね。優秀ね」
「それって関係あるんですか？」
「大有りよ。衝動を解理するコトは本能に近づくコトを意味するわ。人の本能つまり野性は、戦闘をそれだけ直感で行うコトが出来る。下地は完璧、後は武器の使い方を教えるだけでもう殆ど最強よ」
最強などと言われても実感は無い。
受けてきた訓練は、ナイフの扱い方と拳銃の撃ち方だけ。
人を相手にした訓練はしなかったし、まだ力を試したコトはない。
「それでね。今回、神原秋介と涼代姫香にはようやく前線に出てもらいます。
解りやすく言えば、任務よ。初任務。」
その言葉を聞いて体が強張る。
「ッ……。いよいよ、人を殺しに行けと」
スカンッと空のフィルムケースらしきモノを投げつけられた。
「話は最後まで聞きなさい。そんなんじゃ涼代姫香を満足させられてないんじゃなくて？
ガッついて焦って自分のコトしか考えない男はダメよ」
「そうなんです。シュウスケ君いつもいつも激しくするだけで私のコトなんてこれっぽっちも……。
逆にそれが嬉しかったりもするんですけどぉ……」
「だから、既成事実を捏造しようとするな。ったく、話の腰を折るなよ」
もう慣れた。いい加減慣れた。そう思わないと身がもたない。
「で。任務内容だけど、二人には高校に入学してもらうわ。　そこで、衝動解理者と思われる人物の調査、選別、保護ないし駆除をしてもらう」
「この年で、高校生に逆戻り……か」
「？　シュウスケ君、まだ十七歳でしょ？　充分、高校生だって」

「いや、まぁいいや。見た目は子供だしな」
頭脳は大人ってほど大人でもない気がするが。
「まぁ精々頑張って来てちょうだいな。頑張った分だけ、鞘朽での立場も良くなるから、ね。
仔細は追って通達するから、それまで待機よ」
はぁーい、と返事をする姫香。
俺は何とか頷きだけ返す。
部屋を出ていこうとした冴城が入り口の所でチョイチョイと手をこまねいている。
何事かと、駆け寄っていく。
「ねぇ神原秋介。前言ってた燕、本気で考えてみない？　和服フェチの持て余してる女性が何人か居るんだけど」
「結構です！」
「ちぇ。そりゃ、パートナーとの恋愛は禁止じゃないけど、涼代姫香だけに君を味わわせておくのは何だか勿体ないわねぇ」
「そんな事実ありませんから！」
「……冗談よ」
クスリ、と悪魔のような笑みを浮かべて冴城は去っていった。
冗談も程ほどにしてくれ……。
ふぅ、と息をついてクルリと振り返ると。
「さぁさぁ、シュウスケ君。二人の甘い夜を過ごしましょう」
などといいながら、ベッドの上で誘惑のポーズ？　を取る姫香。
「出てけぇッ！」
つまみだした。

#08：Ｈ－ａｌｌｕｃｉｎａｔｉｏｎ（ハリュシネィション）（後書き）

どうも、秋折紀織です。

ようやくお仕事開始です。
ちなみに、持て余している和服フェチのうち一人は僕だったりします。
嘘です。でも和服いいよね、和服。
流石に甚平はちょっとジジむさい感じもしますが、
着流しの着物とか着せたいです。男の子にも、女の子にも。
俺は……破廉恥な男かもしれん……。

感想等いただけると嬉しいです。
では。

#09：I－mpulse（インパルス）（前書き）

エロトーク絶賛継続中。
でも本番はヤりません。
ソフ倫がどうとか、この小説は全年齢向けですとかではなく、
ストーリー的に設定的に伏線的に秋介君は姫香とヤれません。
だからどうかご安心を？

#09：Ｉ－ｍｐｕｌｓｅ（インパルス）

見た目は子供【十七歳】、頭脳は大人【二十一歳】！
人生迷宮だらけの、戦闘員。
その名は、神原秋介ッ！

飽くなき赤色。

「用意は出来てる？」
必要資材の準備を終えて、修練棟の屋上に行くと冴城恭子がそこにいた。
「はい。後は、姫香が来るのを待つだけです」
「はいはい～、涼代姫香ただいま参りましたー」
姫香が屋上に駆け込んでくる。これで全部揃った。
「それじゃあ、これ着けて」
手渡されたのは、ヘッドホンとアイマスク。
それと、冴城の手には注射器。
「薬の中身も、それを打つ理由も解るわよね？」
「ココの情報をどんなカタチであれ知られるのは不味いから……ですよね」
「正解。何があるか解ったモンじゃないからね。鞘朽のコトを知ってる人間は少ない。
だからこそ、敵が居るかもしれないし、その敵は強大かもしれない。
そんなヤツらに捕まりでもしたら、お仕舞いだからね。コレはそのための保険。

はい、二人とも腕出して」
袖を捲くって、腕を出す。チクリと鋭い痛み。
薬液が体内に浸透する。
「眠る前にヘッドホンとアイマスクつけて、ヘリに乗り込みなさいよ。
乗る前に眠りでもしたら、踏んづけて屋上から落としてあげるから」
姫香にも打ち終わり、冴城は屋上から立ち去る。
特に見送るようなコトもせず、迅速にヘリに乗り込んだ。
シートベルトを締めて、ヘッドホンとアイマスクをつける。
目が暗闇を認識すると同時に、薬が効いて俺は眠った。

……。
赤い。
この赤色は何処で見たんだっけ。
思い出せない。
何時何処で見た？
赤い。
俺は何のために。
こんな赤色を見たんだ？
何故。
赤い。
……。

「おーい、シュウスケ君〜？　起きないとぉ、襲っちゃうヨぉ〜？」
「……ん。……ぅぁ」
「ウフフ。起きないみたいだからぁ、いっただきまーっす！」
「……寒、、、？　あ？」
「ハァハァ。これが、シュウスケ君の……ッ」
「う、うぇぁあ！？　何だ！？　何かが俺の上半身を滑ってる！？」
目の前が真っ暗で、何も見えない。

正体不明の何かが俺の首筋を撫ぜる。怖気と寒気がない交ぜになって前後不覚に落ちそうになる。
「残念。起きちゃったかぁ」
「その声は、姫香？　くそっ！」
アイマスクをつけていたのを思い出し、取る。
何故かヘッドホンだけは外されていた。どうせならアイマスクも取っておけ！
「……うわ」
絶句。
暗闇から解放された俺の視界は、肌蹴られた自分の胸元と、そこに指を這わせる姫香の姿が映っていた。
「シュウスケ君ってぇ、見た目細い感じだけどぉ。やっぱり男の子なんだよねぇ」
妙にうっとりとした姫香の瞳。声には恍惚感が混ざっている。
「悪ふざけも……大概にしろッ！」
容赦の無い一撃を、姫香の頭に振り下ろした。
「ったく、で。もう着いたのか？」
「イタタタ……うん。ここから車に乗り換えて仮住まいに移動だよ」
「了解。荷物はまだ車に載せてないんだよな。さっさと終わらすか」
「シュウスケ君、もうちょっと手加減してよね。まだ頭痛いんだけどー」
「それはこっちのセリフだ。悪ふざけするにしてももっとジョークの効いたモノにしろ。
そんなコトあるごとに迫られたら身が持たん」
「じゃあ今度からはライトな攻めでぇ～」
「……はぁ」
シートベルトを外し、荷台の荷物を下ろす。
ヘリが止まっていたのは、どこかの空港の一角で首尾のいいコトに目の前に車が停車済みだった。

トランクを開けて、資材を放り込む。
その間、姫香はヘリのパイロットと書類のやり取りをしている。
「こんなモンか」
「こっちも終わったよー」
「じゃあ行くぞ」
「ほいほいー」
助手席に姫香が乗り、俺は運転席へ。
予め見せられていた地図の通りに車を走らせ、今後の活動拠点となるマンションへ向かった。
助手席の姫香が物珍しそうにカーステレオをいじっている。
「シュウスケ君、車の運転出来るんだねー」
「まぁ一応、免許取ってあるからな」
鞘朽に来た以上、死人であるハズの俺には身分証明など意味の無いモノだが。
生前覚えた技術だけは体が覚えている。
「そうそう。冴城先生に聞いたよ、シュウスケ君ホントは二十一歳なんだってね」
「あぁ。そうだな」
「でも、体の成長は十七歳で止まってるんだってね」
「あぁ。そうだな。冴城の話によれば、これも衝動解理の影響なんだとさ。
俺の成長が止まったのも、解理する兆候だったんだろうよ。
成長は止まってるハズなのに、髪は伸びるし怪我しても治るし、自分でも不気味な体だと思う。何よりも都合が良すぎる」
「でもいいなぁ、永遠の若さかー。私のこの美貌を守るためには不老不死しかないのかなぁ」
「……そんなに、いいモンじゃない。
愚痴るつもりは無いが、四年間育ててもらった叔母さんも少し気味悪がってたな。
……気味悪がってたってよりは、心配してくれたんだろうが」

「あ、そっか……。でもでも、そのお陰でこうやって高校に潜入任務が出来るんだから今回ばっかりは儲けもんだよね」
「……かもな」
それっきり、姫香は黙りこくってしまった。
走り出してから、数十分。
丁度、信号で止まった時に隣を見れば、姫香は眠っていた。
「乗り物に弱いタチなのかな」
すぅすぅと寝息をたてる姫香は、普段とのギャップか随分と可愛らしく見える。
普段が可愛くないわけではなく、ただ単に神原秋介という男は、騒がしい女性が苦手なだけ。
信号が赤から青に変わり、アクセルを踏む。
マンションまでは後数分。その数分を永遠に感じたい。
そう思わないでもなかった。

「起きろ、姫香」
「んんん……むぅ……んぅ……」
「……起きないと、さっきお前が俺にやったみたいに裸にひん剥くぞ」
「……むにゃ……ばっちこーい」
「するわけねぇだろ」
ペチ、とデコピンを喰らわす。
「痛ぁ～」
「ほれ、さっさと荷物運ぶぞ。早くしろよ。明日からは学生なんだからな」
「はーいー」
荷物といっても、それほど多くは無い。
必要最低限の日用品と、武器がいくつか。その程度だ。
マンションのキーロックを外し、階段を昇る。
部屋は二階の一番角。

ポケットから鍵を取り出し、戸を開ける。
中は、随分と広く、寝室が二部屋とリビングキッチン、あとはバスルーム。
家具は元から置いてあるので、調達する必要は無い。
「うわぁ、いい部屋だね。ここが私達の愛の巣になるのね！」
「もしそうなったら俺は逃げ出す自信がある」
適当にツッコミを入れておいて、さっさと荷物整理する。
「そっちが姫香の部屋、こっちが俺の部屋。異論は認めない。食事当番とかは適当に回していこう」
「えぇぇぇ、一緒の部屋で寝ようよー」
姫香の声を右から左に聞き流し、自室に自分の分の荷物を運ぶ。
後は、今晩からの食料調達かな。
活動資金はちゃんと支給されている。もちろん限度額はあるので、無駄遣いなど出来るハズもない。
姫香も文句を垂れながら、自室に定めた部屋に荷物を運んでいく。
「姫香、買い物に行って来るから留守を頼む」
「えーっ、私も行く！」
「……だったら、今すぐ来い」
もう乙女の準備はどうのこうの、とドアの向こうから姫香の文句が聞こえてくる。
が、ものの数秒で姫香は出てきた。しかも着替えている。
「早いな」
「まぁね。早着替えは私の特技の一つだったりしちゃったりして」
「役に立たない特技だな。ほら、行くぞ」
明日からは、俺も高校生に逆戻り、か。

#09：Ｉ－ｍｐｕｌｓｅ（インパルス）（後書き）

どうも、秋折紀織です。

次話から高校編って言えばいいのかな。そんな感じのモノが始まると思います。

前に鞘朽の構成員は皆、死人で外に出れないとか言ってましたが、任務は別なのです。
秋介は死んで間もないので、行動範囲と思われる、高校と住居の半径云ｋｍに関係者が居無い事は調査済み。
姫香は死んでから十年弱経っているので、調査の必要なし。
というわけで、鞘朽から外に出られてます。

感想等いただけると嬉しいです。
では。

#10：Ｊ－ｅｓｕｓ！（ジーザス！）（前書き）

高校編の開幕でございい。
一応先にフォロー入れておくと、
神原秋介→涼原秋介
涼代姫香→神代姫香
と名前が変わっております。

#10：Ｊ－ｅｓｕｓ！（ジーザス！）

「というわけで、今日から一緒に勉強することになる――――」
「涼原秋介（スズハラ シュウスケ）です」
「神代姫香（カミシロ ヒメカ）でっす！　よろしくお願いしまっす！」

飽くなき赤色。

……珍しいコトもあるもんだ。
ウチのクラスに転校生が、二人も来た。しかもこんな季節外れに。
月山（ツキヤマ）先輩あたりが泣いて喜びそうだな。
「えー、それじゃ二人はそこの席で授業を受けて下さい」
そういえば、昨日の放課後に机と椅子を運んでたな。俺の横と後ろに。
こちらに歩いてくる転校生をボーッと眺める。
男子の方は、そんなに興味は無い。
何となく冷めた雰囲気と、妙な圧迫感を感じる気がするが、素性を知らないが故の緊張だろう。
女子の方は、結構興味ある。こちとら健全な男子高校生だからな。
見た目のスタイルは上々。同い年にしては幼いような顔立ちだが、出るトコは出てる。
それにさっきの自己紹介を見る限りじゃ、随分と明るいみたいだし。
益々、俺のタイプだ。
「……」

「……」
「……」
何故か、転校生二人と視線が合った。
いや、こっちは二人を見てたし、向こうも座る席の近くの俺を見るのは何ら不思議ではない気もする。
それでも、何か落ち着かない。
しかし、気にしたのは俺だけだったみたいで、二人は普通に席に座った。
俺の隣の席は、涼原とかいう男子。俺の後ろには、神代姫香という女子。
本音を言えば、隣の席に座ってくれた方が姫香ちゃんと喋りやすくて良かったんだが、後ろでも話しかけるコトは出来るし、列の最後尾だからプリント回収とかで偶然を装って手を触れるコトも出来る。
一長一短だが、まぁいいや。
不安で一杯の転校生を懇切丁寧にエスコート&サポート。そうすれば俺の今後の学園生活はまさにバラ色っさ！
とりあえず、次の休み時間に姫香ちゃんに話しかけて俺のコトを印象付けなければ！

嗚呼、現実は、そう甘くなかった。

チャイムの音を皮切りに、クラス連中が件の転校生を取り囲む。
俺はというと、昨日の晩飯の残りだった刺身を今朝食べたせいか、腹を壊してトイレに行っていたのだった。

完全にタイミングを逃し、目に見えるのはクラス連中の密集した黒山ボール……。
わいわいと聞こえてくるのは、殆どが質問だった。
『涼原君って、誕生日いつ？』　『何処から転校してきたの？』
『二人は知り合いなの？』
『血液型はー？』　『ねぇねぇ何で転校してきたの？』
『神代さんって彼氏とか居る？』『まさか前の学校の男子と遠距離恋愛！？』
『私はココにぃー涼原君ファンクラブの設立を宣言しますー！　同士よ集えー！』
『じゃあ俺らは姫香ちゃんＦＣを設立するぜ！　会員費は一人５００円な！』
『金取んのかよー！』『もちつけ！　会費は全て姫香ちゃんの誕生日プレゼントに回すと誓う！』
『じゃあ俺１０００円払う！』『じゃあ俺１万円！』『じゃあ俺１００億万円！』『ねーよ！』

なんともまぁ、ノリのいいクラスメイトである。いや、人のコトは言えない気もするが。
なんとなく、というかタイミングを逃したので、俺は教室前の廊下でグダグダしていると、ドタバタという足音が聞こえた。
「あ、やっぱ来たんだ。月山先輩」
「あったり前だのクラッカーよ！　こんな時期に転校生！　しかも二人！　しかも男女！　しかもカッコイイ&カワイイ！
こんなおいしいネタ、放っておくわけにはいかないわ！
で、噂の転校生は何処！？」
「あの、人だかりの中心地ですけど……」
「おーけぃ……いざ行かん！」
まるで、某光の巨人が空を飛ぶ様のように、人だかりに突撃をか

ける月山先輩。
その勢いは、連中の質問攻めを止めるばかりか、道を開けるにまで至った。
「はぁい、どうも！　私、三年の月山花樹（ツキヤマ ハナキ）！
新聞部部長です！　お二人にインタビューよろしいですか！」
自前のボイスレコーダーのマイクをずずいと向ける月山先輩。
新聞の記事になりそうなコトなら、どんなコトでも情報収集する。
その情熱は尊敬すると同時に少しヒク。
転校生二人は、月山先輩のテンションについていけてないみたいで、ポカーンとしている。
まぁ当然だろう。初対面であの人のテンションについていける人はそうそう居無い。
「それで、ずばり聞くけど。
この時期に転校してきたのは、何か問題でも起こしたからですか！？」
ずばり聞きすぎだろ……。
人に話したくないようなコトだったら、どうすんだよ。
月山先輩のマイクは涼原の方に向けられているので、自然あいつが答える流れになる。
「……一身上の都合により」
沈黙を精一杯溜めた後に言う言葉がそれか！　それじゃ誰も納得しねぇよ！
「むー、ダメね。そんな答えじゃ大衆受けしないわ。　じゃあそっちの彼女！」
今度は姫香ちゃんにマイクが向けられる。
「えーっと、私の両親が海外出張で日本を離れなければならなくて、私はどうしても日本を出たくないって無理を言って、こっちの親戚のお家に預けられる予定だったんですけど、その親戚のお家で赤ちゃんが生まれちゃったのでお邪魔になるだろうからって近くのマンションを借りて住んでるんです。

シュウスケ君と一緒に」

な、なんだってー！

その場に居た全ての人間が凍りつく。マイクを持った月山先輩の目も点になっている。

そして何故か横の涼原までもが唖然呆然口をパクパクと驚きに打ち震えていた。

やはりというか、さすがというか、一番最初に立ち直ったのは月山先輩だった。

「そそそそれはつまり、同棲ってヤツっすか！？」

「あーん。やっぱり他人から見たら、そう見えちゃうのかなぁ。でもぉそんなに間違ってないのカモ」

今、俺を含む全ての男子の気持ちが一つにまとまった。

『涼原コロス！』

「なーんちゃって！　一緒に住んでるのは本当だけど涼原君も似たような境遇で、私の両親が彼の両親と知り合いだったから、お金の問題もあるしルームシェアしようってコトで一緒に暮らしてるんです。

だから、同棲じゃなくて、同居かな」

あぁしかしそれでも俺達男子の怨念は晴らせない！

同居だろうが、同棲だろうがそんなのたかが漢字一文字違い！

男と女が一つ屋根の下で、嬉しくないハズがなかろうて！

「ほうほう。今のコメントについて、涼原君の方から何か一言！」

月山先輩のマイクが再び、涼原の口へと向く。

「……異性との同居なんて、気が磨り減るだけだ……」

はい出ましたー、自分の幸福を理解してない愚か者がー！

「それに俺は一人暮らしがしたかった。その方が、ちょっと楽しそうだったしな」

物憂げな表情、タイミングよくふわりと吹く風が前髪を揺らす。

心無しか背景がキラキラしてる気がする。
そんな涼原の表情に、女子一同は胸キュン（死語）みたいだ。
気障ッたらしいヤツめ！
だが、勝てそうにもない。認めたくないモノだな。若さゆえのあまやち、もとい過ち。
悔しいが何故かヤツからは年不相応な大人っぽさがある。
そこらへん、女子のハートを鷲掴みにする重要ファクターだろう。
「っし。こりゃ今週はいいネタ書けそうだ。じゃ、私はコレで失礼！刷り上ったら、お二人に上げるからー」
マイクを仕舞いつつ、転校生二人から離れてくる月山先輩。
「と、いうわけだからー、放課後に部室ね。ちゃんと来なさいよ、十叶（トガノウ）！」
はいはい、と適当に返事をして、自分のクラスへ帰っていくであろう先輩を見送る。
教室内に視線を戻すと、再び質問タイムが始まっていた。
さっきの姫香ちゃんの発言を受けて、質問事項が更に増えたのだろう。
チャイムが鳴るまで、まだ後三分ぐらいある。
同居だろうが、何だろうが、とりあえず姫香ちゃんに俺のコトを印象付けないとな。
涼原はどうでもいいが、とりあえず地獄に落ちろと願っておこう。

#10：J－esus！（ジーザス！）（後書き）

どうも、秋折紀織です。

ちょっと解り辛くなる上に、視点変更のタメなんのフォローも入れられなかったのですが、約二名が偽名を使っています。
といっても、苗字を一字入れ替えただけですが。
それが逆にややこしさを冗長させてる感もありますが。
というか書いてる方もややこしかったり。

そして、新キャラが二名。
新聞部部長、月山花樹（ツキヤマ ハナキ）。
高校編の主な語り部、十叶哉治（トガノウ カナハル）。

仲良くしてやってください。

#11：Ｋａｎｉ（カニの香りの悪魔）（前書き）

サブタイをＫａｎｉ【カニ】にするか、Ｋｏｏｌ【クール】にするかでちょっと迷ったけど、
ＫＯＯＬってお前それスペル違うだろって突っ込まれるのが面倒だな、と思ったので、安直にＫａｎｉにしました。

#11：Ｋ－ａｎｉ（カニの香りの悪魔）

間違ってる。
何から何まで間違ってる。
だから、言ってるだろう？　間違ってるって。

飽くなき赤色。

「だから、蟹酢はダシの代わりにならねぇんだよ！」
「そんなコトないもん！　蟹だもん！　蟹の味だもん！」
「だから、その時点で間違ってるんだよ！」
俺と姫香が土見台高校に潜入入学して、その初日――――の晩。
初任務だから、と少し贅沢しようという姫香の勢いに流されて、カニ缶入りのカニ雑炊を作ろうというコトになった。
買い物はマンション近くのスーパーに二人で行ったのだが、途中、今後のための非常食なんかを見るために二手に別れたのが良くなかった……。
「そんなに蟹酢の雑炊が食べたいなら、俺は別の鍋で作る！
お前は責任持ってぬる酸っぱいホットドクターペッパーみたいな雑炊を一人で啜ってろ！」
「シュウスケ君のバカー！　おいしいに決まってるもん！　蟹はおいしいんだもん！」
「だから、蟹は蟹でも蟹酢は蟹のダシにならねぇよ！」
どうやら、『蟹の出汁』という商品があるらしい。

その名の通り、カニの味がするダシだと思う。実際スーパーで見かけるコトもあるそうだ。
が、何を勘違いしたのか、姫香はカニはカニでも『蟹酢』を買ってきた。
「だから、何で蟹酢なんだよ！？」
「だって蟹のダシが売ってなかったんだもん！　代わりになると思って買ったの！」
「何でそういう発想になるんだ！」
ありえない。
どんな化学変化、どんな物理法則や宇宙の法則が乱れようとも、蟹酢が蟹出汁の代用物になるなんてありえない。
「解った。解ったから、お前はもう座っててくれ。後は俺がやるから」
「シュウスケ君のアホー！」
罵声を残して、自室に退散していく姫香。
「……なんとか、するか」
今の所、鍋には沸騰しそうな水が張ってあるだけ。
蟹酢はとりあえず放置して、軌道修正を図る。
サイドテーブルの上には、材料であるカニ缶、ネギ、卵、しめじ。
あとは炊飯器にご飯。
とりあえず、弱火にした鍋にしょう油、塩、カニ缶を入れる。
「これで何とか、ダシの代わりにならないかな……」
ネギとしめじを刻み、卵を溶いておく。
鍋にご飯と切ったしめじを入れて煮込み、ご飯が柔かくなったらネギと卵を入れてフタをし、火を切って蒸らす。
一応の完成を見せたので、姫香を呼ぼうと部屋の方へ振り返る。
「……怖ぇよ」
ドアの隙間からこちらを凝視する姫香の顔があった。
「……蟹酢いれた？」
「……入れない。蟹酢を入れなくてもおいしいから、とりあえず食

べてみろ」
観念したのか、むー、と唸りながらテーブルに着席する姫香。
まぁいい。今日ぐらいは皿まで準備してやるか。
今後は分担制にするがな。
「ほれ」
お椀に盛った湯気のあがる雑炊とハシを姫香の前におく。
後は、適当に見繕ったおかずを並べ、自分も座る。
「いただきます」
「いただきますー」
渋々とハシを取り、雑炊を口に持っていく姫香。
その顔は、蟹酢を入れなかった恨みでふてくされている。
……いや、ふてくされていたのが嘘みたいだ。
「おっいしー！　おかわり！」
「速ッ！？」
「シュウスケ君すごーい！　男の人が料理上手いなんてペンギンが空を飛ぶくらい嘘だと思ってたけど、居るには居るんだねー！」
「……あっそ」
さっきまでの姫香は何処へいったのか、輝かんばかりの笑顔で平らげていく。
そういう、食卓。
そういう、団欒。
そういう、夢幻。
「ごっちそうさまでっしたー！」
「ごちそうさま」
「食器の片付けは、私がやるからシュウスケ君先お風呂入っててーよー」
「お前な……。男が入った後に入るの嫌だろ。待ってるから洗い終わったら先入れよ」
「別に気にしないよー？」
「……なら、いいけど」

というわけで、風呂。
自室から着替えを持って、脱衣所へ。

×××

シャワーから吹き出るお湯に、一日の疲れも溶け出して流れ去っていくようだ。
それほど緊張したつもりも無いのだが、やはり転校生。
一日中質問攻めで、喋り通しだったから疲れた……。
いつの間にか、ファンクラブとか出来てたし。あれは本気なんだろうか……。
いやそれにしても、まさか姫香が初日に同居を暴露するとは思わなかったなー。
隠し通すにしても、買い物とかしてるのを見られればいずれはバレるだろうとは思ってたが……。
普通、自分から言うか？
でもまぁ、これで気兼ねなく二人で外出できると思えば、そう悪いコトでもないか。
そこらへんやっぱ計算してたのだろうか……。解らん……。
その時。カチリ、とシャワーの流れる音に紛れて小さな小さな金属音がした。
続けて蝶番の軋む小さな小さな音。足音は完璧に消えてる辺り、逆にバレバレだ。
曇りガラスのドアの前に人影が浮かび上がる。
「だんな様ー！　お背中お流しいたしまっす！」
バーン！　と開け放たれる風呂場のドア。
もちろん突撃をかけてきたのは姫香。
俺は……。
「来るかなとは思ったが、まさか本当に来るとはな」
対策は万全。持ち込んでおいたバスタオルで防備済み。

「うふふのふ。そんな薄布一枚、私のスーパーアイにかかれば透視するコト容易し！」
「この……万年発情猫がッ！」
もう一枚のバスタオルを姫香に投げつけて、位置を入れ替わるように風呂場の中へ引っ張り込む。
「にゃあ！？」
バスタオルに防がれた視界に、足をもつれさせた姫香の横を通りぬけて脱衣所へ逃走。
そのまま風呂場のドアを閉めた。
中からゴン！　という鈍い音が聞こえた気がするが、気にしない。
「痛いよー、頭打ったよー、足も挫いたよー」
「知らん」
「ハァハァ……でも、これがシュウスケ君の残り湯……」
「止めろよ！」
なんかもう、俺の疲れの半分は姫香のせいなんじゃないんだろうか……。
っつーか、シャワーなのに残り湯とかあるのかよ？
まさか床でも舐めてるのか……？
現実を見たくなくて、俺は曇りガラスのドアに振り向けなかった。

「じゃあそういうわけで寝る」
冴城への定時連絡を終えて、やるコトも無くなった。
テレビを見るような気分でもなし、これ以上姫香の冗談に付き合う気力もなし。
「もう寝るの？　寝巻きの浴衣が殺人的に（性的な意味で）似合ってるシュウスケ君」
何かもう色々と無視して自室へ向かう。そして当然のように着いてくる姫香。
「お前はこっちの部屋じゃないだろ」

「夫婦の寝室は一緒って相場が決まってるのだよ、ワトソン君」
瞬間。頭に昇ろうとした血を、殺す。
「……夫婦って言うな。そんなんじゃないだろ」
「シュウスケ君？」
「俺とお前は……パートナーだろ。助け合う仲だろ。お前は……」
俺は何が言いたいんだ。
パートナー？　そうパートナーだ。パートナーだったら、冗談を言っちゃダメなのか。
パートナーだから、姫香は俺に冗談を言うし、時々本気だったりするんだろ……。
「ごめん。ちょっと冗談が過ぎたね。一日中言ってたらそりゃシュウスケ君も滅入るよね」
「姫香……」
「明日からはもうちょっとライトな感じで迫るね」
「お前実は全然反省してないだろ！？」
「そんじゃおやすみ～。ばいにー」
ひらひら、と手を振りながら自分の部屋に駆けて行く姫香。
俺はその背中に、何を思うべきなのだろう。

#11：Ｋ－ａｎｉ（カニの香りの悪魔）（後書き）

どうも、秋折紀織です。

いくつかパロってみたんですが、コアなネタだったり解りづらかったりその他諸々ですいません。
そして遅々として進まない物語……。
秋なのに寝巻きが浴衣なのは特に問題ないです。
布団がちゃんとあれば、半そで短パンでも冬は寝れます。

以前、前置きに書いた『秋介と姫香はヤれない』ってのをここらで一つカタチにしてみました。
いや、生殺しですな。
別に秋介が男にしか興味のない男ってワケじゃないですよ。
別に秋介が若い割りに体に問題があるとかそういうワケじゃないですよ。
もうちっと深い理由があるのですよ。
それに本人が気付くのはもっと先になりそうですが。

感想等いただけたら嬉しくて阿波ＤＡＮＣＥ！するかもしれません。
では。

#12：Ｌｅｔ（レット）（前書き）

強靭・無敵・最強！
粉砕・玉砕・大喝采！

#12：L－et（レット）

普通だった。
俺の人生は限りなく普通だった。
世の中には、荒波に揉まれるかのような人生を送るヤツが居るかもしれないが。
それでも俺の人生は普通だった。

飽くなき赤色。

俺のクラスに転校生が来てから二日目。
相変わらず、周囲の興味は絶えず質問や雑談をしに人が集まってくるが、それでも昨日に比べたら落ち着いた感じだ。
俺は朝一で月山先輩に渡された『コレ』を渡すかどうか迷っていた……。
ま、でも。いずれ校内に配られるワケだし、速かれ遅かれ目に入るコトになるなら、姫香ちゃんとの会話のきっかけとして俺から手渡すのもアリ、かな。
「あ、そうだ。神代さん」
「なぁに？　十叶君」
敢えて形容するなら、天使の微笑みと言った所か。
年の割りに幼い顔立ち、豊満なボディ、スラッとした肢体、サラサラの長い黒髪。
なんかもう可愛すぎて困る。
「俺さー、新聞部なんだけど。今朝一番に刷り上ったウチの新聞を

特別に先取り公開するよ」
ハイ、と二つ折りの紙一枚を渡す。
「今日の一面は、『話題の転校生、土見台に現る！』だってさ。ちなみに記事を書いたのは、昨日突撃してきた新聞部部長の月山先輩」
「あ～、あのハイテンションな人ね」
新聞と呼ぶには少々、お粗末すぎる感もするが、とりあえず右上にはデカデカと『十月台新聞』の名がついているので、新聞と認識しても問題ないだろう。
ちなみに、十月台新聞という名前の由来は、月山部長の月の字と、副部長である俺の苗字の十。それと土見台高校の台。
それを並べて十月台新聞（トツキダイ）。
なんとも安直ではあるが、代々そういう決まりで新聞の名を決めるのだからしょうがない。
「うわぁ、こんな写真何時撮られたんだろー。全然気付かなかったー」
一面を飾る写真は、もちろん件の転校生のツーショット。
視線は向いてないから多分、隠し撮りだろう。
いや……そっぽを向いてるハズの涼原の視線が微妙にこっちを向いてる、か？
っつーか、昨日の今日でよくこんなに資料を集めたな、月山先輩……。
「あ、ねぇねぇシュウスケ君。見て見て。
『若い身空で互いの苦労を背負い合い賢明に生きるべく同居する二人』だって。何か照れちゃうねー」
姫香ちゃんが記事の一文を指差して笑っている。
かわいい。
かわいいのだが、その笑顔を向けられているのは、常に冷ややかな表情の涼原だった。
そうしてると格好いいのは解る。解るが、クラスメイトとして付

き合う上ではやり辛くて困る。
折角、姫香ちゃんが笑顔で話しかけているというのに、いつもの顔で『あぁ……』なんて呟くだけ。
まったく！　涼原のヤツは、まったく！
「そういえば、十叶君が書いた記事もコレに載ってるの？」
「え、あ。いや、それは月山先輩が緊急で刷った速報だから俺は書いてないよ。
全部、月山先輩一人のお手製」
「へ～、凄いんだね。月山先輩って」
い、いかん。何か俺の見せ場が無いぞ。
「それじゃ、今度は十叶君の書いた記事も見せてね」
「も、もちろん！」
やばい。本格的に可愛いぞ……！

唐突に何の前触れも無くそれはいきなり起こった。
響く轟音、視界の端に映る赤色。

何かが爆発する音だと認識出来たのは、音が鳴り止んでから数秒後だった。
同時に窓ガラスが何枚も割れる音も聞いた。
続けざまに、人の悲鳴。
廊下に振り向くと、何か赤い色をしたモノが揺らめいていた。
雑然とする教室。
唖然とする人間も居れば、野次馬にたかろうとする人間も居る。
そんな中、野次馬とは別に、駆けて行く後姿を見た。
涼原秋介と……神代姫香……。
俺は無意識にその二人を追いかけるように、教室を飛び出した。
俺も大概、運動は得意な方だが、スタートの遅れを除いてもあの

二人の速さは半端なかった。
ようやく追いついたと思ったら、既に現場についていた。
そう現場だ。
一階廊下側の裏庭。
そこには何が存在していたのかを思い出すのに時間を要するぐらい、『何も無かった』。
存在していたであろう人工物は皆無。
整列していた植木は根元から吹き飛んだモノもあれば、葉をごうごうと燃やすモノもあった。
炎は次々と木を渡っていき、かなりの大きさになっていた。
そのせいか、酸素が薄い感じがするし、熱い。
「……何で、十叶がここに居るんだ？」
「あれ？　十叶君も見に来たの？　さっすが、新聞部」
「神代さんたちが走ってくのが見えたから、つい追いかけて来たんだよ……」
涼原と姫香ちゃんはこの惨状を見ても、幾分も動揺していないみたいだった。
涼原はともかく、姫香ちゃんが軽口をたたけるぐらいにいつも通りなのが少し……不気味で。
「破片は、コンクリブロックと植木、後はプラスチックか」
焼け焦げた地面にかがんで、現場検証らしきモノを始める涼原。
「近くの廊下の窓も全滅ー。幸いにして人は居なかったみたいね。目の前の教室は、そんなに被害無いみたいだし。道路側も破片が散らばっていった程度か。
意外に、学校の塀が丈夫だったんだねー」
ガラスの抜け落ちた窓枠に指を滑らせる姫香ちゃん。
何だろう、この二人……。
不気味とかそれ以上に、手馴れている？
何に慣れているんだ？　事故に？　どうして？
「十叶」

「ん……あ、何？」
涼原に名前を呼ばれる。考え事をしていて返事が少し鈍る。
「ここに何があったか、覚えてるか？」
「……あー。灯油とか置いてある倉庫みたいなのがあった気がする」
「じゃあそれに火がついたってコトか」
「そーだねー。事故なのか故意なのかは解んないけど。
じゃ、退散しよっか。そろそろ仕事熱心な公務員の人たちが着く頃だし」
スタスタと何事も無かったかのように、教室に戻っていく二人。
「ちょ、待てよ。涼原も神代さんも、何でそんなに落ち着いてるんだ？
てか、何のためにココまで走ってきたんだよ？」
「んふふー、残念ながら、それは～……」
「……禁則事項だ」
え、ちょ。そのセリフ二人で練習したのか？

#12：L－et（レット）（後書き）

どうも、秋折紀織です。

第三者視点で書くと、涼原もとい神原秋介のキャラがよく解らなくなります。

昨日の神原君は今日の涼原君ではありません。困ったものです。

第三者視点っつーか、十叶哉治君の視点ね。

さて。

爆発したわけですが。

灯油を集めてそこに火を放って、じゃあどれくらい爆発するのか？

そもそも爆発するの？　大きく燃え上がるだけじゃないの？　それが爆発じゃないの？

と、色々と解らない。

でも実際に試すわけにもいかず、とりあえずこんな感じにしてみました。

今の時代、焼却炉なんか使ってないだろうからねぇ。

爆発させれそうなのがコレしかなかったのよ。

感想等いただけると嬉しくてハイパークロック！

では。

#13：Ｍ－ａｓｓａｃｒｅ（マサカー）（前書き）

やばい。何故か神原秋介の口調がおかしい。
ここ数日、あまりの暑さに寝れないから、か？

#13：M－assacre（マサカー）

発破爆散。
それから、一週間が経ちました。

飽くなき赤色。

「というわけで、灯油倉庫の爆発は事故みたいです」
毎夜、二十時に行う冴城への定期連絡。
「倉庫の隅に長らく置いてあったポリタンクが劣化して穴が開き、漏れた灯油が道路まで伸び、数分前に捨てられたと思われる火の燻った煙草から引火。
導火線を伝う様に、火は倉庫内へ侵入し他の灯油に一気に誘爆した。
答えが出るのに一週間掛かったが、大体こんな感じだ」
『そう、確かに思わぬ事故だったわね』
「最初は例の推定衝動解理者がいつの間にか解理していて、何か仕掛けたのかと思ったけど、監視した限りじゃまだ解理してないみたいです」
『そうね。解理者である神原秋介がそう言うなら間違い無い。解ったわ。それじゃ引き続き任務を続けてちょうだい』
「了解」
『それでさ、神原秋介』
「何か？」
『これも任務の一つだと思ってさ、私の愚痴を聞いてくれない？』
「……手短に」

『おーけー。実はさ、君らとは別の場所に派遣してた前線戦闘員がヘマしちゃってさー。
多分、今頃テレビのニュースで散々話題になってると思うんだけど……。大朽羽（オオクチバ）の大火災。見てない？』
「……あー。今丁度、姫香が見てる」
視線をテレビに向けると、画面には燃え盛る工場地帯を空から撮影した所が映っていた。
大朽羽の大火災。何処かの工場が爆発炎上し、次々と別の工場に火が移り最終的に工場地帯全てが火の海になった。
死傷者は解っているだけでも数百人以上。経済的被害も半端無いだろう。
「これを、衝動解理者が……？」
『正解。ヘマした上に解理までさせちゃってオマケに行方を見失って、気付いたら辺り一帯が煉獄状態よ。
まぁターゲットとウチの戦闘員は最後の最後、同士討ちのカタチになってそのまま身動き出来ず火の津波に飲まれて消えたケド。
問題は、事後処理よ！　もちろん衝動のコトが表に出るコトは無いけど、これだけの被害を出したキッカケは鞘朽だってのは一部のお偉いは知ってるもんだから、さっきから文句の電話が鳴り止まないのよー』
「……それは、ご愁傷様です」
『そこは、お疲れ様って言っときなさい！　はぁ、愚痴ったら少しは楽になったわ。
んじゃまぁあと数週間、例の推定衝動解理者を監視したら君らの初任務は何事もなく終わるから精々頑張りなさい』
「はい」
これにて、通信終了。
携帯端末を仕舞って、ソファでテレビを見る姫香の横に座る。
「冴城が、あと数週間頑張れ、だとさ」
「あの先生、見かけによらず意外に優しいからね～。私達みたいな

末端の使い捨て兵士にもよくしてくれるんだよ」
グラスに入ったお茶を煽る。
「あ、シュウスケ君。私もお茶飲みたいー」
「……仕方ねぇな」
戸棚からグラスを、冷蔵庫からお茶のボトルを、冷凍庫から氷をそれぞれ見繕う。
「ほれ」
「さんく～」
その日の晩も何事も無く眠りについた。
この一週間と数日。
衝動解理の可能性があるとされる土見台高校の生徒を一人、監視していたが、何事も無かった。
あと三週間ほど監視を続けて、それで問題が無ければ俺たちは引き上げる手筈になっている。
そう……今日まで問題が無くとも、明日になれば問題はいくらでも発生する確率を秘めている。

／／／

さぁて、姫香ちゃんが転校してきてから約一週間。
ほぼ毎日、アタックをかけてみてはいるものの、イマイチ反応は薄い。
やっぱり、涼原のヤツが姫香ちゃんの心を捉えて離さないのだろうか。
それでも諦めずアタックをする俺って何て心が強いのだろう。いや、弱いのかも？

まぁいい。この一週間、集めた情報を元に姫香ちゃんの通学路と時間帯は把握済み！
偶然を装って、朝一から姫香ちゃんとのストロベリィトークを！
よし、きた！
「あれ？　神代さん？」
「おー、十叶君だー。おっはよー。何、十叶君もここの道通るの？」
「うんまぁね。いや、それにしても凄い偶然だ」
「……綿密に計算した上での遭遇は、偶然とはいえないな」
うぉ！？
「シュウスケ君、計算がどうかしたの？　数学で解んない所でもあった？」
「な、何で涼原がここに！？」
「何でと聞かれてもな。別にわざわざ時間をズらして登校するコトもないだろ」
くっ、涼原秋介め！　姫香ちゃんと玄関から一緒に登校だと！？
羨ましい！
っていうか、俺の秘密調査がバレてる！？
「隠密行動の仕方をお前に教えてやろうか？　次からはバレないようにするんだな」
「くっ、畜生！　覚えてろよー！」
「あ、十叶君！　一緒に行かないのー？」
脱兎の如く逃げる俺カッコワルイ。
やはり俺の前に立ち塞がるのか、涼原よ！　ならば俺はお前という壁をぶち壊して！
愛しのお姫様をゲットしてやる！

「あー……しんどい……」
よろめく足を必死に制して校門前に辿り着く。
流石にあのまま全力疾走で学校まで走ってくるのは辛かった……。

でも完走した俺を俺は褒めたい。よくやったぞ俺。褒美は昼飯のパン一個増量だ。
「と、あれ月山先輩か？」
校舎の隅で何やらコソコソモソモソしている月山先輩を発見。
もしかしたら、次の新聞の写真か何かを撮ってるかもしれない。
邪魔したら悪いので、俺はそのまま自分の教室へ向かった———。

のが、いけなかったのかもしれない。
でも仮にこの時、俺が何かをして、それで何とかなったのだろうか？
あの時の俺が出来るコトはきっと、無かった。

その日、土見台高校は、文字通り『崩れ去った』。

#13：Ｍ－ａｓｓａｃｒｅ（マサカー）（後書き）

どうも、秋折紀織です。

解りやすいカタチで、事件が起ころうとしています。

感想等いただけたら嬉しくてＥＣＳＴＡＳＹ８１６！！

では。

#14：N－ｅａｒ（ネェル）（前書き）

……東方風神禄プレイ中。難しいなァ。

【解る人だけ解ってください】

#14：Ｎ－ｅａｒ（ネェル）

「これから、皆さんを殺させてもらいます」
どこぞで聞いたようなセリフ。決定的に違うのは『殺しあう』ではなく『殺させてもらう』。
つまり、一方的な陵辱。
その惨劇の名を――――。

飽くなき赤色。

まず、最上階に位置する四階が吹き飛んだ。
四階に通常教室は無く、専門分野の授業で使う教室しかない。
つまり、理科室や音楽室といった類のモノ。
だからこの段階で人的被害はまだゼロだった。
パラパラと窓の外に上から降ってくる破片が見えた。
『聞こえましたかァ？　今の音』
教室に備え付けられているスピーカーから楽しげな声が響く。
音質が悪いが、女の声だと解る。
『さァて、次はどの階が吹き飛ぶのかなァ？』
今の時間は、朝のＨＲの時間だ。だから生徒は皆、自分達の教室にいる。
つまり、確実にこの放送を聴いている。
クラスメイトたちがどよめくと同時に、教室から飛び出す者が現れ、その次の瞬間。

今度は一階が爆発した。

ノイズ混じりのスピーカーから、笑い声が聞こえる。

「あらあら、うふふ。逃げ出そうとした子が口火を切っちゃったみたいだねェ。

誰かは知らないけどォ一番最初に外に飛び出そうとした子のせいで、一階の人たち皆が死んじゃったァ。あはは」

おそらくは、玄関かあるいは廊下のどこかに線を張り、触れたら一斉に起爆する、という仕掛けだろうか。

そして全員がくまなく死んだコトを確信するその声は、つまり逃げ場のないように爆弾を仕組んだというコトに他ならない。

こんな状況において、俺は何故か得体の知れない冷静さを持っていた。

今までの俺なら、たかが灯油倉庫が爆発した程度で慌てふためくハズなのに。

この瞬間の俺は、明らかに異様なまでに、冷静だった。

でも、冷静なだけで、何の力も感じない。

一種の諦めかもしれない。誰よりも早く、自分はココで死ぬんだ。と思っているだけなのかもしれない。

逃げ出そうとしたクラスメイトたちは先ほどの声を受けて、教室から出るに出られず、オロオロしていた。

残された三階と俺の居る二階が爆発しない所を見ると、他のクラスの連中も何とか踏み止まっているのだろうか。

「……昨日の今日、か」

隣の席で冷静に座り続ける涼原が何か言葉を漏らした。

その意味は俺には解らない。

「危険領域突入って感じ？」

「あぁ。この調子だと解理したのは確定事項だ。そして一階にいる一年生は全滅。もう『駆除』のレベルだ」

やはり涼原は解らないコトを言う。しかし姫香ちゃんには通じる言ノ葉。
何かする気なのか？　この二人は。
無茶だ。地雷はどこに潜むか解らない。下手な動きをとれば即死は確定。
『あの声』がどんな仕掛けを打っているのか解らないのに……。
涼原と姫香ちゃんを止めるべきかと、声をかけるか迷う。
そんなきょどった俺と涼原の視線がカチ合う。
「……意外に冷静だな。十叶？」
「きっと多分、死を受け入れてるだけだ。どうせ死ぬなら何をしても一緒だろ？
それならもう。俺は別に騒がないさ」
「諦めか。……ま、悪いコトとは思わないけどな」
涼原が席から立ち上がる。
「それでもどうせ死ぬなら一矢報いたい、と俺は思うけどな」
「私もシュウスケ君に同感～」
次いで姫香ちゃんも立ち上がる。
「……下手に動くと、自分のせいでここに居る全員が死ぬのに？」
「もしそうなっても自分も死んじゃうんだから関係ないじゃん～？」
以前に不気味だと感じた。その雰囲気を今再び姫香ちゃんは纏っている。
これが、この雰囲気が、神代姫香という女の子の本当の顔……？
「じゃ、最後になるだろうから教えておいてあげる。
私のホントの名前は、涼代姫香でぇ。こっちは神原秋介って名前なの。誰にも言っちゃダメだからね？」
偽名？　二人の名前をたかが一字入れ替えただけじゃねぇか。
その程度なら別に偽名使う必要ないだろ。
「お前ら……まだ生きてる人間を助けようって言うのか？」
「……それは結果論だ。俺達は『あの声』の主を殺しに行く。その

結果、助かる人間が居るかもしれない。それだけだ」
「そうそう。ぶっちゃけ、人質に取られても『じゃあ殺せば？』って感じだからそこらへんは間違えないようにねー」
たった一週間と少し。
ただそれだけの間、この二人にクラスメイトとして接してきたが。
例え、一年。十年。付き合い続けたとしても、この二人の持つ異様さを見抜けたかどうか……。
『こんな状況にならなければ、俺はきっと……』

恐怖に震える教室から、二人は出て行った。
誰も彼も、二人を止めるコトはなかった。
先ほどの一階の爆発を考えるに、自分ではない誰かが教室の外に出るだけで死ぬかもしれないのに。
だってこの学校の中で生きてる人間はきっともう周りが見えてない。
必死に眼を閉じ、奇跡を願うのだ。
己が生きて帰る姿を目蓋の裏で幻想するのだ。
それがきっと普通。
まだ十七年程度、この甘い甘い世界で生きただけの子供にはそれが普通。
音がした。
爆発音ではない。もっと鋭い感じの音。
窓の外からだった。音はサイレン。
グラウンドの向こう、校門の前に救急車や消防車やパトカーやらが集まっていた。
爆発音を聞きつけた近所の人かあるいは生存中の誰かが携帯で呼んだのだろうか？
向こうも状況が掴めないままにとりあえず学校の敷地内に入ってくる。

――その場に来た救急車三台、消防車五台、パトカー三台。
全てがグラウンドに侵入した所で、地面が弾けた。

赤い爆炎。

天高く掲げられる車両たち。

焼け焦げながら中から衝撃で飛ばされ、そして堕ちていく燃えカスの人間だったモノたち。

赤い赤い爆炎。

赤い赤い赤い赤い爆炎。

そして舞う砂煙。

そして舞い落散る砂煙。

カチリ、と。
俺の頭の中で何かが鳴った。
今すぐにでも――俺は、声の主を倒さなければ。

#14：Ｎ－ｅａｒ（ネェル）（後書き）

どうも、秋折紀織です。

爆弾一杯のお話。ハイスクールテロリスト。
爆弾の設置は夜中にやったようです。
グランドの爆弾は地雷とかではなく、手動起爆。
四階の爆弾も手動起爆。
一階の爆弾はピアノ線による自動一斉起爆。
同じ仕掛けは二階、三階の階段にも。また手動での起爆も可。
爆発物は綿密な計算の元に設置され、柱等へのダメージを最小にした上で、
教室内、廊下上に存在する生物全てを爆殺。
それにより、建物自体の崩壊は防がれる。

神原秋介、涼原姫香両名が目指すは、ある唯一の場所。
十叶哉治が目指すのもまた、同じ場所。
そこに待つは、言うまでも無く……。

感想等いただけたなら嬉しくてヒャッホーイ！
では。

#15：Ｏ－ｒａｔｏｒｉｏ（オラトリオ）（前書き）

人が人を殺したがるのは、
ホモサピエンスがネアンデールタール人を駆逐した遺伝子の名残なんだろう。

#15：Ｏ－ｒａｔｏｒｉｏ（オラトリオ）

正直、得物が無いのはやり辛い。
でもきっと、アイツが持ってるだろう。
だからとりあえずは……。

飽くなき赤色。

二年Ａ組。教室から、三人の人間が消えた。
一人は涼原秋介と名乗っていた、神原秋介。
一人は神代姫香と名乗っていた、涼原姫香。
そして。
一人は十叶哉治と名乗る、『■■の■■』。

「どうだ？　姫香」
「えーっとね……、そこの階段の手前に一つ。これに足を引っ掛けたら丸々一階分が爆発って仕掛けみたい。
それ以外は特に見当たらないけど……きっと同じのがもう一個上の三階にもあるハズ」
「四階と一階にもう爆弾は無いってコトでいいのか？」
「と、思うよ。爆破の仕方から見て一撃全殺がやりたいみたいだから。
ついでに言うと、解除処理も無理。爆発すれば何でもいいって感じだから触れるだけで爆発すると思う」
「チマチマした攻撃はしてこない、ってコトか」

廊下に出て『あの声』が居無いコトを確認し、他の罠の探索と武装の確認をする。
様々な事態に備えて、準備は常にしてある。
俺はカバンから拳銃を一丁出して腰に差す。後は袖口やポケットに仕込んだナイフの確認。
近接戦は俺の担当だから、いざという時の装備に欠損があってはいけない。
銃の弾薬、ナイフの取り出し、その他諸々。最後にグローブを嵌めて戦闘準備は完了。
刀はとりあえず姫香の方に預けておく。長柄は少し動き辛くなるからな。
「俺の方は終わったぞ、姫香」
「はいほい。私の方もおっけーだよ」
「それじゃ……行くか」
俺達が目指すのは屋上だ。
慎重に階段を昇り、三階の例のピアノ線トラップを回避し、破壊された四階まで辿り着く。
教室のドアというドアが、廊下の窓という窓が吹き飛んでいた。壁も所々ひび割れている。
「じゃ私は外から回るわ。シュウスケ君は正面からお願いねー」
「了解」
俺は普通に階段を昇り屋上へ繋がるドアから出て注意を引き、姫香は校舎の外壁をよじ登って背後から援護。
そういう手筈だ。
「突入する、三分経ったら動けよ」
「おっけー。頑張ってね、シュウスケ君。シュウスケ君のためにも、私のためにも」
「……あぁ」
トラップが無いコトを確認して、俺は屋上への階段を昇る。
そう。任務で失敗するワケにはいかない。

姫香のために。姫香が俺のパートナーである限り。
姫香のために。姫香のために。姫香のために……。

×

この程度のトラップに引っかかる俺ではない。
たかがピアノ線が一本、足元に伸ばしてあるだけだ。
『あの声』は狡猾に用意周到にそれでいて確実に自分の手で、殺しをしたいはずだ。
だから、他のトラップは無いだろう。
二手、三手を用意するのは『あの声』のやりたいコトに反する。
四階。
日常の面影を失った煤けたエリア。
一階はきっと飛び散った人間だったモノがあるだろうから、比較的キレイな方だ。
そこには、カバンを持ったあの人が居た。
「！？」
俺の顔を見て驚かれる。
「何をやってるの？」
あぁ。さっきまでとはまるで別人。それが本当の姿なんだろう。
でも、本当の姿になったのは何も君だけじゃない。
「俺にさ、一つ。武器をくれないか」
見れば彼女のカバンからは何やら長い棒のようなモノが飛び出している。
あぁ。それはきっと俺に力をくれる。
何も出来なかった俺に、力をくれる。
「……まさか」
何かに気付いた。何に気付いた？　俺のまるで違う精神のカタチ

に？
　もしかして君は、この感覚の正体を知っているのか？
「さっきさ、姫香ちゃんが教室を出た後に校庭が爆破されただろう？　それを俺は見てたんだ。
起爆して砂が盛り上がる刹那、直後の赤い赤い爆炎、消し炭の人の形、瓦解するソレらを。
そしたらさ。何だか許せなくなったんだよ。『あの声』が。
居ても立ってもいられなくなってさ。君なら、持ってると思ったんだ、武器を。
一つでいいんだ。出来ればその飛び出してるソレがいいんだけど、俺にくれないか？
だって、武器がないとイマイチ締まらない」
　頭の片隅で思ってる。今の俺は何処かオカシイ。
　でも、そのオカシイのさえ、俺は受け入れる。
　これが俺。このカタチこそが俺。
「……扱い方は解るの？」
「当然。理解してなくても、『解る』。体が求めてるんだ。
俺の手がその柄を握りたくて握りたくて震えてる。
俺の腕がその刃を閃かせたくて閃かせたくて戦慄いてる。
――俺の体がその刀の使い方を知っている」
　だから、早くその刀を俺に寄越せ！
「一つ、確認するわ。君……目標は『あの声』だけなのね？」
「あぁ。そうだ」
　だから、早くその刀を俺に寄越せ！
「いいわ。コトが終わったら私達は君を歓迎する。君の思いの丈を満たせる環境を与えてあげる」
　まさかそんな特典がついて来るとはな。
　だから、早くその刀を俺に寄越せ！
「……一応言っておくけど私を狙えばシュウスケ君が。シュウスケ君を狙えば私が、君を殺すコトになる。

これだけはどんな摂理が曲がろうとも、絶対よ」
「解ったから、解ったから……！」
「ふん。がっつく男は好きじゃないんだけど。いいわ」
カバンから刀を引き抜き、それを俺に投げて寄越す。
手がその柄に吸い付く。手のひらがまるで鞘の延長上のようだ。

「最後に聞いてあげる。
十叶哉治君。
君の解理した衝動は何かしら？」

「正義の味方」

ウズウズする足の歯止めを外して、俺は階段を駆け上った。
涼原……いや神原だっけか。
神原が『あの声』を仕留める前に、俺が場に躍り出てやろう。
出来れば神原がピンチだと尚いいんだが、それだと姫香ちゃんが悲しむだろうから。
多分神原は、平然と一人で勝ち抜く。
だから本当なら、俺の出番は無い。
無いなら作る。それだけだ。

だって、俺は、

打ち倒すべき悪を打ち倒すべく、この刀を抜くのだから。

#15：Ｏ－ｒａｔｏｒｉｏ（オラトリオ）（後書き）

どうも、秋折紀織です。

ここに来て、姫香に言い寄るだけだった凡庸で無個性とも言うべき現代の若者代表な彼が。
衝動解理者に。

衝動は別にその人柄に現れるモノじゃない。
時に衝動のカタチに近い人格を持った人も居るけど、
時に衝動のカタチに影響されない人格を持った人も居る。
その前者が神原秋介で、後者が十叶哉治。
だから十叶の場合、まるで人が変わったかのように映るコトもある。

衝動。理性や感情の上位の感覚。
理性すなわち人格。
感情すなわち性格。
今までの人格も性格も関係ない。衝動に目覚めればその全てが塗り替えられる。
そういう話。

感想等いただけるとびっくりするほどユートピア！
では。

#16：PｅｒＣｒａｆｔ（ペーパークラフト）（前書き）

むむむ。
とりあえず戦ってるだけ。

#16：ＰａｐｅｒＣｒａｆｔ（ペーパークラフト）

誰かのために。彼女のために。
彼女のために。自分ではない誰かのために。
自分ではない誰かのために。姫香のために。

飽くなき赤色。

屋上へのトビラを開く。蒼天の秋空。
そして、コンクリの地面に立つ、『あの声』の主。
「あァん？　だァれ、なァんでココに人が来るのよォ」
おそらく放送室から引っ張ってきているであろうマイク。
旧時代のラジカセやスピーカーか何かと見間違えそうな起爆スイッチと思しきモジュール。
そんなモノと一緒に、その人は屋上に佇んでいた。
「全部の爆弾を解除しろ」
腰から拳銃を抜き、相手に向ける。脅し文句を並べてみる。
「あァ……私、個人戦ってキライなのよねェ。どうせ人を殺すならァ……沢山の人を一遍に一片も残さず殺したいじゃない。
その方が楽しいのになァ、常識的に考えて」
脅しに意味が無いコトは解っていた。
一応の義務みたいなモノだ。それも相手が衝動解理者である以上、しなくても別にいいのだが。
脅し文句とはつまり、相手を殺さずに止めるための最終予防線。
それを越えれば、殺すしかないだろうさ。

「でもォ、君をココで一人で殺してあげないとォ。私のこれ以上の楽しみを妨害しそうだからァ、殺さないとねェ。涼原秋介君ッ」
相手のブレザーが翻る。その手には紙が巻かれた筒状のモノ。
それが、何かは。考えるまでもないだろう。
「前時代的だと笑いたければ笑えばいいわ。でもいつの時代だって、結局人は脆くて壊れやすくて死にやすいモノなのよォ！」
鮮やかな手つきでその筒状の先端。より糸。つまり導火線に火がつけられる。
「威力抑え目、投げる距離の分だけでこっちに被害はナシ。そういう造りよ！」
煙を上げながら、短くなっていく導火線。
筒が投げられる。弧を描き、秋空を飛び跳ね、ソレは空中で爆発した。

その一撃を皮切りに、神原秋介と声の主――月山花樹との殺し合いが始まる。

「あッはァ！　どうかな？　死んだかなァ？　でも死んでないよね。見えたもの。直前で避けたもんね。君は！」
威力が抑え目だというのなら、こちらは走って飛びのいて距離をとればいい。
それで何とか直撃は免れる。
「――」
ダイナマイトは月山の制服に仕込まれている。
ポケットやら、裏側やら。その数は計り知れない。
「あァ。そういえばアナタ、今拳銃持ってたね。じゃあこッちを先

に投げておくかァ」
新たに懐から取り出されるダイナマイト。ご丁寧に色違いの紙が巻かれている。
俊敏な動作で導火線に火を点ける。
指先のリングをすばやく擦り合わせるコトで火をつけているようだった。
「せーのッ」
空き缶でも投げ捨てるようにダイナマイトを投げてくる。
しかしそれは俺を狙ったというには、少し着弾点がズれているような……。
今度のは一度地面に落ちた後、轟音と共に爆発した。
舞い上がる白煙に混じり小さな金色の粒がキラキラ光る何かが見える。
「ふッふーん。これでもう拳銃は使えないねェ。とりあえず私は狙撃されて自爆なんてコトはなくなッたワケだ。よかッた、よかッたァ」
チャフ？　確かに右手の拳銃は轢鉄を引けなくなっていた。
駆動部に細かい粒子が入りこんで物理的に動かない。
「それなら、叩ッ斬るまでだ」
使い物にならなくなった拳銃を地面に転がし、袖口からナイフを取り出す。
右手に一本を握りしめ、左手に一本を軽く持つ。
「シッ！」
左手のスナップでナイフを投擲する。
空を裂くナイフは、ヤツの回避行動により服を軽く裂くだけだった。
だが、それは足止めに過ぎない。
ナイフの後を追うように、俺は距離を一気に詰める。
滑る銀色。閃く銀色。
「あァ！　もう！　邪魔しないでよォッ！！」

腹部に切り傷を負わせたが、致命傷には至らない。
「もう！！　知らないんだからッ！！」
モジュールに手を伸ばす。
パチン、と。スイッチがオフからオンへ。たったそれだけの指先の動きで。
轟音と共に、三階に存命していた命が全て消え去った。
「あははは、君が邪魔するから今度は三階が死んじゃッた！　精々、罪悪感でも感じてなさいよねッ！」
「生憎、俺は正義の味方じゃないんでね。誰が死のうが関係ない。お前が死ねばそれでいい」
左の袖口からもう三本、ナイフを取り出しそれを投げつける。
三本のうち一本は月山の回避行動を操作するためのモノ。
本命は回避した後の、両足を狙う二本のナイフ。
制服のスカート越しナイフが突き刺さる。その痛みに呻きながら地面に倒れこむ月山。
「三階を爆破、なんて俺が歯牙にもかけない行動をしなければもう少しだけ長生きできたのにな……」
すぐ傍まで近寄り右手に力をこめる。相手は未だ痛みに慣れず地面に這い蹲っている。
そこに、心臓に、このナイフを叩き落とす！

「待てぃ！」

背後から声。屋上と校舎を繋ぐ扉。そこからの声。
しかしそれは姫香のモノではない。姫香でありえるハズがない。
俺と姫香以外がこの屋上に入り込むなんて、なぜ？
「チャンス！」
足元のヤツがダイナマイトに一本、火をつける。
「クソッ！」
相打ち狙いの爆発。それを俺は間一髪で飛び退き避ける。

しかしヤツは逃げ切れるハズもなく、片腕が一つ、吹き飛んでいた。
ちぎれた断面は爆炎によって焼かれ、出血は殆ど無い。
「ってか、誰だよ。トドメを邪魔したのは！」
振り返ると、そこには。
十叶哉治が立っていた。
「ハァ？」
思わず呆けた声が出る。およそ俺らしくない声だ。自分で思う。
その手には、先ほど姫香に預けたハズの居合い刀が握られていた。
「へぇ、まぁ最初から気付いてたけどやっぱり月山先輩でしたか。この事件の犯人」
月山花樹に向かって、暗い笑みを浮かべる十叶。
「誰だろうと関係ない。俺は俺が打ち倒すための悪が居ればそれでいい！！」
ダダッ！　と一直線に走ってくる十叶。
その矛先は、片腕を失い両足を血に濡らしながら立ち上がったばかりの月山花樹。
「ァ――――」
抜刀――――斬撃――――残心――――。
たったそれだけのシークェンス。
言葉にすればその二つだったが、それは明らかに一つのキレイな流れで。
本当に刹那一瞬の出来事だった。
ずるり、と。腹部からややナナメに両断され崩折れていく月山花樹。

血が溢れる。ジャムパンを踏んだみたいに、水風船を割ったみたいに。
赤い赤い血が粛々と血溜まりを広げていく。
ヒゥンと刀の血と油を振り払い、鞘に納める十叶。
「十叶――――お前は――――？」
「十叶哉治は、衝動解理者になったわ。衝動の名は『正義の味方』。私は始めて聞く衝動だけど、とりあえず月山花樹を悪と定め制裁を加えればそれでいいみたい。
とりあえず、冴城先生には話をつけたから、鞘朽で引き取るわ」
「そうか、ならいい……。――――姫香。俺は、お前の役に立てたか？」
「あったりまえだよ、シュウスケ君！　ていうかむしろ私の方が何にもしてない感じだったし！　ごめんね、シュウスケ君ケガとか無い？」
「あ、あぁ。俺は平気だ」
「よし！　それじゃ帰りましょうか。鞘朽に」

月山花樹。解理した衝動『殺戮』。
神原秋介と戦闘中、十叶哉治の乱入によって死亡。
駆除完了。

十叶哉治。解理した衝動『正義の味方』。
月山花樹が起こした爆発により偶発的に解理。
鞘朽にて構成員とする。

神原秋介、涼代姫香。
両名、任務を完遂し、鞘朽ＡＬ－８支部へと帰還。

一般被害。
土見台高校。生徒６００名、教職員４０名死亡。
救急隊員、警官、消防隊員。計１６名死亡。

以上。
責任者冴城恭子へ本報告書を送付す。

#16：ＰａｐｅｒＣｒａｆｔ（ペーパークラフト）（後書き）

どうも、秋折紀織です。

何だか何も説明がないまま戦闘突入して、
何も説明がないまま戦闘が終わって、
何も説明がないまま無理矢理締めようとして……。

次回あたりきっと説明が入るのでしょう。
……多分。
とりあえず重要なのは、
月山花樹が衝動解理して事件を起こしたってのと、
それがきっかけで十叶哉治も衝動解理したってコト。
その二つが解ってればいいんじゃね？　みたいな。

感想等いただけると嬉しくてびっくりするほどユートピア！
では。

#17：Q＝&A（なぜなにナデシコ）（前書き）

説明ばっかでごめんなさい。

#17：Q＝&A（なぜなにナデシコ）

全ての事柄に事後処理を。

飽くなき赤色。

鞘朽に戻ってきた。帰ってきたというべきか……？
普通の世界に居場所の無い俺達死人は、鞘朽を家だと思うべきなのか……？
「はぁい、ご苦労様。休憩は後にして、先に授業といきましょうか」
迎えのヘリから降りると、既に冴城が待っていて有無を言わさず連れて行かれた。
俺達―――三人を。

「それじゃ、冴城先生のなぜなに質問コーナーよ。
それじゃあ、最初は神原君。はい、何か質問は？」
「何でそんなにキャラが壊れてんだ？」
「ウッ……。な、何となくよ。何となく。
常に気を張ってたんじゃ、疲れてしょうがないでしょ？　一種の清涼剤よ」
なんか冴城も色々と溜まってるんだろうなぁ……。疲れとか。
「まぁいいわ。とりあえず初任務ご苦労様。
被害は割りと大きかった気もするけど、この前の大朽羽の大火災に比べたら全然マシね。
たかが高校一つ、三分の一の生徒が死んだ程度じゃお偉いさんも電

話してこないし。
ちなみに表向きは、ガス管の爆発とかそういう感じになってるわ。
まさか生徒の一人が爆弾テロなんていうわけにもいかないでしょう？」
「確かにそうですね」
姫香が頷く。
「そうね。それで、彼女が解理した衝動は多分、『殺戮』ね。
一週間前の灯油倉庫の爆発事故と、一昨日にウチがヘマした大朽羽の大火災。
それが重なって、解理のキッカケになったんでしょう。
何がキッカケでどんな衝動が解理するかは、例え本人でも解らないからね……。
そこの、君みたいに」
冴城の視線が、憮然とした表情で突っ立っている十叶に向けられる。
「自己紹介が未だだったわね。
私は冴城恭子。ここの支部での医療とその他運営の総責任者よ。
そしてここは私達、社会的な死人が歯車を回す『鞘朽』という組織」
「……俺は、十叶哉治」
「えぇ。君のコトは連絡を受けているわ。
月山花樹の起こした殺戮劇がキッカケで、衝動解理したそうね。
……、衝動は君のしたいコト。解理はそれに気付くコト。
教えてくれる？　君が一番、したいコト」
「悪を倒す。それが出来ればそれでいい」
「ふぅん……。おーけー、それじゃ私達鞘朽が君に倒すべき悪を用意してあげましょう。
それを任務というカタチで君に提供するわ。
その代わり、君は一生を鞘朽で過ごすコトになる。もう、昨日までの日常には戻れない。
それでもいい？」

「構わない」
「そ。じゃ、先に色々な検査やら手続きやらしといてくれる？」
冴城が備え付けの電話を鳴らし、すぐに来た看護師につれられて十叶は部屋を出て行った。
「完全に予想外だった。まさか、推定衝動解理者の月山花樹以外に十叶が解理するなんて」
「そんなモノよ。衝動なんて何がキッカケで解理するかわからない。それにちゃんと十叶哉治を保護回収したのだから、君達に落ち度は無い。
それでいいじゃない」
「そんなモンですか……」
「確かに人は自分の衝動に気付かない方がいい。
気付かなければ普通の日々を普通の幸せと不幸せを感じながら生きていける。
それでも、全ての人間が平等に衝動という爆弾を抱えている以上、それに気付くのもまたその人の人生なのよ。
でもそれじゃ普通に生きていけないから、鞘朽が保護してるってワケ。
まぁ鞘朽には私や涼代姫香のように解理してないモノも多く居るけど」
「っていうか、衝動解理者って割合珍しいんだよ？
鞘朽に居る人員の５％ぐらいじゃないのかなぁ、解理してる人は。
それに衝動によっては保護しても人員として扱えない人とかもいるしね。
だから、解理した状態で運ばれてきて更にマトモに働けるっていうシュウスケ君は有名人扱いだったんだから」
「あぁ、そういえば最初に会った時、そんなコト言ってたな……」
「まぁでも、神原秋介の知名度もこれまでね。
明日からは十叶哉治が君の後釜として、有名人になるわけだ」
「そっか。俺と殆ど同じ状況なのか。あいつは」

解理した状態で鞘朽に来て、普通に任務をこなすコトが出来る人間。
「十叶哉治は、例のガス管爆発に巻き込まれて死んだってコトにする。
大丈夫。任せて、情報操作は得意だから」
さようですか……。
「それじゃもう部屋に戻っていいわ。色々と疲れたでしょうし、しばらくは任務も無いしね。
この調子で任務を達成していけば、色々と融通も利くようになるわ。
神原秋介はあまり立場とか気にしなさそうだけど、持ってるだけで役に立つのだから、精々頑張りなさい」
「はぁ……。それじゃ、失礼します」
「失礼しまっす」
俺と姫香が部屋を出る。
「今回はお疲れ様、シュウスケ君」
「姫香もな。……少し、楽しかったよ」
「え、今、最後なんて言ったの？」
「なんでもないっ！　じゃあな！」
恥ずかしがってるのが自分でも解る。
楽しかった、なんて……いつ以来の感覚だろう。
そして俺は、足早に自分の部屋へと戻るのだった。

#17：Q＝&A（なぜなにナデシコ）（後書き）

どうも、秋折紀織です。

月山花樹の解理した原因とか、前回あたりで入れた方がよかったのかなぁと少し反省。

でも、まぁいっか。

感想等いただけると嬉しくてびっくりするほどユートピア！

では。

#18：Ｒ－ｅａｄｙ？（レディ？）（前書き）

十叶の扱いが難しすぎる……。

#18：Ｒ－ｅａｄｙ？（レディ？）

鞘朽には幾つかの建物がある。
一つは、私室棟。俺が最初病棟だと思っていた建物で構成員の部屋がある棟。
一つは、修練棟。主に若くして鞘朽に拾われた人間が戦闘要員として訓練する棟。
一つは、指令棟。責任者やお偉いさんが仕事したり住んだりしている棟。
他にも未だ建物はあるが、俺は足を踏み入れたことは無い。
用が無いからな。

飽くなき赤色。

そして俺は今、私室棟の一階、食堂に居る。
時間は昼時だが人によって空き時間が違うので席は疎らに埋まっている程度。
当然だが、ココには俺のような若い人間だけでなく、幅広い年の人間が集まっている。
……基本的に戦闘要員は体力的な問題や覚えの良さから、若い人間が選ばれる。
鞘朽には様々な年齢の人間が居て、割と偏り無く人が集まっている。
十台から二十台の人間は、戦闘要員に。
そこから後ろは、事務員や雑用務や農作業など等……年相応の仕

事が割り振られる。
とはいえ鞘朽が人知れず死に掛けている人間を拾ってくる以上、助けても寿命などで死なれては意味が無いので、そんなに高齢者は居無い。
居ても、若い時から鞘朽に居てそのまま年を取った……という感じだろう。
「シュウスケ君、午後の訓練は私と一緒だから覚えておいてねー」
「姫香こそ、遅刻するなよ」
で、隣には姫香。
俺と姫香はパートナーを組んでいるコトもあって、一日の時間構成が殆ど同じだ。
なので、こうして昼飯を食べるのも時間が合うので一緒にしている。
まぁ、同席を断る理由も無いし。
「イチャイチャするなら自分たちの部屋でやったらどうっすか。お二人さん」
「う……」
前の席に座っている十叶が冷ややかな視線を向けてくる。
「ッ……十叶。お前、姫香のコト好きだったみたいだけどもういいのか？
朝早くから家の前を張って姫香の通学路を調べるぐらいだったのに」
「昔の話を持ち出す男は嫌われますぜ、神原？　今はもう別にどうでもいいし」
ニヤリと不敵な笑みを見せる十叶。本当に、人が変わったかのようだ。
土見台高校での十叶哉治とは全くの別人。これが衝動解理、か。
「二人とも、ケンカとかしないでよー。十叶君も、午後は私達と同じ訓練だからね」
「了解しました」
……姫香の言葉にはやけに素直だ。やっぱり、未だ気持ちは

残ってるのか？
「ほらほら、シュウスケ君も。早く食べないと時間無くなっちゃうからね？」
「はいはい……」
「はいは一回！」
「はい……」
何だコレ。

××

目標に肉薄する。右手に握ったナイフの感触を確かめながら接敵。
左右に障害が無いコトは確認済み。敵の迎撃も問題なくかわせている。
最短の動きで、目標にナイフを突き立てる。
同時に、シークェンス終了のアラームが鳴る。
「……ふぅ」
装備を収めながら待機スペースへと戻る。
そこにはベンチに座る姫香と十叶。
「お疲れ様、シュウスケ君。はいタオル」
「あぁ。とりあえずこんなもんか」
今の訓練は、障害を越えながらの目標破壊。
修練棟の中には、幾つもの設備があり、ここもそのうちの一つ。
今のデータを纏めて印字したものがプリントされ、それに目を通す。
「じゃあ次は十叶君ね。準備はいい？」
「いつでも構いませんとも」

スタート位置に立つ十叶。ヤツの左手には居合い刀。右手はいつでも抜けるように柄に添えられている。
成り行きで居合い刀が最初に使った武器になった十叶だが、アレが一番馴染むようだ。
刀は持ち運びに不便だから潜入任務には向かないが、馴染むのであればそれでいい。
あいつに合った任務を冴城が選ぶだけだしな。
そしてシークェンス開始のアラームが鳴る。音と同時に駆け出す十叶。
伏兵を想定したダミーが障害の影から現れゴム弾を撃ちだす。
それを掻い潜り足を止めること無く、流れ作業のように斬り伏せていく十叶。
あっという間に目標へと辿り着き、真っ二つ。
終了のアラームが鳴る。……速かった。俺よりも確実に数秒速い。
十叶が涼しい顔でこちらに戻ってくる。
「はいお疲れ様、十叶君。タオル要る？」
「一応貰っておきます」
姫香からタオルを受け取る十叶。が、その顔には汗一つ浮かんでいない。
俺だって……まぁそんなにかいたワケではないが。
「ふむふむ。十叶君、タイムは速いけど雑魚の撃ち漏らしと障害確認・排除の粗が目立つね。
でもまぁ被弾ゼロだし、突撃した方が十叶君のタイプにはあってるかもね。はいこれ」
姫香がデータを読みつつ、十叶にプリントされた紙を渡す。
「私は銃撃支援の遠距離。シュウスケ君はナイフと拳銃に加えて状況把握の中距離。十叶君が突撃必殺の近距離。
私達は割りとバランス取れてるチームかもね」
「もしチームを組むコトがあれば、だけどな」
「十叶君にパートナーをつけるかは、冴城先生の一存だからねー。

どうなるか解んないけどさ。
とりあえず、今日の訓練はこれでおしまいっ。それじゃ帰ろっか」
修練棟から引き上げる。
外に出て見える景色は、山と海だけ。
「十叶君、鞘朽にはもう慣れた？」
「特に問題は無いかな。不便は無いし、文句も無い。ここは生きやすい場所だし」
「うん、なら良かった。私も随分長いコト鞘朽に居るけど、何だかんだでココが好きなんだ」
「姫香ちゃんは、何時から鞘朽に？」
「私は……あんまり覚えてないんだけど多分八歳か九歳ぐらいからかなぁ。
凄く痛くて苦しくて、気付いたら鞘朽に居たの。
その時はもう全然痛みも苦しみも無くて、ここに居たら何にも痛くないんだーって思った。
……だから、割と感謝してるの。鞘朽には」
「そっか……」

空が茜色に染まっている。
この空が俺の目を通して赤色に見えるのは、もう少し……先。
何処かに忘れてきた。
■■を。
思い出すまでは。

#18：Ｒ－ｅａｄｙ？（レディ？）（後書き）

どうも、秋折紀織です。

カッコイイのを目指すと皆同じキャラになってしまいがちです。
ぶっちゃけると秋介と十叶のキャラ区別が上手くいきません。
解理する前と同じノリでいくべきか……どうか……。
むむむ。
しばらく迷走しそうです。

感想等いただけると嬉しくてびっくりするほどユートピア！
では。

#19：S－rankERROR（S級エラー）（前書き）

のんびりとした休日に。
お約束を一つ。

#19：S－rankERROR（S級エラー）

■■。■■。■■。■■。■■。■■。■■。■■。■■。■■。■■。■■。■■。■■。■■。■■！■■！■■！■■！■■！■■！■■！■■！■■！■■！■■！■■！■■！■■！■■！■■？

飽くなき赤色。

今日は、何の訓練も無い。休みの日。とはいっても、鞘朽には娯楽は殆ど無い。

精々、食堂で好きなモノを選んでみたりする程度。

或いは誰かとお喋りでもしていればいい。

勤勉なヤツは、修練棟の自由訓練室でも使っているコトだろう。

さて……俺はどうしようかな。

このまま部屋のベッドでゴロゴロしててもいいんだが……。

「シュースッケ君ッ！」

ノックも無しに開けられる部屋のドア。

そんな無作法を働くのは、姫香しかいない。

「ノックをしろ！」
「えーめんどくさいー」
ったく……。
「そういえば、姫香も今日は休みか」
「うんそーなの。でさ、シュウスケ君、一緒に遊ばない？」
「遊ぶ……って、何するんだ？」
「そりゃもちろん、男とぉ女が揃えばぁ、やるコトは一つッ！」
「久々に盛ってんじゃねぇ！」
手近にあった枕を投げつける。
ばふっと姫香の顔面にクリーンヒットする。痛くは無いだろうが何となく罪悪感。
「お前……避けるぐらいしろよ。大丈夫か？」
「ハァハァ。シュウスケ君の匂いがするぅ。私もう……お腹いっぱい……」
「変態は消えろぉ！」
ダッシュで枕を奪い返す。
「うふふ。シュウスケ君、そんなカッコでそんなに動いてると……ほらほらぁ、胸元が早速肌蹴てるじゃない」
姫香の目がキラリと光る。
俺の格好は、寝巻きの浴衣を着たままだ。
「あはは。シュウスケ君の生足がこう裾からチラッと見えるのも堪らないわぁ。うふふふふ。
そのままお姉さんに脱がさせて……あはは、いっただきまーす！！」
「うわあああああああ！！」
猛進してくる姫香の勢いを止められず、ベッドに押し倒される俺。
やばい。やばい。やばい。やばい。やばい。やばい。やばい！
見れば丁度廊下を十叶が通りすがる所だった。
「十叶！　頼む、助けてくれ！」
「……死ね」

「なッ！？」
絶対零度の視線で睨まれて、スタスタと十叶は消えていった。
やばい。やばい。やばい。やばい。やばい。やばい！
「なーんてね。そろそろ止めないとシュウスケ君怒っちゃうからオシマイッ」
獣の目だった姫香が元に戻り、ベッドから降りる。
「今回はちょっとやばかったりした？」
ニヤニヤと嫌らしい笑みを綻ばす姫香。この悪女めっ。
「別にッ。で、今日はどうするんだ結局」
「んー……別にやる事ないもんねー。お昼までボーッとしてるよ。お昼ご飯は一緒に食べようね」
「まぁそれぐらいなら別にいいけど」
じゃーねー、と姫香は自分の部屋に戻っていった。
単にからかいに来ただけか……、まったく人騒がせな。でも、姫香の騒がしさにももう慣れた。
相変わらず、すっ飛んでる感じはするが、今みたいに自制するようになってきたし。
俺の主義に合わせてくれているのか……。

×××

昼が近くなったので浴衣から普通の服に着替える。
姫香と昼飯食べる約束してたしな。たまにはこっちから迎えに行ってやるか。
姫香の部屋がある五階に昇る。相変わらず、人を見かけない私室棟の廊下。
「ここか」
確か、姫香の部屋に来るのは初めて……だっけ？

朝の仕返しにこっちもノックをせずに部屋に突撃すべきか……？
いやでも相手は一応、女の子だぞ……。
それに俺が姫香みたいな馬鹿をするわけにもいくまい。

なんてな。

「姫香ッ、飯行くぞ！」
半ば途中で考えを放棄して、俺はノックもせずに部屋のドアを開けた。
「え？」
「あ」

×××

「……今日は何か一段と上手い気がするな」
「……そーなの」
私室棟一階。食堂。固定メニューと日替わりメニューがある。
味は抜群で、鞘朽で仕事をしている限りは無料だから値段の概念は無い。
「……姫香、よかったらコレ食うか？」
「……じゃあ私のと交換ね」
もぐもぐ。
もぐもぐ。
「……あ、お茶汲んでくる。姫香もお茶でいいか？」
「……うん」
……。

……。
「何やってんの、神原？」
「へ？　あ、十叶か」
お茶を汲みにカウンターの所へ行くと、十叶が居た。
「あのさ、さっきから見てたんだけど。何かお前ら変じゃね？」
「べ、別に。何でもない」
「あっそ……」

無駄に引っ張っても、既に皆様、予測がついてらっしゃるでしょうから……。
短刀直入に言うと、まぁご想像の通り……姫香の着替えシーンを見てしまったワケですよ。
何か俺キャラ壊れる程、動揺しまくりなんだけど……どうしよ。

「……お茶お待たせ」
「……ありがと」

流石の姫香も、落ち込んでるし……。
ホント、悪いコトしたな……俺。
一応、その場で謝ったけど、だからなんだって感じだよなぁ……。

×××

「あ～、かんばらしゅうすけじゃにゃいー」
気まずい雰囲気のまま、外を歩いていたら冴城が指令棟の方から出てきた。
しかし冴城の雰囲気がおかしい。何だ？
「いいわね～ふたりはらびゅらびゅでー、あはひゃ」

「もしかして、酔ってます？」
「なにょーわひゃしは酔ってましぇんー。酔ってるのは上司のほうなにょよー＾ー＾」
駄目だ。完全に壊れてる。
こんなんで出歩いてたら、冴城の責任者としてのイメージが暴落だぞ。
「……酔ってる時の冴城先生、ちょっと怖いね」
「そーだな……」
隣の姫香が小さな声で俺に言う。
が、運悪く冴城に聞かれてしまったらしい。
「あによ！　聞こえてりゅわよ、すずしろひめかッ。もーいーわ。ちょっとあんたは向こういってなしゃい！　帰ってこなくていいからッ！」
「おい、冴城ッ！」
「うっさいわね。かんばらしゅーすけは黙ってなさいぇ！
ほら、上司の言うことがきけにゃいの！　すずしろひめか！
どーせあんたは永遠にかんばらしゅーすけに抱いてもらえにゃいんだから無駄などりょくよ！」
「ッ……失礼します」
姫香は顔を俯かせながら、小走りで私室棟へ消えていった。
俺はその姫香の姿がとても弱々しく見えて。
……怒りがこみ上げてくる。
「冴城！！　あんた、酒に酔ってるからって姫香にふざけたコトばっか言ってんじゃねぇよ！」
「なによー、うっさいわね。怒鳴んないでよー。
延々と上のやつらがわたしにぐちぐちぐちぐちぐちぐち言ってくるんだから、酒ぐらいのまないとやってりゃんないわよ！
だいたい、ほんとのコトでしょー。
かんばらしゅうすけは、すずしろひめかを抱けるの？　抱けないでしょーが！

ほーらみなさい。わたしは間違ってないわー！」
「ッ。だから何でそういう話になるんだよ。俺が姫香のコトをどうしようが関係ないだろ！」
「そーよねー。あんたは中途半端な解理者だもんねー。
解理してるくせに自分の衝動がイマイチわかってないもんえー」

は？
それは、そういう。コトだ。

「何を言ってるんだ？　俺の衝動は『姫香』だろ。それ以外の何モノでもない！」
「それがそもそもの間違いにゃのよねぇー。
覚えてないのぉ？　そりゃ覚えてないわよねー。
だって、その様子だと、高校に入ったのに、あの時と同じ状況なのに、おもいださないんだもんねー。
それだけ、頑丈に記憶を封じてればあんな些細な会話を覚えてるわけないかー」

だから、冴城は。何を言ってる？
俺の、何が。間違ってると？
酔っ払いの戯言じゃ……ない？

「思い出しなさいよぉー。あんたが鞘朽に来て最初に私が聞いてあげたじゃない。
『君のぉ、衝動はなぁに？』って。

あんたなんて答えたのよー。言ってみなしゃい！」
「……だから、『姫香』だろ」

ピキリと。
些細な違和感。
気付いてはいけない、ひび割れ。

「おかしいわねぇ。あんたは衝動解理者として鞘朽に運ばれてきたのよー？
なのに、何で何年も前から鞘朽に居たすずしろ姫香を衝動のカタチに出来るのぉ？
ありえにゃいわ。衝動は所詮、自分の頭の中だけで形成されるモノよ。
知らない人間をどうやって衝動にするコトができりゅ？」

時間軸が合わない。
姫香に出会う前に俺は解理していた。
俺の解理した衝動は『姫香』。
あれ？　あれ？　あれ？

「教えてあげりゅ。あんたが最初に解理した衝動は『若菜』よ。
どう？　思い出した？」

■■？　■■？　■■？　■■？　■■？　■■？　■■？
■菜？　若■？　■■？　■■？　■■？　■■？　若菜？

若菜って誰だ？
若菜って誰だ？
若菜っ『俺の友達だ』て誰だ？

あ。

思い出した。

若菜って。

俺の友達じゃないか。

高校では俺の一つ後ろの席で。

灰津に殺されたんじゃないか。

俺は、『若菜』のために灰津を殺して。

俺は、その時、灰津に殺されかけて。

それで、鞘朽に拾われた……。

じゃあ、俺の衝動は『若『姫香』菜』

あれ？　あれ？　あれ？

どうなってるんだ？

「ああああぁぁああああぁあああぁあああぁあああああああぁああ
あああぁぁあああああ！！」

青い真昼の空が真っ赤な夜空に染まった。

#19：S－rankERROR（S級エラー）（後書き）

どうも、秋折紀織です。

最後の改行しまくりがウザいかもしれません。ごめんなさい。
改行したい年頃なの。

秋介の衝動が『若菜』から『姫香』に摩り替わったのは、#07：G－abyから。
伏線のつもりで張ってたけど、ようやくカタチに出来た。
よかった、よかった。
まぁ、伏線になってたのかは物凄く微妙ですが。

『待受の片思い』という短編を載せました。
こっちとは違って、ヤマもオチもイミも無い純愛ラブコメっぽいのですが、
読んで頂ければ幸いです。という宣伝。

感想等いただけると嬉しいです。
では。

#20：Ｔｈｅ Ｐｏｉｎｔ Ｏｆ Ｎｏ Ｒｅｔｕｒｎ（帰還不能限界点）

ザ　ポイント　オブ　ノー　リターン。

#20：Ｔ－he Ｐｏｉｎｔ Ｏｆ Ｎｏ Ｒｅｔｕｒｎ（帰還不能限界点）

あ。

飽くなき赤色。

「……穴があったら入りたいわ。ホント。総責任者にあるまじき失態ね……くそッ。

捕捉は出来た！？」

「目標は侵入者排除トラップ地帯を完全に抜けました。物凄い速度で山を下っていきます」

「……ッ、流石、解理者……ね」

全部私の責任。酒に酔っていたからなんて言い訳にもならない。

気付かなければそれで彼はそのままやっていけたのに。

気付かなければそれで彼は生きていけたのに。

彼の衝動は『若菜』でもなければ『姫香』でもないというコトに。

気付かなければよかったのに。

×××

「……姫香ちゃん？」

「あ、十叶君……」
私室棟の玄関口で十叶君にぶつかってしまった。私が前を見ないで走ってたせいだ……。
「泣いてんのか？」
「……そうじゃないけど。……ちょっとだけ。じゃあね」
今は一人になりたい。
辛いコト、悲しいコト。大概はもう慣れっこだけど、それでも泣きたい時はある。
死ぬはずだった人間が泣くなんて贅沢かもしれないけど……。
十叶君の横を通り過ぎて、早く五階へ行こうとして。

声が聞こえた。

「何だ？」
その声はもちろん、十叶君の耳にも入っていた。
「この声……シュウスケ君？」
その声は私のよく聞き知った声だけど異質な声。
痛くて、辛くて、苦しくて、胸と喉が一遍に張り裂けそうな悲鳴に近い慟哭。
思わず踵を返して、外に出る。
その目の前に何か黒い影が――――。
「え――――ぁ」
黒い影から伸びる腕。その腕は私の体を引っ掴み、それでもなお速度を落とさず山の中へと入っていく。
私が覚えていたのはそこまで。何故か私は、そこで意識を失った。
――――多分、あまりにも見違えた彼の顔を見てしまったから。
黒い影……シュウスケ君の顔を。

×××

赤い。
赤色はもう飽きたっていうのに。
赤い。

×××

痛みに目を覚ました。
右腕に何か言い知れぬ違和感がある。それが痛みだと気付くのに数秒を要した。
私の右腕に、ナイフが一本突き刺さっていた。そして、私の目の前にシュウスケ君が居た。
人気の無い何処かの河原。そこに私は転がされ、馬乗りの形でシュウスケ君がナイフを握っている。
その目は正気を失っていて。何をしているのか理解しているのかも怪しいぐらい。
何て言葉を掛ければ伝わるのだろう？　今のシュウスケ君に私の言葉が届くのだろうか？
それに――――シュウスケ君は、何がしたいの？
私を攫い、私を殺そうとしている。それにどんな意味があるの？
殺したいなら、攫わずにスグ殺せばいいのに……。
「シュウスケ君」
まず、名前を呼んでみた。
「……」
シュウスケ君の視線は私に向いている……。向いているだけで捉

えていない。
私を私と認識していない。出来ていない。
「シュウスケ君」
もう一度。名前を呼ぶ。
「シュウスケ君」

『うルサい」

私の左腕にナイフが突き立てられる。
「ッ……！」
痛みに呻こうとする喉を必死に抑える。
「……シュウ、スケ君」
今はシュウスケ君の名を呼ぶためだけに喉を震わせるべきだ。

×××

視界が意味を無くした。
全てが赤色に見える。何もかもが真っ赤に塗りたくられている。
モノは輪郭を失い、何があるのかも赤色が邪魔で見えない。
俺は何をしているんだろう。赤いから何にも見えない。
俺は……俺は……。

見えなくても、声は聞こえた。

×××

左腕にナイフを突き刺したので、シュウスケ君は新しいナイフを取り出した。
今度は何処に刺すの？　私に抵抗する術は無い。
ナイフは私のシャツの襟元に引っ掛けられ、お腹の方向に向けて刃が滑る。
痛みは無い。斬られたのは着ていた服だけ。
私の胸が曝け出される。別にこんな時に恥じらいは感じない。
それにきっと……確実に心臓を狙うために服を破いたんだ。
ここに来て、シュウスケ君が涼代姫香を犯そうとする何て……ありえるのだろうか？
そしてナイフが私の胸に向けられる。チクリとした痛み。
先端が少し触れた程度。このままジワリジワリと刃を沈めていくつもり？
耐えられるだろうか。死ぬまでの幾数秒、私は悲鳴を上げずに彼の名を呼び続け、そして死ねるだろうか？
出来る。最後の最後で私が泣き喚いてたら、シュウスケ君はきっと――――壊れたままになる。
「シュウスケ君。覚悟、出来たから。いいよ」
そのまま突き立てて。シュウスケ君が壊れないように。シュウスケ君が壊れないように。
私は最後まで悲鳴を上げない。シュウスケ君を恨まない。
それでいいから。

声。

「……姫香――――？」

声がした。

胸に突き刺さるハズのナイフはそれ以上私に潜り込むコト無く、カランと音をたてて落ちた。

「シュウスケ君、おかえり」

いつもの彼がそこに居た。

#20：Ｔｈｅ Ｐｏｉｎｔ Ｏｆ Ｎｏ Ｒｅｔｕｒｎ（帰還不能限界点）

どうも、秋折紀織です。

この小説がＲ－１８だったら、多分エロシーンが入ります。
ほら、溜まったモノを出せば収まるって言うし。

下トークでごめんなさいｏｒｚ
俺自重しろｗ

鞘朽の周辺には、侵入者撃退用のトラップが無数にあります。
ぶっちゃけ、見敵必殺の殺傷効果抜群のやつが。
まぁ暴走してる秋介にゃ無意味でしたが。
ちなみにこのトラップは脱走者の排除も兼ねてるので内側から来た人間も排除排除排除ォ！

秋介と姫香は将来的にはくっつけたい二人なんですが……ねぇ。
姫香のモノローグ。
始めは『彼』とか『あなた』とか言ってたんだけど、必死で名前を呼ばせたかったので、全部『シュウスケ君』に入れ替え。
冗長になったけど、まぁいいや。

感想等いただけると嬉しくて嬉しくて嬉しくて。
では。

#21：Ｕ－ｌｔｉｍａｔｅ（最終状況）（前書き）

それから。

#21：U－ltimate（最終状況）

声が聞こえたんだ。姫香が俺を呼ぶ声。
いつもと変わらない姫香の声。
俺の名を。その細い唇で紡ぐ俺の名を。
だからきっと戻ってこれた。
世界に赤色以外の色が満ち溢れた。
「シュウスケ君、おかえり」
あぁ、ただいま。姫香。
「……ありがとう」
「えへへ」
紛れもない姫香の笑顔だ。

×××

正気を取り戻した俺は、先ず姫香の手当てを優先した。
両腕に楔のように突き刺したナイフ。これを俺がやったのかと思うとゾッとする。
いや、違う。俺がやったコトだ。俺がこの手で。
「姫香、俺の上着貸すから今着てるのを脱いで……自分で出来そうか？」
「んー。ちょっと無理、かな。シュウスケ君が脱がしてくれていーよ」
「いいのか？」
「まぁ他ならぬシュウスケ君が脱がしたいというのなら、私もやぶさかではないのだよ」
「だ、誰も脱がしたいなんていってないだろッ」

「はいはい～」
「はいは一回だ」
「はーい」
っていうか、何で姫香の服は胸の所が裂けてるんだ？
あれも俺がやったの……だろう。
まさか、俺は姫香を……。
「あのーシュウスケ君？　あんまり見つめられると流石に恥ずかしいんだけど」
「え、あ。ごめん！」
顔を明後日の方向に向けて、手探りで姫香の服を脱がす。
「あん、シュウスケ君ったらドサマギ～」
「不可抗力だッ、不可抗力！　別に狙ってない！」
何となく姫香の体温を指先に感じながら、何とか服を脱がすのに成功。
自分の上着も脱いで、今度はそれを姫香に着せようとする。
「シュウスケ君、先に腕縛った方がいいんじゃない？　シュウスケ君の服が血で汚れちゃうよ？」
「でもそれだと」
「背中側にシュウスケ君が立って包帯巻いてくれればいーよ。私は気にしないし」
「……解った」
ひとまず、自分の上着を地面に置いて姫香の破れた服を更に破いて手頃な包帯にする。
「ちょっと腕伸ばしてくれ」
「はーい」
姫香の白い肩、うなじにかかる長い黒髪。
背中とはいえ女の子の裸に代わりはない。なんとも思わない方が……。
さらり、と風に揺れた髪に透けて、背中に妙な何かを見つけた。
妙な何か……それは、傷跡だった。

上手い具合に髪に隠れていたが、その傷跡は背骨に沿うように一本の大きな傷跡があった。
「シュウスケ君？　見とれるのはいいけど、ちょっと寒くなってくるよー？」
「あ、悪い」
さっきから、手が止まりっぱなしだ。早くしないと。
ナイフ自体が小さかったとはいえ、随分深く刺さっていた。
血だって沢山出ているし、まだ完全には止まってない。早く応急処置だけでもしないと。
「なぁ、姫香」
「んー？」
腕を縛りながら、聞いてみるコトにした。
「その、さ。背中の傷。どうしたんだ？」
一瞬、包帯を巻く姫香の腕が震えた。気がした。
「私が小さい時に鞘朽に拾われたってのは前に言ったよね？」
「あぁ。八歳か九歳ぐらい、だったか」
「そ。私自身あんまり覚えてないんだけど、冴城先生に聞いたコトがあるの。
私はどういう経緯で死に掛けて、鞘朽に拾われてきたのかって。家族はどうなったのかな、って。
冴城先生は教えてくれた。
私のお父さんが仕事で大きな失敗をして、お母さんはそれに対してヒステリックになって。
未だ小さかった私は家がどうなってるのか理解出来なくて。
それで、何かがおかしくなっちゃったんだろうね。お父さんが、無理心中を図ったの。
お母さんは包丁で刺されて即死。私は怯え逃げる後姿をお父さんに切りつけられて、その後家に火をつけてお父さんも自分で自分を刺して死んで。背中の傷はその時のなの」
右腕を縛り終え、今度は左腕。

「そうか……」
「ま、聞いた話だし私自身あんまり覚えてないし現実味も無いから。何かのニュースを聞いてるみたいだったけど。でも背中の傷がその場に居た証拠。
誰かを恨んだり、自分の運命を憎んだり。そんなコトはしなかった。ただ、あの時死ぬハズだった自分を鞘朽が拾ってくれて。誰かを殺すコトでしか価値を示せない場所ではあるけど。
それでも感謝してる。今生きてる自分が居るコトに」
左腕も縛り終えた。
地面に置いていた俺の上着を拾い、それを姫香に着せる。
「――俺も、最近は……生きていられてよかったって思うよ」
「うん。それなら私も嬉しい」

×××

「だから、悪かったってば。物凄く反省してる。えぇ責任者にあるまじき失態だわ。
しろというなら貴方の前で土下座でも何でもしてやるわよ。
……ごめんなさい。
そう……。
場所は大方の検討はついてるわ。きっと彼は帰るハズ。かつての家に。
……えぇ。私が自分で行くわ」

×××

とりあえず、現在位置が掴めない。
俺は何も解らない状態で姫香を抱えて走ってきたし、姫香も気を失っていて道を覚えていない。
まぁ幸い、ここが河原というコトもあって川を下っていけばなんとかなるハズだ。
二人で夕暮れの山道を歩く。
鞘朽から何キロ離れているのかも解らない。
多分、人目のある所まで出れば鞘朽が回収に来るだろう。
その時、俺を脱走兵として処分するか、姫香までもを殺すかはわからない。
だけど俺の命を差し出してもいいから、姫香だけは殺させない。
それだけは何としても、冴城に確約させてやらなければならない。
「腕、大丈夫か？」
「うん。血はもう止まったし、傷口はそう大きくないしね」
そう言う姫香の笑顔には血の気があまり無い。血は止まっても、血が足りない。
早く、何とかしないと。
……それから何キロ歩いただろう。
空はすっかり暗くなってしまった。
「おー、シュウスケ君シュウスケ君。灯りだよ灯り」
「ホントだ。街に出たみたいだな」
木々の向こうに無数の光が見える。ようやく街まで出てきたか。
「って、何か見覚えある……な」
「そうなの？」
「あぁ……ここは、俺が――――」
未だ鞘朽に来る前。俺が解理する前であった時。
若菜と共に生きていた……街。
「――――若菜……」

飽くなき赤色。

思い出したその名を、口にした。

#21：Ｕ－ｌｔｉｍａｔｅ（最終状況）（後書き）

どうも、秋折紀織です。

・このラッキースケベめ！
・事態は収束に向かう……と、いいなぁ。
・細かい事は気にしたら負けです。

感想等いただけると嬉しくて切なさと心強さとー。
では。

#22：Ｖ－ｅｒｓｕｓ（バーサス）（前書き）

目に焼き付けて、死ぬがいい。

#22：Ｖ－ｅｒｓｕｓ（バーサス）

気狂いの赤色に苛まれ、大切な人を傷つけ。
その果てに辿り着いたのが。
かつての友達と、一緒に生きた場所だった。

飽くなき赤色。

「流石に、更地になってるか……」
山道を降りて、夜の街を歩いて、そうしてまず向かったのが神原の家。
だけど、そこにあったのはただの空き地。
「そりゃそうか……。あれだけの火勢じゃ全焼して当然。燃えカスを残しておくのも見場が悪いし」
何だろう。この気持ちは。
無性に……。
「シュウスケ君、泣きそうな顔してるよ？」
「姫香……」
泣きたいのだろうか、俺は？
よく解らない……。
よく解らないまま俺の足は、自然とある所に向かっていた。

×××

「夜のお墓ってやっぱり怖いね……」
「はぐれるなよ」
姫香の手をとって、前を歩く。
ここは墓地。俺の記憶が確かなら、ここにあるはず。
「……若菜」
仲谷家乃墓。
そう彫られた墓石。ここに、若菜と若菜の家の人たちが眠っている。
「――結局、一度も来なかった。葬式にも出なかった。
お前が死んでから、一度もお前に会いに来なかった。
俺は、お前のためと言いながら灰津を殺そうとしてた。なのに俺はお前をずっと、一人にして……」
自分でも解るぐらい声が震えている。身体が震えている。
「シュウスケ君、泣いてるんだね」
「……あぁ」
若菜が死んだと知った時、流せなかった涙が今は溢れている。
俺は自分がこんな風に泣けるなんて知らなかった……。
若菜に出会ってからの数年。俺は確かに生きていた。
若菜さえ居れば他に何も要らないと思う程に。それぐらい、若菜は俺にとって必要な存在だった。
それが――若菜を失って、衝動のままに灰津を殺して、自分も死にかけて。
そして、姫香に出会った。
自分でも気付かない内に姫香が俺の中心にいた。
そこは昔、若菜がいた場所で。そこに俺が姫香を座らせた。
おかしな話だ。あれだけ大切だと思っていた若菜が居なくなって、新しい人を見つけたらすぐに乗り換えて。
そんなんで、若菜の親友だなんて……ホント――。

「ホント、笑わせるよな」

暗い墓地に響く声。遠い昔に聞いた声。今はもう聞こえないハズの声。

「――――わか、な？」

暗い墓地だ。顔が見えるハズもない。なのに俺には解る。

何故か顔がはっきりと見えている。幻視だろうと、それが真実。

「久しぶり、秋介。元気してたか？」

「何で……？」

「何で、ってそりゃ……。秋介と一緒だよ、多分」

「俺と一緒……、まさか死んでなかったのか？　瀕死で、それで鞘朽に……？」

「鞘朽？　あぁそれが秋介の居る組織の名前か。やっと名前が解ったぜ。

残念だけど、俺はその『鞘朽』ってのに拾われてない。俺を拾ってくれたのは『瞑主（めいす）』。

きっと多分、鞘朽とは敵対してる組織だ。

まぁお互い存在を隠し通してたから、今この瞬間まで名前さえ知らなかったんだけどな」

俺も姫香も返す言葉に困っていると、俺たちの後ろから別の声がした。

「薄々感じてはいたけど、まさか本当に敵対組織が居たなんてね。瞑主、だったかしら？　君はそこの構成員というコトでいいのかしらね？」

やはり聞き覚えのある声。視線を向けると、この暗闇の中でなお暗い色の白衣を纏った冴城が居た。

「まぁそういうコト。お互い名前を交換したし、今日はこれぐらい

で済まそうかな。
近いうちに、多分潰しあうと思うけど、ね」
「逃がすと思う？」
「逃げるさ。この程度の障害、殺せなくてどうする？　じゃあな、秋介。割と元気そうで安心したよ。
俺を忘れてたコトは、まぁ許してやるさ」
「若菜！」
瞬きの内に若菜はその姿を晦ませた。
まさか、若菜が生きていたなんて。灰津が殺し損ねたってコトか？
それで、瞑主に？
「シュウスケ君……」
俺の右手を握る姫香の手に力がこもる。考えに耽ようとする俺の意識を繋ぎ止める。
そうだ。未だ問題は残っている。
俺は姫香の命を、冴城に確約させなければならない。
「冴城……」
「その様子だと正気みたいね、神原秋介。涼代姫香を殺しきらなかったようだし。
君達の中では、全部丸く収まってるみたいね」
「脱走兵として罰を与えるなら俺だけにしてくれ。俺はどんな方法で処分されようと構わない。
姫香は俺が巻き込んでしまっただけだ。姫香だけは無事にこれからも鞘朽で生かしてやってくれ。頼む」
頭を下げる。俺に出来る精一杯。
もし断られたら、この場で冴城を殺してでも逃げ出してやる。
「……君は、私に怒るかと思ってた」
「え？」
「今回の君の暴走、姫香の傷、全部私の責任よ。
私が上司からの無理難題にキれて酒に溺れて、二人に絡んで……。
むしろ命を捧げるのはこの私だわ。私の全てをかけて君ら二人を鞘

朽に居られるようにするわ」
「……冴城先生、ありがとうございます」
「ありがとう、冴城」
二人して冴城に頭を下げる。ここまで言ってくれて嘘というコトもないだろう。
冴城には素直に感謝するコトにした。
「それじゃあ、帰るわよ。やらなきゃいけないコトも沢山出来たわけだし、ね」

若菜は言っていた。多分潰しあいが始まると。
鞘朽と瞑主の、潰しあいが。

#22：Ｖ－ｅｒｓｕｓ（バーサス）（後書き）

どうも、秋折紀織です。

よくある展開かと思います。
よくある展開かと思います。
……でも、いいじゃん。

ここからは、鞘朽ｖｓ瞑主の潰し合いが。始まる。

感想等いただけると嬉しくて……悔しいッでも感じちゃう！
では。

#23：Ｗ－ｒａｐｐｅｄ　Ａｒｏｕｎｄ　Ｔｈｅ　Ａｘｌｅ（無意味な議論）

ラップド　アラウンド　ジ　アクセル。
くだらないことにかかずり合わされて無意味な議論につきあわされて。

#23：W－rapped Around The Axle（無意味な議論）

鞘朽と瞑主の潰し合いが始まる。

飽くなき赤色。

鞘朽に帰ってきたその足で俺は一人、指令棟にある冴城の部屋に連れて来られた。
「神原秋介に会いたいって人が居るのよ」
「俺に？」
「そ、まぁそんなに畏まる必要はないわ」
部屋に入るとそこには既に女性が一人、来客用のソファに座ってコーヒーを飲んでいた。
「おかえり恭子。そっちが例の子ね？」
「そうよ」
コーヒーをテーブルに置いて、その女性は俺の方へと歩いてくる。
値踏みするように視線を向けてくる。
日本人の顔立ち、だが金髪。眼も青い。ハーフか？
「中々可愛いのね。どう？　恭子に手ぇ出されてない？」
「え、あぁ。はい。何とか断ってます」
「ちょっと。そんなコトを聞きに来たわけじゃないでしょ」
怒鳴りながら冴城は自分のデスクに座る。

「あはは。そう腐らないの。じゃ、君も座って。神原クン」
「失礼します」
テーブルを挟んで女性の向かい側のソファに座る。
女性もさっきと同じ位置に座り、コーヒーを手に取る。
「自己紹介しとく？　私は、星村歩（ホシムラ アユミ）。恭子と同じで鞘朽を創設した一人ね」
その女性――――星村はコーヒーを一口煽る。
「……冴城が鞘朽を創設した一人？」
「そーよ。あれ、聞いてないの？　まぁいっか。
鞘朽は私と恭子、後他にも数人の人間で創設したのね。
それぞれ立場とかは違ってたんだけど、偶然とか必然とか色々なモノが繋がって鞘朽の創設に至ったのね。
もちろんその目的は、衝動を解理した人間の居場所を作るコト。って言うとちょっとキレイすぎるかな」
またコーヒーを飲む星村。
「そのぐらいにしておきなさい歩。お喋りが好きなのは知ってるけど用件は手短にしなさい」
冴城が星村を咎める。あまり過去のコトを喋られたくないのだろうか？
「はいはい。でね、聞きたいコトっていうのは今日のコトよ。恭子に連絡を受けたからね、実際に聞きたくて飛んできちゃった。
『瞑主』のコトを。神原クンが見聞きしたコトをそのまま教えて」
俺は少し戸惑ったが、若菜の墓前での若菜との会話を思い出しながら幾つか話した。
そうすることで、俺自身も何とか思考が纏まってくる。そんな気がした。
鞘朽と敵対する組織であろうというコト。お互いに存在を隠していたので今日まで名前さえ解らなかったというコト。
おそらく鞘朽と同じように死にかけている人間を拾っているというコト。

そして近い未来、潰し合うコトになるだろうというコト。
「ふーん……。おっけー、解った。ありがとね、神原クン。そうなると、他の連中にも色々言い含めておかないと危ない、ね」
「そうなるわ。……神原秋介ご苦労様。もう戻っていいわよ」
「あ、はい。じゃこれで」
立ち上がって、部屋を出ようとする。
「あ！　ちょい待って」
そこに星村が駆け寄ってきた。
小さな声で耳元に囁きかけてくる。
「あのさ、君みたいな和服が似合いそうで最初は強がってるけど段々快楽に溺れて最終的に自分から求めてきちゃうような可愛い男の子を必要としてる美しい女性たちが居るんだけど、どう？」
「お断りです！」
まったく。冴城と変わらねぇ、まったく！
今度こそ俺は部屋を出た。

×××

「あははー。断られちゃったね」
「当然よ。私が誘って駄目だったんだから、歩が誘っても駄目に決まってるでしょ」
「なにそれー、恭子みたいな三十路のオバサンより二十台の私の方がいいに決まってるでしょ！」
「私はまだ三十になったばかりよ！　大体、歩だって二十九でもうすぐ三十じゃない！」
「でも恭子よりは若いもーん」
「……ったく。余計なお喋りばっかして。喉は大丈夫なの？」
「んー。まぁ大分良くなったと思うのよね」

「そんなコト言って、完治するコトは無いのだしいずれは声が出なくなるのだからちゃんと自愛しないさいよ」
「解ってるわよ。
それより、やっと名前が解ったワケだけど。瞑主か……。恭子はどうする？」
「どうするって……目障りではあるのじゃないかしら。鞘朽にとって」
「そうね。多分そうだね。まぁいいわ。連絡は私の方からしておくから、早い内に皆で集まりましょうね」
「えぇ」
「に、しても。瞑主の名前が解ったのが恭子が酔ったお陰なんて皆に言い辛いねー。私は言うけど」
「……反省はしてるわ」
「ふふふのふ。最初に誰に言おうかしらね。恭子の酒癖の悪さを知らない宮眺江（くながえ）君あたりに言ってみようかしらー。どんな反応するかすっごく楽しみー」
「ちょ、それだけは止めてー！」

×××

部屋に戻る前に、姫香の部屋に寄った。
「姫香いいか？」
今度こそはノックする。あんな失態はもうコリゴリだ。
「シュウスケ君？　どーぞ」
ＯＫの返事が返ってきたので、安心して部屋を開ける。
姫香はベッドに座っていた。両腕には包帯が巻いてある。
「傷は、大丈夫か？」
「うんー。止血もしたし、輸血もしたし、消毒もしたし、縫合もし

たし、包帯も巻いたし。
一日寝ただけで抜糸もするし。全然平気だよ」
「そっか。流石に瀕死の人間を治せるだけはあるもんだな」
「傷跡もそんなに残らないって言ってたしねー」
平気なのを見せるように腕を振り回す姫香。
「痛た……」
「お前はアホの子か？」
「えへへ」
「もういいから、今日は寝ろよ。って俺が押しかけてきたからか。んじゃもう戻るから。大人しくしてるんだぞ」
「うん……あのね、シュウスケ君。今日だけ一緒に寝……、て？って居無いし！」

血に塗れる時間は、近い。

#23：Ｗ－ｒａｐｐｅｄ　Ａｒｏｕｎｄ　Ｔｈｅ　Ａｘｌｅ（無意味な議論）

どうも、秋折紀織です。

特に新しい展開が無い、中継ぎのような２３話でした。
あぁ、このまま『神原秋介の戦いはこれからだ！　ご愛読ありがとうございました』
なんて風に終わらせた……くは無いなぁ。やっぱり。

次は超難関の２４話です。
何が難関かって、Ｘで始まる単語を探すトコロから始めないと。
それでいて、話の内容に噛み合った単語にしないと。

感想等いただけると純粋に嬉しいです。
では。

#24：X－enoglossia（ゼノグラシア）（前書き）

後ろがつっかえてるので、足早に。

#24：X－enoglossia（ゼノグラシア）

そうでなければいい、と思っていた。
俺の衝動は『■■』だから衝動解理者しか俺は殺すコトが出来ない。

そうでなければいい、と思っていた。
でも気付いていた。本能と本能が共鳴して。
俺は若菜を『殺すコトが出来る』。

飽くなき赤色。

鞘朽は今までに無い異様な雰囲気を漂わせていた。
若菜との再開から一週間経った頃。先に仕掛けてきたのは瞑主だった。
各地に送り込まれていた鞘朽の人員が次々と襲われてたという。
そして別の支部では、直接施設に瞑主が襲撃をかけてきたらしい。
全国に散らばる支部のうち二つが陥落。人員も全体の一割を減らされたとか。
生憎、俺たちが居る支部には未だ瞑主の手は伸びていない。
でもいずれ来る。時間の問題だ。
もしかしたら明日。いや、後数秒後。いつ襲撃が来てもおかしくない。
冴城もこの事態に慌しくしているようでここ最近は顔を見ていな

い。
まぁ今まで俺みたいな下っ端に頻繁に接していたのが少し変だったといえばそれまでだが。
姫香の腕の傷はもうすっかり完治した。訓練で勘も取り戻している。
十叶は相変わらずだし。俺も来る日のために備えて例え微力だろうと鍛えてきた。
そんな折、忙しいハズの冴城に呼び出された。
「時間も無いから手短に言うわ」
冴城の顔には疲労が浮かんでいた。医者の不養生、とは言わない。
それだけヤバい事態なんだ。
「ここ数日で瞑主の名だけを手がかりに様々な情報を集めたわ。
そして、その上層部に仲谷若菜(なかたにわかな)が居るコトが判明した。
四年と少し前だったわね、仲谷若菜が灰津統滋郎(かいづとうじろう)に殺されたのは」
「はい。殺された……とこの前まで思ってました」
「瞑主の細かい組織体制までは未だ解ってないけど、拾われて四年も経てば上まで上り詰めれるみたいね。
それとも、余程仲谷若菜が優秀だったのか……」
「――――それで、俺に何を？」
「ある程度気付いてるんでしょ、神原秋介。
今日の夜、瞑主の部隊がココを攻めてくるわ。その戦闘指揮官は、言うまでも無く仲谷若菜よ。
仲谷若菜がどのような衝動に解理しているかは不明。
そして敵の規模からして、指揮官を狙えるのは精々一人か二人。他は他でやるコトが山のようにあるのよね。
だから……」
「俺の手で若菜を始末しろ、と」
「そういうコト。出来そう？」
「出来なくてもやらなければ、鞘朽には居られないからな。やってみせるさ」

「……そう。
最後に教えてあげる。君の持つ本当の衝動のカタチを」
それは。

×××

「ハッ、全部お見通しだったなんてな。ウチの情報漏洩対策も甘っちょろいモンだ」
辺り一杯に銃声と怒声と剣戟音がコダマする。
「……ココは煩いから、静かな場所に行こう」
冴城が手に入れた情報の通り、夜になって瞑主の部隊は襲撃をかけてきた。
俺は単独で若菜を探し、メインの戦場から少し離れた場所で見つけた。
そして今、切り結ぶコトもなく俺と若菜は私室棟の屋上に登る。
見下ろせば今もなお血を流し必死で戦う仲間と呼ぶべき人たちがいるのだろう。
でも、高さはそれを切り離す。
「若菜」
躊躇わず、名を呼んだ。
「何だ、秋介？」
「久しぶり。この前、言えなかったから」
先ずはこの言葉を。
「あぁそうだな。お前はそういうトコ、律儀だもんな。

――四年、か。お前は全然変わってないな、見た目」
「お前が死んで、家族が死んで。その瞬間から成長しなくなったんだ。
体の機能が何処か壊れて……。取り残されたみたいになった。
若菜は随分、変わったみたいだけど」
俺の前に立つ若菜は、『あの写真』の若菜の面影を残しつつも幾らか変わっていた。
二十一歳。俺の本当の年齢。若菜の年齢。
「まぁな。あの灰津ってヤツに殺されそうになって……実際、心臓止まったらしいけど。
とにかく死の淵から生き返って、瞑主でずっと殺してきた。
他にやるコトも無かったしな。四年経って気付いたら戦果を挙げすぎて、今じゃ上層部の一人だ。
本当は下っ端に紛れてワイワイ殺したかったんだけど、指揮官だっていうならしょうがない。
とりあえず部隊組んで、号令だして。そんなもんさ」
「そうか。大変だったな」
「そうでもないさ。秋介だって同じだろ？
鞘朽と瞑主は殆ど似たような組織だ。……居心地がいいんだろ？」
「最近は、そう思うようになってきたよ。正直、こっちに来てから未だ一人も殺したりしてないけど」
「へぇ。それで、お前は俺を殺せるのか？」
「……やってみせるさ。俺の居場所は鞘朽しかない。それに俺は衝動解理者しか殺せない。
俺の衝動が『他人』だから。
最初は『若菜』で今は『姫香』。誰かの名前が入ってたから俺はイ

マイチ理解できてなかった。
解理してるのに、中途半端だったんだ。
でも今は違う。冴城が気付かせてくれた。教えてくれた。本当の衝動のカタチを。
俺は誰かを想うコトでしか生きられず、殺せない。
俺は『姫香』を守るために戦うし、衝動解理者を想うコトで殺してやる。
それぐらいしか、出来ない」
右袖からナイフを取り出し、構える。
かつては『若菜』のためとナイフを振るい、この手で殺人鬼を殺した。
今は……『若菜』のためとナイフを振るい、この手で若菜を殺そうと。
解理者のコトを想って殺してやるなんてとてつもない偽善かもしれない。
でも俺の衝動は……そういう風に出来てるから。
理性や感情よりも上位の感覚。人が最もやりたいコトの塊。
偽善かもしれないという心さえも塗り替える。
「若菜、お前を殺し救ってやる」
味方は全力で守る。
敵は全力で救殺する。
「いいね。望むトコロだ。やっぱり年単位での付き合いは重たい。
秋介、お前を殺したら俺は———」

あれほど見飽きたハズの赤色が、呻きと共に起き上がろうとする。
飽くなき赤色をこの手で。

#24：X－enoglossia（ゼノグラシア）（後書き）

どうも、秋折紀織です。

無事Xから始まるサブタイが見つかってよかった。よかった。

ついに明かされた神原秋介の衝動。
『他人』というカタチ。
他人の中でも特に想いを向ける人間の名前が『』の中に入るので、
秋介本人も色々と勘違いしていたワケです。
冴城は最初の頃からそれとなく気付いてたワケですが。
それはまぁ冴城が長年多くの解理者とであってきた故の勘みたいなモノで。
つまり以前にも『他人』という衝動を持つ人間が居たというコトです。
ま、誰とはいいませんが。別に出てきたわけじゃないし。

次辺りで、決着がつくんじゃないんでしょうか。きっと。

感想等いただけると嬉しくもあり、悲しくもなし。
では。

#25：Y－ou（君と僕）（前書き）

そして決着。

#25：Y－ou（君と僕）

「楽しかったなぁ、俺と秋介が出会ってからの五年間。
灰津のせいで途中で終わっちまったケド、それでも今思い出しても楽しかったと思えるぜ。
――――だけど、今この瞬間の方が何倍も何倍も楽しい！」

飽くなき赤色。

「ハッ……く……はぁ」
拳銃の残弾はゼロ。投げナイフもあと数本。
致命傷は無いものの、血は止まらないし疲弊も大きい。
四年の差。殺した人数の差。それが俺と若菜に間に横たわる『絶対に敵わない力の差』。
「おいおい、そんなんで俺を殺せるのか？　秋介よぉ。
折角、すごく楽しいんだ。もっともっと楽しませてくれよ！」
若菜の得物は俺と同じナイフ。だが若菜はたった一本のナイフだけで俺に差し迫ってくる。
「まったく、武器は大事にしろよな？
銃だって無敵じゃあない。筒の向く方向さえ見てりゃ回避は簡単。
銃弾より遅い投擲ナイフは見てから余裕で避けれる。
もっと頭使わないとな、秋介？　お前、成績は結構上位だったのになぁ？」
「……ッハァ……。若菜はその更に上を行ってたけどな。一度だってお前に成績で勝てたコトなんて無かったッ」

左の袖からナイフを一本手のひらに滑らせ、若菜に投げつける。
「だーかーらー、見てから余裕だって言ったじゃねぇかよぉ」
投げると同時に俺は高く飛び上がり、若菜の頭頂を狙う。
「おー、高さだけなら人間離れしてるな。流石、衝動解理者。でも俺も解理してるって解ってる？」
見せ付けるかのように、若菜も俺と同じ高さにジャンプする。
そして何も無い空を蹴るかのように体を捻っての、回し蹴り。
何とか腕で防ぐものの、そのまま着地。
「なぁ、正味な話。俺は何時だって秋介を簡単に殺せるんだぜ？なのに何でソレをしないと思う？」
血みどろになって肩で息をする俺に対し、若菜は全くの無傷で余裕綽々の表情をしている。
「それは、俺の衝動が『喪失』だからだよ。俺は自分の手から何かを失う時に快楽を感じるんだ。
最初に気付いたのは、家族が死んだって知った時だったかなぁ。
瞑主で目が覚めて家族は死んだって聞いて。悲しむハズなのに何か言い知れない感覚が全身を駆け巡ったんだ。
それからの四年の間に、瞑主でパートナーと付き合っては、この手で始末して……。
その度に俺は楽しくなった。この感覚は俺しか解らないんだろうなぁ。失うモノが大事であればあるほど、失った時の快楽はデカい。
それは年月で培う時もあれば、運命的に気があうだけで大きくなる時もある。
そして、その二つを満たしてるのが———お前なんだよ、秋介。
もう九年前になるのかな……俺とお前が初めて出会った瞬間。俺は感じていた。こいつとは死ぬまで仲良くやっていけるって。
実際俺が先に死んじまったわけだけど、それはお前だって感じてくれたんだろう？」
「……あぁ。少し捻くれてて気障ったらしくて周りから浮いてた俺をお前は普通に話しかけてくれた。

たったそれだけで、俺はお前と親友になれると思った。だから俺の衝動の最初の名は『若菜』だったんだ」
「ははは。でもな、俺は気付いちまったんだ。『喪失』という衝動を持つ自分に。
馬の合う親友と培ってきた五年もの年月。それを自らの手で失ったらどれだけ気持ちいいんだろうな？
だからギリギリまでお前は殺さない。一度は終わったと思ったお前との時間を一分一秒でも延ばして、それから殺す。
親友としてせめて、苦しまないように殺してやるから。安心しろよ」
若菜の顔が、痛々しいぐらい歪な笑顔に染まる。
実力差は歴然。どう天地が引っくり返ったって俺は若菜に敵うハズがない。
———それでも、やるしかない。
今一度、右手に握るナイフの感触を確かめる。疲れきった腕と脚に再動を促す。
力を振り絞れ。ここで若菜を殺さなきゃ、俺も姫香も居場所が無くなるんだ！
「まぁでも、そろそろ狩り時かな。下の方が勝ってるか負けてるかは解らないが、勝ってればそれでいいし負けてても俺が行けばすぐに形勢逆転だ。

———だから、さよなら親友。
楽しかったよ。お前と居た時間は。
それじゃ刹那の快楽のために死んでくれ」

若菜の目の色が変わる。殺意だけを纏った目。
その目に俺は身が竦む。……それでも、刺し違えようとも、ここで若菜を殺すッ。

残りの投げナイフ三本をばら撒くように投げつける。
そんなものが効かないのは重々承知だ。
血を失い殺意に震える足を無理矢理駆動させる。走れ、若菜のトコロまで。
腕を伸ばせば届く位置まで。形振り構わずッ！

「届かないさ。
わざわざ俺の射程に飛び込んできてくれてありがとう。
俺は腕を伸ばすだけでお前の心臓にナイフが刺――――」

言い終わらない内に若菜の頭がザクロのように弾けた。

「若菜――――？　死んだ、のか？」
真っ赤に染まる若菜の体と一緒に、足がもつれて床に倒れこむ。
眼前には欠損した頭蓋と目を閉じ息を止めた若菜の死体。
真っ赤なぐちゃぐちゃの頭の中から細長い金属――――弾丸――――が硬い音と共に床に転がった。

視界が真っ赤に染まる。何度目だろう、この赤い世界を見るのは。
痛みが脳に伝える。心臓にナイフが刺さっているぞ、と。
あぁこれで心臓を刺されたのは二度目だ。
残っていた傷跡の更に上から傷をつけられたなぁ。
今度こそ、俺は死ぬのかな。

まったく……心臓を刺されたのだから、潔くスグに死ねばいいのに。

#25：Y－ou（君と僕）（後書き）

どうも、秋折紀織です。

そりゃ、向こうは四年。こっちは半年程度（？）だもの。
敵うハズないじゃない。

若菜が解理した衝動は『喪失』。
何かを失わずにはいられない。というある種ドMみたいな衝動。
若菜はパートナーとある程度親交を深め、お互いに大事な相手だと思った頃に殺します。
それを四年の間に、十数人。
ちなみに相手は全部女性。
だって親交を深めやすいじゃん？　付き合って突き合えるから。
いやまぁ、解理してっから目的のためだったら男でも抱きそうだけど……どうなんだろ（ぇー

鞘朽ｖｓ瞑主の戦いの中でのほんの些細な決着ではありますが、秋介にはその程度が分相応なのです。
組織同士の決着は、彼の与り知らぬトコロでつきます。
だって、秋介って別にそんな大事な人材じゃねーし。
彼一人で組織をどうこうする力は無いのです。
――――今は未だ。

感想等いただけると嬉しいです。
では。

#26：Ｚ－ｉｐ（ジップ）（前書き）

これが一応の終わり。ここが一応の終着点。

#26：Z－ｉｐ（ジップ）

「――で、結局、今回も死に損ねたわけだ」
どんな強運だ。心臓を二度も刺されて死なない人間なんてこの世に居るのか？
いや。実例が自分なんだから、逃れようなくここに居るか。
「に、してもやけに静かだな」
いつもの真っ白な部屋。見覚えのある荷物が置いてあるから多分、自分の部屋だ。
起き上がろうとして、体が上手く動かないコトに気付く。
それでも何とか少しずつ。まず指先からゆっくり動かし、肘を曲げ肩を回し何とかベッドの頭にもたれる。
「痛ッ……。どうなってるんだ？　怪我の後遺症……なのか？」
まるで自分の体が彫刻か何かになったみたいに、動きが鈍い。
ところであの後、どうなったのだろう。
ここが私室棟である以上、鞘朽そのものは存在しているのだろうけど。
若菜が死んだ以上、あの場での瞑主の部隊は敗走あるいは全滅したハズ。
そうなると残った問題は、瞑主そのものか。本部でも探して攻めるのかな？
「ったく。そろそろ誰かが来て説明してくれねぇかな」
前に似たような状況だった時は既に室内に看護師が居て冴城を呼んできたが、今回は誰も居無い。
だから、誰かが部屋に入ってくる以外に状況の進展は無いのだけど……。
ほら。都合よくドアが開いた。俺があの時、思った通りだ。
「お邪魔するねー」
「おう。何だ、姫香か。ノックぐらいしろよな」

「へ？　シュウスケ……君？」
ん……？　何か姫香の雰囲気が変だな。変っつーか、何か違和感がある。
よく解らないが。
「シュウスケ君ッ！」
姫香が俺の名を呼びながら駆けてくる。
あぁよく解らないけど、目が覚めた患者に嬉しくて駆け寄ってくる家族みたいな図だな。
ところで姫香さん。その手に持っているプラスチックの桶には何度ぐらいのお湯が入っているのでせうか？
ご都合主義が続く。
床に躓く姫香。勢い余ってその手から飛び跳ねる湯気が見える桶。その先には俺。
とっさに腕を動かそうとしたが上手く動かない。なおも迫る桶。くるり、と引っくり返る。
当然、中身が俺に降り注ぐ。
「熱ッッッちぃ！！」
「キャー！　シュウスケ君大丈夫！？」
桶と一緒に持っていたタオルで頭から被ったお湯を拭いてくれる姫香。
「あ、でも思ったより熱くなかった」
「……シュウスケ君の馬鹿ッ」
「それでも熱いコトに変わりねぇんだよ！　寝起きにいきなり水だろうがお湯だろうがぶちまけられたら誰だって驚く！」
「ごめん……」
しゅん、とする姫香。あれ？　こんな簡単にしょぼくれるヤツだったっけ。
落ち込む姫香にどう声をかけようか迷っていると、姫香の腕がするり、と俺の肩に回された。
抱きつかれてる。そう認識するので精一杯だった。

「ひめか……？」
「ごめんね。私、嬉しくて……。おはようシュウスケ君。おかえりシュウスケ君。ごめんねシュウスケ君……」
「馬鹿。何に謝ってるのか解んねぇよ」
「うん……」
動かないハズの腕を無理矢理に動かして姫香の背中に手を回す。
抱きしめられるだけじゃ男が廃るってもんだ。
状況はよく解らないが、姫香が俺を抱きしめてくれるなら。俺も姫香を抱きしめる。それだけだ。
「姫香……」
「シュウスケ君……」
「そして二人はそのまま生まれたままの姿となり、お互いの愛を確かめ合う……。
あぁ美しきかな。ここから先を読むには『わっふるわっふる』とお叫び下さい」
「にゃあ！？」
「……ふん。そろそろ出てくるかな、とは思ってたけどな」
いつの間にかドアの前に立っているのは、いつもの黒い白衣を纏った冴城恭子。
下手したら居無いかとも思ったが、どうやら無事生きてたようだ。
「起きたみたいね、神原秋介。どう？　体は動く？」
「ゆっくりとなら何とか」
「そ。涼代姫香に感謝しなさいよ。毎日毎日関節が固まらないように動かしてくれてたんだから」
「姫香が？　それってどういう……」
「あらら。気付いてないの？　ってか涼代姫香も言ってないのね」
「えへへ……」
「だから何が？」
「神原秋介も男なら、女の微細な変化に気付くべきよ。涼代姫香を

見ても何とも思わないの？
」
姫香を見て？　それは最初に感じた、違和感のコト？
「あのねシュウスケ君。私髪伸びたし、背も少し伸びたし、胸もちょっと大きくなったんだよ」
「胸はどーでもいー」
「酷ッ！」
そうか。改めて姫香を見れば、本人が言うとおり髪とか背が伸びてるんだ。
……胸も。
「って、え？」
それってつまり。
「お気付き？　神原秋介はあの戦闘以来、丸々一年間眠りっぱなしだったのよ」

あぁつまり。俺はまた周りに置いてかれたんだ。
成長しないこの体が、知らない間に見えない年輪を一つ刻んだのか。

×××

「鞘朽と瞑主の潰し合いはとっくに終わってるわ。
結果は鞘朽の勝ち。戦力差は五分五分だったけど、戦略の差ってヤ

ツかしらね。最後はあっけなく終わった。
後は事後処理として瞑主の解体及び余りモノのいいトコ取り。使えそうな施設や資金やその他諸々は戦利品として回収したわ。
ま、そんなトコロかしらね」
場所を外に移し、俺と姫香は冴城の話を聞いていた。
上手く歩けないので姫香に肩を貸してもらっているのが少し絵にならない感じだが。
「……冴城。俺にとってはつい一瞬前のコトで。二人からしたらもう一年前のコトになるんだろうけど。
若菜を撃ったのは、姫香で。それを指示したのは冴城……だろ？」
隣に居る姫香の顔が少し俯く。
別に責めてるわけじゃないからな？
「そうよ。悪いけど神原秋介に仲谷若菜との一騎打ちを指示した時点で君は既に捨て駒扱いだった。
本音を言えば、死んで欲しくなかった……って言っても意味無いか。
神原秋介が敵部隊の頭である仲谷若菜を引き付け、隙を狙って涼代姫香が狙撃。
そういうシナリオ。相手は四年もの間戦い続けてきた強豪で、君はたかだか半年の間訓練しただけのヒヨッ子。
シミュレーションするまでもなく結果は歴然。だから、狙撃。
でも普通に狙っただけじゃ解理者には気付かれる。それもただの解理者じゃない。四年もの経歴を持った解理者よ。
だから私は涼代姫香にこう命じた。『決着がつく一瞬を狙って撃ちなさい』と。
下手すれば……下手しなくても神原秋介が死ぬかもしれない。それでも仲谷若菜が戦列に加わるだけでココは落ちてしまう。
だから、必ず殺さなければならなかった。どんな手を使っても」
風が吹く。冴城の黒衣がはためく。
冴城の瞳には、無感情を装った苦しそうな感情が、見えた気がした。

「――何度も引き金を引きそうになったの。
照星の先で、シュウスケ君だけが血まみれになりながら戦ってて。
私が一秒でも早く撃てば、シュウスケ君は助かるかもしれない。でも早く撃てば、避けられて下の戦局が変わってしまうかもしれない。
それでも……シュウスケ君が刺されるその瞬間まで撃たなかったんだから……私、シュウスケ君を見殺しにしたようなモノだね」
「ま、そういうコトなら……。冴城に指示された時から薄々感じてはいたしな。コトの真偽が解ったから、もういいや。
冴城も姫香も、そんなに気にする必要は無いんじゃないか」
その状況は俺が無力ゆえに作り出したモノだ。
俺と若菜の経験値に差がどれだけあろうとも、あの時の決着は俺が自分の手でつけなければならなかったハズだ。
それでも――それを、姫香の手にさせてしまったのは、間違いなく俺の落ち度。
本当は撃たせない方がよかったんだ。俺にとっても姫香にとっても。
全部、俺の力不足……。
「ん。じゃあ話を変えよう。で、俺なんで死んでないんだ？」
我ながら、どうして生きてるのかが不思議だ。今更だけど。
あの時確かに若菜のナイフは俺の心臓に刺さっていたハズ……。
「傷だけなら神原秋介が鞘朽に来た時の方が酷かったわ。もちろんどっちも心臓だから死なない保障は無かったけど」
傷が浅かったってコトか？　でも何で。
「あのね、シュウスケ君。私見てたから解ったんだけど。最後自分から飛び込んでいったでしょ？
でも途中でシュウスケ君失速して、仲谷さんのナイフが思ったより突き刺さらなかったんだよ。
それでも後一歩前に出てたら、或いは1センチでも腕を伸ばされていたら多分シュウスケ君は死んでたと思う……」
「そうなのか」

まさか自分の力不足のお陰で生きながらえたなんて、笑い話もいいところだ。
それとも……若菜が……。いや若菜は解理していた。これは事実だ。
解理者が情に絆（ほだ）されるなんてコトは有り得ない。……でも、あいつは最後まで俺を親友だと言ってくれていた。
それだけは。覚えておく。
「ま、その傷のせいで結局一年も眠り呆けてたワケだけどね。相変わらず体の成長は止まってるみたいだし。寝てる間に色々実験しとくべきだったかしらね」
「それは……ちょっと遠慮しておく」
「そう？　人類の夢よ、不老不死は。君の場合不老ではあっても不死かどうかは解らないけど。外的要因では死ぬだろうけど、寿命で君は死ぬのかしらね？」
「いや、流石に死んでくれないと俺としてもちょっと……」
「ふふ。まぁその内突然治るコトもあるだろうし、しばらくはその体を堪能してなさいな。それじゃ、私は戻るわね。神原秋介も適当に運動して体を解す様にしなさい。涼代姫香は部屋まで付き添ってやりなさいね」
そう言って、冴城は指令棟に消えていった。
……風が吹く。もうそろそろ冬みたいだ。腕から感じる姫香の体温が、やけに落ち着く。
「姫香……。俺の衝動、『他人』っていう衝動。今まで俺は上手く理解してなかったんだ。最初は『若菜』って名前が入ってて。あいつ親友だったから。それに男だったしな。だから『若菜』が『姫香』になって、俺は姫香への付き合い方が上手くいかなかったんだ。『若菜』の時の線引きが、『姫香』の時には上手くいかなくて。それで色々、戸惑ってたんだと思う。

でも、もう俺は衝動の本当のカタチを知ったから。
俺は———」
「シュウスケ君……」
寒い秋風の中、俺と姫香はキスをした。
浅くもなく深くもない、自然なキスを。
「私の誘惑がようやく実ったんだねっ」
「さぁ、どうだかな。姫香が魅力的なのは認めるが、俺は騒がしい女は苦手なんだ」
「それは残念でした。私は私のままで居るつもりだもん。シュウスケ君のために変えてはあげないよ」
「それでいいよ。ずっと眠ってたせいかな。少しぐらい騒がしい方が目が覚めるさ」
「うん……。あ、ねぇシュウスケ君」
「何だ？」
「わっふるわっふる」
「……いーけどな。初めてだから下手だぞ多分」
「私もだよ……」
そうして、私室棟。自分の部屋へ姫香と戻る。
ここから先は。何を叫んでも読めないからな。

あれだけ色褪せていた風景が色を取り戻した。
青、黄、緑、紫、黒、白。
そして———赤。
全ての色が風景に染まっていく。

色々と無くして、色々と綱渡りで、色々と生き急いで。
それでようやく手に入れたモノがある。

手放さないように。失わないように。
きっとずっと永遠に。守り通す。

もう飽きたなんて言わないさ。
全ての色は遜色なく存在している。
ただ一色だけを嫌ってちゃ、進めるモノも進めない。

飽くなき赤色。

それでいいじゃないか。

#26：Ｚ－ｉｐ（ジップ）（後書き）

どうも、秋折紀織です。

最後の最後に説明回なのはどうなのよって感じだけど気にしない！
また全ての説明はフィクションであり実在する物理法則等々とは関係ないコトをここに明記しますｗ
ようするに矛盾あっても見逃してってコトで。

一応の最終回です。
全編通してご都合主義が絶えなかった気もしますけど。
それに十叶とかものすっごくスルーしてるしｗ
書こうと思えば書けないコトもないんですけどね。外伝的な続き話を。
需要があるのか甚だ問題ですが。

多分、次の更新は、お蔵入りキャラ設定とか適当に書き連ねて、それから気が向いたらスピンオフって感じだと思います。
あくまで予定は未定。

感想、質問、批評、その他言いたいこと、ありましたらぜひお気軽にどうぞ。
では。

#27：A－nother01／神原秋介（前書き）

まずは注意を呼んでネ☆

#27：Ａ－ｎｏｔｈｅｒ０１／神原秋介

注意。
本章は、なんていうか出せなかった設定を吐き出したいだけの自己満足空間です。
具体例を出すと、西尾維新の戯言ディレクショナルとかあんな感じです。
本編（#1～#26）までを読んだコトを前提に色々書きますのでネタバレとか気をつけてね。

注意読んだ？

ならば、始めます。

飽くなき赤色。アナザーイクリプス。

■神原秋介ーかんばら　しゅうすけ
主人公。
肉体年齢十七歳。実年齢二十一歳。こうやって並べると例え十九と二十でも絶望的な見えない壁がある気がする。
不老については特に意味も理由も持たせてないです。ただの飾り。
まぁ思わぬ形で有効利用できましたけどね。潜入入学とか。
ただし、髪は伸びるし細胞が活動しているので傷も治る。
食事も生理現象だって起きる。なんとも都合の良い（誰にとっても）体。

自分でも言ってたけど、気障ったらしくて少し周囲から浮く子供。
ちょっとカッコよく見せたい子供にありがちな性格ですが、秋介の場合演技ではなく地。
そういう性格になった理由は、家庭環境の問題とかではなく、きっと若菜に見つけてもらうための長い長い前フリだったりして。

武装。
投げナイフと拳銃とナイフ。中～近距離格闘タイプ。
モノに特に拘りはないけど、灰津を殺した時の得物がナイフだったからってーのと、姫香との相性を考えて。
当初の予定じゃ、刀も持つつもりだったけど、十叶に取られちゃった……。
ちなみに、ｖｓ月山戦で姫香が持っていたカバンの中には銃火器やら何やらが沢山入ってました。

総重量……姫香より重いか軽いか？
持ち運びに不便な刀やその他一部の武器は校内の死角に隠してたり。
何があるか解んないからね！　ご都合主義だからね！
本編ではついぞ戦闘で活躍出来なかったけど。
割と何でもこなす系。特に優れているのが戦況把握と生存帰還。
将来的には、先の若菜と同じような立場――――とびきりの現場指揮官級になるハズ。
前に出て戦いながら部隊に指揮を出せるとかなんとか。

衝動。
はじめに『若菜』があって、＃０７で『姫香』になって。最後に『他人』だと気付く。
意外にも尽くすタイプというコトでしょうかね。
秋介と姫香はＨ出来ないみたいな話でしたが、あれは今まで『若菜』という衝動があったせい。
若菜が男なので、衝動の名となった人との付き合い方が親友のレベル止まりとなってしまったわけです。
で、いつの間にか『若菜』が『姫香』になったけど、親友以上まで行くと衝動のカタチが壊れてしまうという自意識の抑制であんまり酷く迫られるとキれちゃうワケです。
最終的に本当のカタチ……『他人』に気付いたので、その線引きを上手く出来るようになったのでヤっちゃうわけですが！
書かないよ？　……書かないよ？
ここらへん自分でも上手く説明できないのでアレですが……むぅ。
で。その『他人』というのは敵も含まれちゃうわけなのですよ。面倒臭いことに。
なので、鞘朽の理念に則り『手遅れの衝動解理者は殺した方が幸せ』な感じで、衝動解理者だけ殺せます。殺します。
秋介は鞘朽寄りの人間なので。

なので一般人は殺せません――――でも会話したコトのない一般人だったら殺せる。
もし一言でも会話を交わそうものなら殺せなくなります。話しかける。これ大事。
会話すると『知らない人』から『他人』にランクアップするので殺せなくなるとかなんとか。
色々と深く考えるとおかしなトコロだらけの衝動です。

裏話。
秋介の衝動は最初『友情』とかそんなんにしようかな、と思ってたんです。
だけどそれだと、どんなにハッピーエンドにしても姫香が性欲を持て余す（C・V・大塚明夫）。
ので、『他人』に。
だって『友情』だと、姫香を抱こうと思ったら友情以上のモノが必要になっちゃいますからね。
それだと衝動を乗り越えるコトになってしまうので没。
まぁ、実は秋介の衝動は『〇〇』でしたー。ってのは始めからやろうと思ってたコトなので何でもいいっちゃーいいんですが。

突然和服着せたのは完全に趣味。
浴衣がさぁ、胸元とか足とか肌蹴てるのって何かエロくない？　男女問わず。
……私は変態です。ごめんなさい。
きっと後日談では、姫香と浴衣プレイとかしてるんだろーよ！！
羨ましくなんかないもんね！

神原秋介ーかんばら　しゅうすけ
性別：男

戦闘スタイル：ナイフによる近接格闘および拳銃、投擲による中距離戦
年齢：２１
誕生日：１１月１０日
身長：１７７．８ｃｍ
体重：６０．１ｋｇ
血液型：Ａ型
出身地：日本・関東
趣味：生前／インターネット、死後／投げナイフによるダーツ
大切なモノ：涼代姫香
好きな食べモノ：長ネギの味噌汁
嫌いなモノ：カラス
得意スポーツ：ダーツ

■制作秘話その１
エロトークを盛り込んだのは完全にノリ。
おっかしいなぁ。俺って本当はもっとシャイな恥ずかしがり屋なのに……。
つか、受けてるのか引かれてるのか解らないから怖い。

涼代姫香の項へと続く。

#27：A－nother01／神原秋介（後書き）

どうも、秋折紀織です。

自己満足の吐き出しスペースへようこそ。
別に読まなくてもいいんだけど、読むと解り辛かった部分が更に解り辛くなるという本末転倒。
ホントはこんなの書くべきじゃないんだろうけど、書かずにはいられなかった。
なんていうか、お遊びな部分。趣味に走りたい部分。

まだ続くらしい。

感想、批評、質問、なんでもござれ。
では。

#28：A－nother02／涼代姫香（前書き）

相変わらず、痛い設定を書き連ねております。

#28：A－nother02／涼代姫香

注意。
本章は、自己満足に設定をつらつら語るだけの駄目駄目空間です。
本編（#1～#26）のネタバレを多分に含みます。

飽くなき赤色。アナザーイクリプス。

■涼代姫香－すずしろ　ひめか
ヒロイン。
十七歳。（#26では十八歳。秋介も二十二歳ってコトに）。
少し騒がしいぐらいに明るい、二次元によくある女の子。
姫香に関しては特に難しい設定は無いハズ。

年の割りに幼い体形ではあるが、胸は大きめ。ただし巨乳ではない。
サラサラストレートの長い黒髪。全部俺の趣味ですが、何か？
髪型は気分によって結んだり、解いたりと色々。
でも基本はロングストレート。これは絶対正義。

生い立ちは本編で言った通り。
一家無理心中で実父に殺されかけて瀕死のトコロを鞘朽に拾われる。
背中に大きな傷が一本、走っている。
その事件が姫香八歳の時。鞘朽に拾われてからは戦技教育と一般教

養を習って育つ。
基本的に鞘朽に拾われてから一人で育ってきたが、別段周りが冷たかったワケじゃないので割と普通人。
エロ知識はどっから仕入れたんだろうね？　……冴城あたりだろうか。

武装。
銃撃支援による遠距離戦が得意。
得意とは言っても、その戦闘力は平均ちょい上ぐらい。
幼い頃から戦闘訓練を受けるも、あまり伸びしろが無かった。
丁度秋介が鞘朽に来た頃にようやく初任務を与えられる始末。
秋介と初任務をこなしてからは劇的に訓練での評価が上がり、爆発的に強くなった。
もしかしたらその辺、姫香の衝動が関係しているのかもしれない。
どんな衝動かは甚だ不明ではあるが。
後日談として全盛期の姫香は、数多の銃火器と爆発物を扱う手練となる。
遠距離射撃のヒット&アウェイ型として、目標の行動妨害、時間稼ぎ、自己の生存帰還に長ける。
その強さの真価は、秋介と組んだ時に最大限に発揮される。
抜群のコンビネーションで余りの強さに、鞘朽の前線戦闘要員の中ではもはや伝説の存在として語り継がれ……ているとかいないとか。

衝動。
前述の通り解理には至っていない。どんな衝動を持っているかは不明。
なので、秋介と違い殺害対象に制限は持たない。本人の理性・感情に左右されるコトはあるが。

別に解理させてもよかったのだけど、あんまり超人ばっかすぎてもアレかなーとも思う。

裏話。
本編じゃ殆ど描写してないけど、他の鞘朽のメンバーとも色々話たりはしてるんですよ？
食堂とか行けば常に誰かいるし。
年の近い女の子だって何人か居るし、皆仲良くしてるのです。
で、その女の子伝いで最近神原秋介という解理していてしかも任務をこなせるという稀有な人間が鞘朽に拾われたという話を聞く。
秋介に興味を持った姫香は、屋上に昇っていく見慣れない顔を発見しこっそり尾行。
そして屋上にて、秋介に話しかけるわけです。
その時に、初めて秋介の顔を見て一目惚れしたとかなんとか。
同年代の男（の子）が居なかったわけじゃないけど、とにかく秋介に一目惚れでしたとさ。

涼代姫香ーすずしろ　ひめか
性別：女
戦闘スタイル：銃撃、爆発物による遠距離支援特化型
年齢：１７
誕生日：７月８日
身長：１５６．０ｃｍ
体重：ピチューン
血液型：ＡＢ型
出身地：日本・関東
趣味：昼寝、シュウスケをからかうコト
大切なモノ：鞘朽、シュウスケ

好きな食べモノ：リンゴ
嫌いなモノ：睡眠妨害
得意スポーツ：ドッジボール（が昔得意だった気がする）

■制作秘話その２
実は『飽くなき赤色』という小説は、掲載されている#1と#2がくっついた一つの短編として以前に書いたモノでした。
それをココに載せる際に二分割して、更に続きを考えて……って感じ。

次は、冴城恭子とその他の項へ続く。

#28：Ａ－ｎｏｔｈｅｒ０２／涼代姫香（後書き）

どうも、秋折紀織です。

例によって読まなくても別にいいスペースへようこそ。
でも楽しいのだからしょうがない。
俺が楽しいだけで、読む人が楽しいかは別問題ですが！
もうボチボチ後一つか二つで終わらせましょうかね。

感想、批評、質問、ツッコミその他諸々……いただけると嬉しいデスノ。
では。

#29：Ａ－ｎｏｔｈｅｒ０３／冴城恭子と衝動（前書き）

まだまだいくよー。痛い痛い設定の書き連ね！

#29：Ａ－ｎｏｔｈｅｒ０３／冴城恭子と衝動

注意。
本章は、ひたすらに本編で出せなかった設定を書き連ねるだけの痛いスペースです。
本編（#1～#26）のネタバレを多分に含みます。

飽くなき赤色。アナザーイクリプス。

■冴城恭子－さえぎ　きょうこ
研究所の博士とか、基地の所長とかそんな感じ。
丁度三十歳（#26では三十一歳）。三十路。真っ黒な白衣を常に着ているよく解らない人。

見た目の描写って黒衣以外にしたっけ……？
目付きが鋭い。髪は黒色で、割と短め。背丈は高い方。時々メガネ着用。
そんだけー。

生い立ち。
元々は若くしてかなり腕の立つ医者。アメリカで大学飛び級しまく

って十台の頃から病院勤め。
『悪魔の腕』と呼ばれる程の技量で、周りから畏敬の念を向けられていた。
が、ある日偶然に衝動解理者と出会い、ある事件に巻き込まれる。
それをきっかけに解理者を保護する組織を作ろうと思い立ち、様々な偶然と必然の巡り合せの元、鞘朽創設に至った。
もちろん、鞘朽に入るにあたって死亡事故を偽装し、社会的死人となっている。
そんだけー。

武装。
基本的に普通の人間で非戦闘員なので、戦えません。まぁ基本的な銃の扱い方とかは心得てるみたいです。
あと医者なんで、人体の急所とか熟知してる。熟知してるだけで急所が狙える程の腕はありませんが。
まぁなんだ。巨大なメス振り回したりした方が良かったかな？

衝動。
解理してません。詳細不明。
一応、登場キャラ全員分の衝動は考えてはいるのだけど、それが意味を持つ事は無い。

裏話。
『白衣なのに黒だったら面白くね？』が第一コンセプト。
後は特に大した特徴も無く、秋介たちに指令を出す研究所の所長的ポジションなキャラに。
『甲児クン！　出動だ！』

酒豪で酒乱。
多少の酒では酔わないが、いざ酔うと手がつけられないくらい壊れる。
終盤の秋介暴走から若菜登場、瞑主発覚の全てのキッカケはこの酒乱から。
改めて考えてみると何て罪作りな女だ……。

冴城恭子ーさえぎ　きょうこ
性別：女
戦闘スタイル：なし
年齢：３０
誕生日：３月１９日
身長：１７０．３ｃｍ
体重：５４．１ｋｇ
血液型：Ａ型
出身地：日本・関西／アメリカ・ＬＡ
趣味：お酒
大切なモノ：写真
好きな食べモノ：魚
嫌いなモノ：肉
得意スポーツ：卓球

■鞘朽という組織
存在を公表出来ない存在。日本に八つ本部・支部が存在する。
公表出来ないのは、偏にその活動内容から。
鞘朽関係者以外だと政府の一部お偉いさんしか知らない。
一応、日本国外にも影響力はあるのだがそっちは割と無視している。

国内で手一杯。

その第一目的は、衝動解理者の保護ないし駆除。
ひたすらに地道な諜報活動、情報収集を全国で行い、それっぽい人物に近づいて保護か駆除かをしている。
その過程で、瀕死な人間を見つけたら拾って鞘朽に招き入れる。
それっぽい人物の判定は、何かもう理由考えるの面倒だから、超能力っぽい感じで（ぇー
鞘朽の創設者の一人が『この辺があやしい！』って超感覚で見つけるんだよ。きっと。

解理者の保護以外にも、日本政府の便利屋として使われるコトも。
そこらへん冴城は気に入らずに、何か言われる度に酒を飲む。そして壊れる。

それぞれの支部には創設者の一人が支部長として統括している。
ＡＦ－８支部の支部長は、冴城恭子。
他、七名が本部長・支部長をしている。
星村歩（ほしむらあゆみ）もその一人。名前だけ出てきた宮眺江（くながえ）もその内の一人。

秋介たちが属するＡＦ－８支部は、日本の関東の何処か。
周囲を山と海で囲まれ、迷い込もうものならトラップの餌食に。
大体の支部は同じ感じで、私室棟、修練棟、指令棟、学舎棟、などがある。
私室棟は病棟も兼ねており、一階には食堂もある。
修練棟は戦闘訓練施設。これ一つで様々な訓練が出来る。プールとかもあったりする。
指令棟は主に非戦闘員で書類仕事や警備などをする人員のための棟。
学舎棟は勉強するトコロ（そのまんま）。秋介は利用したコトは無いみたいだけど。

他にも色々あるかもしれない。が省略。

■衝動、解理

理性や感情よりも上位の感覚。人が最もやりたいコト。それが衝動。
全ての人間が持っているが、衝動に気付くコトは稀。
どんなキッカケで衝動に気付くは人それぞれ。が、衝動という存在を知るだけで目覚める確率は確実に上昇する。
故に鞘朽も『衝動』もその存在を公表出来ない。
ある人間は死の淵で衝動に気付いたし、ある人間は爆発炎上を見て気付いたし……。
つまり、俺の都合でいつでも目覚めさせるコトが出来るというコト。
何というご都合主義かな。
衝動に気付いていなくても、性格や人格がそれっぽくなるコトもあれば、衝動とは全く関係無い正反対の人格なコトもある。
十叶は典型的な後者で、そんな素振り全然無かったのに『正義の味方』などという衝動に目覚めたからねー。後付じゃないよ。
逆に月山花樹は、人格こそ普通ではあったものの、新聞にかける情熱の源泉は人が沢山死ぬ記事をもっともっと見たいという無意識によるものだったりする。
衝動に目覚める前から若菜を慕っていた秋介も月山花樹と同じく前者に分類される。

衝動に気付くコトを『解理』と表現する。
ぶっちゃけ、『理解』をひっくり返しただけだったり。乖離とか解離じゃないですよ。
解理すると体の性能が本能により近づくので、常人離れした肉体の扱いが出来るようになる。
つまり、戦闘能力が高くなる、と。

人の本能って、戦うコト（生き残るコト）、だと思うんですよ、俺は。
だからそのまま、強くなるって感じになってます。
なので、秋介は灰津と相討つコトが出来たし、月山花樹は秋介と微妙に対峙できたし、十叶はいきなり居合い刀を扱えたし、若菜は四年という短期間で瞑主の上層部まで上り詰めるコトが出来た、と。
最初はもっと解り易く、超能力に目覚める感じにするつもりだったけど、それじゃツマンナイかな、と思ったので変更。
手から炎だしたり、雷とか打ってみたりじゃ、普通すぎるべ？

本編で出てきた衝動は、『殺人』、『殺戮』、『他人』、『喪失』、『正義の味方』。
『殺人』は衝動の中でも割とポピュラーで目覚める人間が多い衝動。
『殺戮』は殺人と違いただ殺すだけでなくアリの巣に水を注ぐみたいに人を殺したがる衝動。
『他人』は秋介の項を参照。
『喪失』は若菜の項を参照。（後述）
『正義の味方』は十叶の項を参照。（後述）

他にどんな衝動が存在するのかは、省略。でも、どんなコトでも衝動になりうるという事実。
人によってやりたいコトなんて違ってくるから。
その衝動が社会的に善行と呼ばれようとも、悪行と呼ばれようとも、行き過ぎた行いは全て社会に合わない。
例えば、『空き缶拾い』の衝動に解理したとする。その人は朝から晩まで空き缶拾いに終始してしまう。
空き缶拾いは善行だがそれしかやらず、それだけに特化してしまうと、社会はその人を認めなくなる。
なぜなら、社会で生きていくには、全てを平均的にこなさなければならないから。

空き缶拾い以外のコトを蔑ろにする人間は、社会を蔑ろにしているのと同義であり、社会から弾かれる。
そういう考え方。

■制作秘話3
後付設定はあんまり無いけど、それでも破綻を無くそうと必死に設定を作る。
そうすると更に設定が歪になって他の箇所にも綻びが出来る。
それを繰り返すから、こんなスペースを作るはめになるのです。

次で最後。後は残った若菜と十叶と月山の項かな。

#29：Ａ－ｎｏｔｈｅｒ０３／冴城恭子と衝動（後書き）

どうも、秋折紀織です。

鞘朽、衝動、については、破綻しまくりなので、細かい突っ込みは心の中でどうぞ。
問題点が浮かぶ度に後付設定で何とかしていくのでｗ

一応、次で最後にします。
その後は……スピンオフ。気が向いたらですが。

感想、批評、質問、野暮な突っ込み大歓迎。お気軽にどうぞ。
では。

#30：A－nother04／仲谷若菜と瞑主（前書き）

痛々しい設定書き連ねもこれで終わり。

#30：Ａ－ｎｏｔｈｅｒ０４／仲谷若菜と瞑主

注意。
本章は、お蔵入りの設定をグダグダと未練がましく書き連ねるスペースです。
痛いので気をつけてね。

飽くなき赤色。アナザーイクリプス。

■十叶哉治ーとがのう　かなはる
土見台高校、二年生。新聞部副部長。十七歳。（#２６では十八歳）
土見台高校爆発事件に巻き込まれて死亡したコトになっている。
割とどこにでも居るちょっと性欲盛んな高校生として登場させてみた。
Ｌ『十七歳という年齢を考えたら普通です。』
美少女転校生な姫香に猛烈果敢にアタックするも、シュウスケ君ＬＯＶＥな姫香に効くはずも無く。
解理後は、もう興味ないらしい。が、嫌いになったとかではない。
むしろ好意的。
ただし一貫して秋介は嫌いだとか。嫌いっつーか、反りが合わない

らしい。

武装。
居合い刀。ただの刀との違いは、無駄な装飾が無く、鍔（ツバ）がないコト。
橘右京って……解るかなぁ？　あんな感じですのよ。
あ、あと多分石川五右衛門の斬鉄剣。あれも確か鍔が無かったはず。
目標破壊能力だけなら、秋介をも上回る。が、猪突猛進型のため生存帰還は厳しい。
故に総合能力では秋介に劣る。そこらへん気に入らないらしい。

衝動。
『正義の味方』。といっても良い人ではない。
ようするに『悪・即・斬』。るろ剣の牙突の人みたいな感じ。
自分が殺せる悪があればそれでいい。悪を殺すだけの衝動。
十叶が悪と見定めた敵は容赦なく斬り伏せ、それ以外は歯牙にもかけない。
なんとも扱い辛い衝動。ただ、悪が居無い限りは人畜無害なので鞘朽に居られている。
解理前に比べて、軟派な行動は影を潜めた。
が、その後組んだパートナーとはよろしくやっているらしい。

裏話。
最初はコテコテの正義の味方然り、必殺技とか叫ばそうかなとか思ってた。
『秘剣　ツバメ返し！』とか『遊びは終わりだッ！　泣け叫べそして死ねぇ！』とか。
それでも良かったのだけど、活躍の場が無かったので自然と流れていった。
きっと秋介が屋上で若菜と戦ってる時に、下では十叶が『斬って刻んでバラしてやんよ！　活殺・十六夜月華！』

とか叫んでたのかもしれない。何かイヤだ。

十叶哉治ーとがのう　かなはる
性別：男
戦闘スタイル：居合いによる一点突破、集中破壊
年齢：１７
誕生日：５月１１日
身長：１７５．８ｃｍ
体重：６５．８ｋｇ
血液型：Ｂ型
出身地：日本・関東
趣味：生前／マンガ読書、死後／特に無し
大切なモノ：愛用の居合い刀
好きな食べモノ：肉
嫌いなモノ：虫
得意スポーツ：野球

■月山花樹ーつきやま　はなき
土見台高校三年。新聞部部長。十八歳。
本当なら大学受験とかで忙しいハズなのに未だに新聞部部長をしているおかしな人。
常に自前の愛用マイクにＩＣレコーダー、デジカメなどを持ち歩いている。
必殺技は直球ストレート１５０ｋｍ／ｈのド真ん中インタビュー。
聞きたいコトをズバッと質問する。あまりの勢いにインタビューされる人間は思わず答えてしまうとかなんとか。
衝動解理の可能性がある人間（推定衝動解理者）として、鞘朽に目をつけられる。

きっと大朽羽（おおくちば）（架空の地名）の大火災が無ければ解理しなかった。

武装。

衝動が『殺戮』なので、爆弾による広域破壊を好む。

爆弾の入手とか、設置とかその他諸々は突っ込まないで欲しい。

全ては一夜のウチに行われたとか、誰に言っても信じてくれないから。

衝動。

前述の通り『殺戮』。殺人よりもタチが悪く、多数の人間を一遍に殺したがる。

ジェノサイド。

裏話。

必要に駆られて出しただけの何とも薄っぺらいキャラ。

本当は後輩たちからも慕われているちょっとテンションおかしいだけの先輩だったのに……。

彼氏持ちだったけど、自分の爆弾で吹っ飛ばしちゃった。テヘ。

月山花樹　つきやま　はなき

性別：女

戦闘スタイル：爆弾による広域破壊

年齢：１８

誕生日：９月１３日

身長：１６４．１ｃｍ

体重：５１．５ｋｇ

血液型：Ｂ型

出身地：日本・関東

趣味：新聞作り

大切なモノ：長年作ってきた新聞記事の切り抜きを纏めたノート

好きな食べモノ：枝豆
嫌いなモノ：ノイズ
得意スポーツ：水泳

■仲谷若菜ーなかたに　わかな
主人公の親友にして、ライバル的ポジション。
飽くなき赤色は若菜が死ぬトコロから始まるが、実は死んでなかったというオチ。
なんてこったい。つーか、殺されかけて実は死んでませんでしたってヤツ多すぎだろ。
秋介といい姫香といい若菜といい。

若菜は秋介と違い、順当に成長したのでちゃんと二十一歳な顔。

武装。
秋介と同じくナイフ。後鋼糸とかも使う。
近接格闘タイプ。

衝動。
『喪失』。大切なモノを失うコトに喜びを感じるという。
なので、衝動解理してからは大切なモノを作っては殺し、作っては殺しを繰り返していた。
主に殺されていたのは瞑主でのパートナー。ちなみに全員女性。
何故女性かと言うと、男よりも簡単に大切なモノになれるから。主に肉体関係的な意味で。
一度ヤってしまえば割と簡単に心が傾くとかなんとか。
衝動はドM的なのに、やってるコトはドSな鬼畜とかすごい矛盾。
もし若菜が鞘朽に拾われていたら間違いなく駆除の対象にされていただろう。

その辺瞑主と鞘朽の違い。瞑主は危険な衝動解理者でも使おうとしていたので。
若菜なんかきっと可愛い方で、もっと酷い解理者とか居るんだろうけどそういうのは冷凍睡眠とかで必要な時だけ起こして使うみたいな感じ。
鞘朽が慈悲で殺すのに対して、瞑主は利益で生かす。どちらが非人道的かは、判断が付きませんけどね。

裏話。
解理する前は、割と普通な子供だった。
が、中学に入って秋介に出会う。何故か妙に気になったので声をかけたとか。
二人は即効で仲良くなる。お互いがお互いを支えとして生きている感じ。
傍目には、ひたすら秋介を弄っているように見えたとか見えなかったとか……。
あれで意外に（？）秋介はＭなのかもしれない。

仲谷若菜ーなかたに　わかな
性別：男
戦闘スタイル：ナイフによる近接格闘
年齢：２１
誕生日：１１月１１日
身長：１７９．０ｃｍ
体重：６２．４ｋｇ
血液型：Ｏ型
趣味：生前／バスケ、死後／特に無し
大切なモノ：無し（全部『喪失』してきた）
好きな食べモノ：フランスパン
嫌いなモノ：理屈っぽい女

得意スポーツ：バスケットボール

■瞑主という組織
基本的には鞘朽と似たり寄ったり。
ただしこちらは政府と繋がっておらず、どこぞの富豪が支援しているとか。

衝動解理者を保護している。
その目的は、解理者の超人的な戦闘能力を利用するため。
全ては金のため。

戦闘能力さえあれば解理者の扱いはどうでもよく、必要無い時は牢に閉じ込めておいたり冷凍睡眠させておいたり。
若菜は『殺人』の衝動解理者とは違い、常時殺してないと気がすまないとかでは無かったので割と普通に放し飼いされていた。

存在をひた隠しにしていたが、鞘朽も瞑主もおぼろげながらお互いの存在には薄々気付いていたようである。
ただ、名前一つ解らないのでどうしようもなかったが。
秋介が暴走して鞘朽を飛び出したのを偶然、瞑主の一人が気付きそれを若菜が追ったコトであの墓地での再開に至った。

『殺人』系統の衝動解理者を多く飼っていたので、戦闘力だけなら鞘朽よりも勝っていたが、組織自体の規模が違っていたので鞘朽に潰される。
その際、瞑主の上層部の一人が謀反を謀ったとか。それが負けるキッカケになったかどうかは甚だ不明ではあるが。
戦利品として鞘朽に資金やら施設やらを取られる。
上層部は全員死亡。構成員の一部は鞘朽に入るコトに。他は機密の

ために……。

とりあえず、これで終わりかな。
気が向いたら本編の続き的なモノを書こうと思いますのでその時は
どうぞよろしく。

#30：A－nother04／仲谷若菜と瞑主（後書き）

どうも、秋折紀織です。

ここまで読んでいただいていたらこれ幸いです。
ひとまず、ここを最終話とし続きを書く時は新連載というカタチでと思っています。
まぁタイトルは変わらないと思いますので、その時はどうぞよろしくお願いします。

感想、批評、突っ込み、ノリ突っ込み等々ありましたらぜひどうぞ。
では。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5138c/

飽くなき赤色

2010年10月9日06時06分発行